

## 第2部

### 文明病の治療薬

# 人間の尊厳を取り戻すための キーワード

# 12

第1部では文明が人間の尊厳を危うくする要因になっていると述べた。第2部では人間の尊厳を取り戻すための12のキーワードを紹介。いわば文明病の治療薬だ。

第3部では、このキーワードを使って、福祉ワーカーが懸案の課題を解く方法を紹介する。

# 人間の尊厳を取り戻すキーワード一覧

- |           |   |
|-----------|---|
| 1.当事者の遇し方 | ①本人発<当事者である私・本人が主役だ><br>②一人ひとり<私をひとまとめに見るな>   |
| 2.問題解決の方向 | ③フェアネス<ハンデをつけてほしい><br>④スロー<ご近所づきあいを取り戻したい>    |
| 3.救済の対象   | ⑤日陰に光を<日陰に置かれた人を救え><br>⑥森羅万象<動物も樹木も救済し合っている>  |
| 4.問題の捉え方  | ⑦ポジティブ<障害は才能、ワルも能力だ><br>⑧全体を見る<助けと助けられは共同作業>  |
| 5.問題解決の人材 | ⑨アマチュア<世話焼きさんを登用せよ><br>⑩ひらく<本業や趣味の中で福祉活動ができる> |
| 6.問題発生防止策 | ⑪さかのぼる<問題が起きる前から備える><br>⑫権力の抑止<権力は暴発するから抑止せよ> |

# 人間の尊厳を取り戻すための12のキーワード

## <目次>

- ①本人発／4
- ②一人ひとり／19
- ③フェアネス／27
- ④スロー／38
- ⑤日陰に光を／57
- ⑥森羅万象／73
- ⑦ポジティブ／78
- ⑧全体を見る／107
- ⑨アマチュア／115
- ⑩ひらく／121
- ⑪さかのぼる／132
- ⑫権力の抑止／143

## 1.当事者の遇し方①

# 本人発

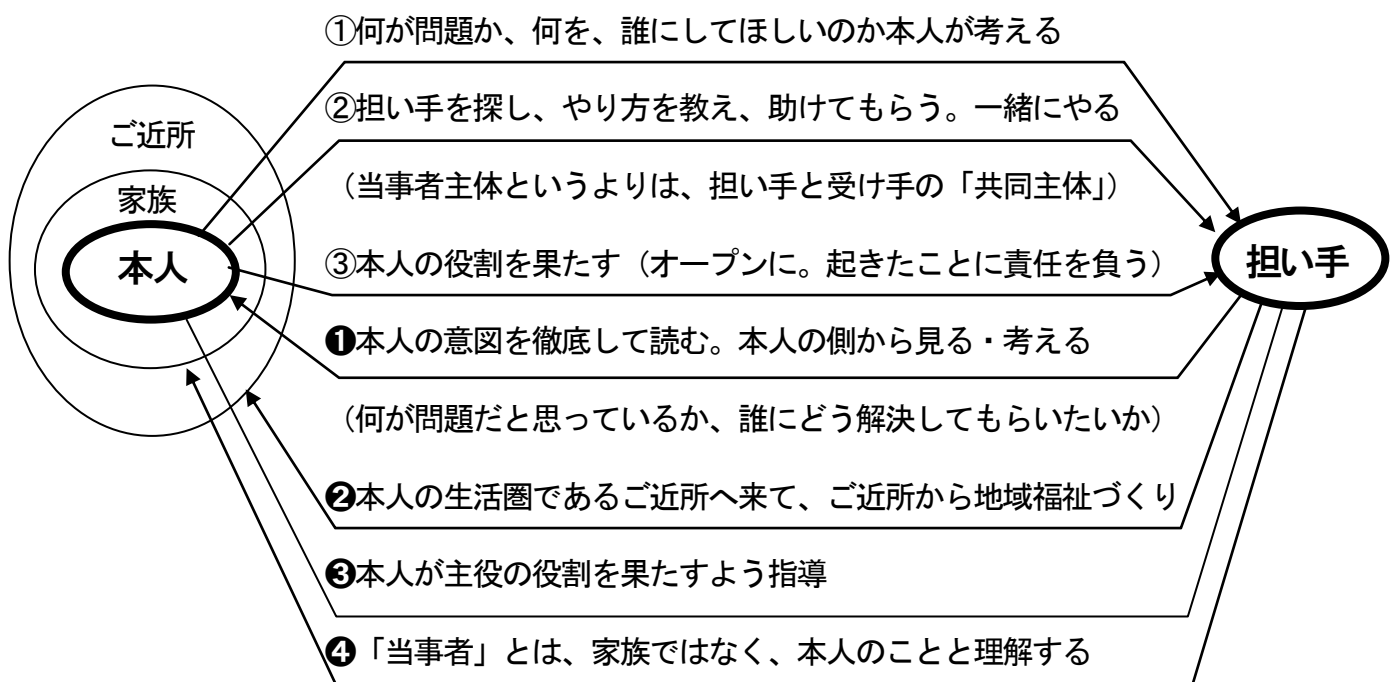
問題の解決を主導するのは本人だということです。多くの人は、支援する側が主導するものと思っています。自分で解決ができない場合は、支援者を探し、「こうしてほしい」と助けを求める、それが本人のやることなのです。

## ■ 「本人発」の解説

### ■ 「当事者主体」の全体像を図にしてみたら…

当事者が、自分の問題の解決に自分が主役として行動すること。これが「本人発」だ。「当事者発」と言ってもいいのだが、それだと「家族発」と誤解されそうなので、正確には家族ではなく当の本人から福祉は発するのだということをはっきりさせるために、「本人発」とした。

「当事者主体」を分かり易くするために、以下のように図にしてみた。



図は、大きくは、左が当事者 (受け手)、右が担い手となっている。上の3つが、当事者の側がやること。下の4つが、担い手の側がやること。この順に解説していこう。

# 1.「本人発」で当事者本人のやるべきこと

- ①何が問題か、何を、誰にしてほしいのか本人が考える。
- ②担い手を探して、どのように助けてほしいのかを伝え、助けてもらう。一緒にやる（当事者主体というよりは、担い手と受け手の「共同主体」）。
- ③本人の役割を果たす（オープンに。起きたことに責任を負う）

誰に助けてもらいたいかは、まず本人が考えることなのだが、それが理解されていない。

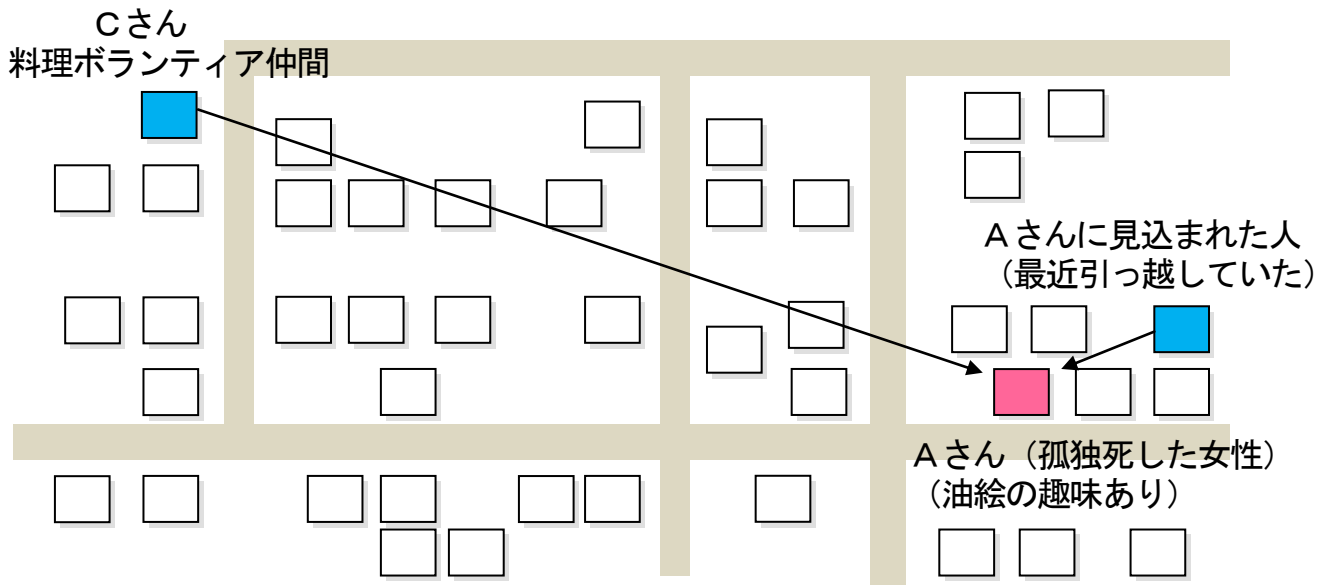
## ①引きこもりの人も、自分を見守る人を指名していた！

今は見守り活動が盛んだ。見守りの必要な人が見つかったとして、その人の見守りは誰が担当すべきか。その時、本人の意向を考慮しようとする人はいないようだ。「私はボランティアなんだから、私が見守りをする」「私は民生委員だから」「私は班長なのだから」で決まりだ。活動は担い手が主導することが、当たり前だと思われる。

引きこもりの女性。民生委員やボランティアの訪問は受け付けなかったが、ご近所の2人には「何かあったら頼むね」と言っていた！「誰に見守ってもらいたいかは、私が考える」ということだ。

私は支え合いマップ作りを普及させている。住宅地図を広げ、住民と一緒に、気になる人には誰が関わっているかといったことを記入していく。そこで分かるのは、一人暮らしの当人が、自分は誰に見守られたいかを考えているということだ。

事例では、この2人を特定するのにだいぶ苦労した。本人が見込んでいる人が必ずいるはずだと真剣に探した結果、ようやく見つかったのです。そういう姿勢がなければ、見つからない。あとで出てくる、「本人の側から見る」をどれだけできているかが問われるのだ。



本来見守りとは、見守られる側がリードするもの。たとえば、「今日は親戚の家に行きますから」と親しいご近所さんに自分の行動を伝え、カギを預けるのが、見守られ上手さんだ。

見守られ上手さんとは言っても、そういうことができている当事者がどれぐらいいるかとなると、とても少ないのが現状である。ということは、本来は当事者が見守る側をリードすべきなのに、まだその意識になっていないし、行動も伴っていない、という現実があるのだ。これからは当事者主導になれるような啓発活動が必要だ。

## ②見守られる側がすべきことがこんなにも！

なぜ、そんなに当事者主導にこだわるのか。高知県の保健所が、孤独死の事例と孤独死を未然に防げた事例を徹底分析した。その結果、孤独死を防げるかどうかは、本人が自分の命を守るためにどれほどの努力をするかにかかっていることがわかったのだ。ポイントは、毎日外へ出て自分をアピールする、異変に気付いてもらうために同じ人と会う、同じ道を歩く、自分の体調などをよく知ってもらうために人を家に招くなど、10数項目にわたっている。

日々のこういう努力が、自分の命を守ることにつながるのである。こうなると、見守りというのは、一見見守る人の活動のように見えるが、じつはその反対で、見守られる側がどれだけ努力するかにかかっていた。だからこそ、「あなたが主役なんですよ」と、当事者を叱咤激励する必要があるのだ。

最近では、支援の必要な当事者として、積極的に周りの人に助けを求めることができる「助けられ上手さん」が出現している。介護は特に大変な活動だが、その介護者の中にも助けられ上手な人がいる。

夫の徘徊が多くなり、もう限界だと感じたある女性は、自分たちが住むマンションの住民を集めて説明会を開き、支援を求めた。さすがにやりすぎかな、と悩む彼女に、「困り事をオープンにして、助けを求めるのがあなたの仕事です。説明会の開催は、あなたが立派に自分の仕事を果たしている証拠なのですよ」と励ました。

私は、助けられ上手という発想を提示している。当事者が問題をオープンにし、積極的に助けを求めることから福祉は始まる。そして福祉は、担い手と受け手の共同作業である。つまり、両者がそれぞれ与えられた役割を果たすこと。担い手が取



り組みやすくしてあげる、取り組み方を教える、一緒に取り組むなどが受け手の役割になる。

だから、じつは担い手だけでつくる「ボランティア活動」グループというのはおかしいのだ。本来、担い手と受け手が一体であるべきなのだから。両者が混在する活動グループならいいのだが。

### ③「当事者主体」でなく「共同主体」が正しい？

北海道のある町での講演でそんな話をしたら、1人の自治会長が近寄ってきて、私にこう言った。「じつは明日、生活支援サポーターの候補者を集めて研修会を開くのだが、あなたの発想が正しい。そこで明日は、このサービスの受け手になりそうな人も一緒に研修を受けてもらおうと思っている」。そうすると、「当事者主体」というのもおかしい。「共同主体」が本来のあり方かもしれない。



一人暮らし高齢者と住民と一緒に見守り方を学習  
愛知県安城市の城南町内会で（同町内会主催）

### ④本人発なら、プライバシーの問題も生じない

このように、本人から発信していくのが当たり前になれば、①福祉の問題が表面に出てくるという利点もある。隠していたら助けてもらえないのだから。②しかも、本人が何をどうしてほしいのか教えてくれるのだから、助ける方はとてもやり易い。③問題によっては自分で解決してしまう、または④同じ問題を抱える仲間と助け合

うから、効率もいい。④本人の方から問題をオープンにするから、プライバシーの問題も生じない。

③のように、最近はセルフヘルプグループが活発に活動していて、社会問題も当事者たちの力で解決してしまうようになった。殺人に時効を適用しない、裁判に被害者も陳述できるなど、当事者が動くことではじめて解決した問題がたくさんある。

## ⑤ギャルママなりの「母親らしさ」でいいじゃん

日本テレビ「NNNドキュメント」



### ◇おしゃれも育児も楽しみたい

バサバサのつけまつげにバービーちゃんふうの茶髪、アニマルプリントのミニスカートに華美なネイルアート—これでおしゃれな幼児を抱いていれば、典型的な「ギャ

ルママ」像の完成だ。

世間一般のギャルママのイメージはというと、「派手」「幼い」「子育てがちゃんどできるのか心配」など、はっきり言ってあまりよろしくない。大阪のマンションで幼い姉弟を餓死させたあの母親も、いかにもギャルママっぽい写真が出回ったが、こうした事件も影響しているだろう。

当のギャルママたちは、そんな視線はどこ吹く風と、ハイヒールでカツカツ歩いているように見えるので、彼女たちもまた「悩める存在」であるなどとは考えたこともなかった。しかし先日、日テレ深夜のドキュメンタリー番組「NNNドキュメント」を見て、見る目がガラッと変わった。

番組によれば「ギャルママ」とは、若くして出産し、育児もおしゃれも楽しみたい母親たちのことだ。一見、無邪気そうなギャルママたちだが、実際は楽じゃなかった。「ママの輪に入れず、孤独感がすごい」「見た目だけで、まわりの人が冷たい

目」「長女が泣くと、虐待しよるって目で見られた」。

孤独なギャルママたちが悩みの解決法に選んだのは、やっぱりこれーギャルママ同士のセルフヘルプであった。

### ◇今は236ものグループが！

ギャルママ雑誌のモデルをしている日菜あこさんは20歳で出産し、28歳になった今は3児の母。そして1万人が登録するギャルママサークルの代表である。

初めて子どもを産んだ時は、泣いてばかりいたという。歩いているだけで舌打ちされ、ママ友もできなかった。はじめは「普通のママにならなければ」と髪を黒く染めて地味な服を着たが、一番つらいのは「ぜんぜん楽しくない」ことだった。「見た目だけのお母さんらしさは捨てて、自分らしくいよう」と、もう一度ギャルの格好に戻ったら、自分が楽しいから子どもにも笑顔になれて、好循環になったという。

その後、ネットで同じ境遇のママたちを募ってみた。これが、ギャルママサークルの始まりだ。「同じような服装のママと会ったら、すごく話が弾んで、わかるわかる！ってことばかりで、この服装が目印になり、深い友だちがたくさんできた。今ではあの時、自分らしい格好に戻ってよかったなと思います」。

現在、日菜さんのリーダーシップのもと、全国で派生した236ものギャルママサークルが、携帯サイト「GAL×BABY」（ギャルベビ）で1つにつながっているというから驚いた。世間が「幼くて危なっかしい」と思って見ているギャルママたちが、私たちの知らぬところでこれだけの組織力、助け合い力を発揮し、先輩ママが後輩ママのサポートをしていた。これがなかったら、虐待事件はもっと増えていたはずだ。

### ◇被災地でギャルママイベント

日菜さんたちの活動にはやはり「当事者ならでは」の特色がある。例えば被災地

への支援。震災後、全国ネットを通じて集まった「ママが本当に必要とするもの」を850箱分送ったというが、さらにユニークなのは現地で実施した「ギャルママ・イベント」だ。

母子で楽しむアトラクションを行い、無料の子ども服をお店風にディスプレイしてお買い物気分を選んでもらうのだが、目玉企画は「ヘア&メイク」コーナーである。ギャルママモデルをしている日菜さんらが、被災地のママたちをおしゃれに変身させてあげるのだ。

日本テレビ「NNNドキュメント」



これには「日常生活にも不自由している被災者に、つけまつげ…？」と番組の女性ディレクターは半信半疑だったそうだが、実際には順番待ちができるほど好評で、盛り髪カールにギャルメイクをしてもらったママたちは、「震災後、楽しいことが何もなかった」「テンション上がっちゃって、子

どもがいるのに、いないみたいな気になっちゃった！」と喜んでいて、これぞ、当事者にしか思いつかない支援だろう。

ギャルママが抱える問題の中には、病気の問題だってある。「子宮頸ガンは20代～30代のママに一番多い」のに、ギャルママたちの関心は低い。「行政に頼らず自分たちで解決しよう」と、日菜さんらは数千人が集まる人気のギャルママ・イベントと組み合わせるなどして、全国で子宮頸ガン啓発活動を始めたが、そのやり方も一味違う。「専門家が難しい言葉で説明しても聞かないことは、自分たちが一番よく知っている」から、講師を務めるのも全員ギャルママだ。ギャルママが、ギャルママの言葉で、ギャルママを説得する。これまた、なるほど、である。(以上、日テレ「NNNドキュメント」より)

## ◇お役立ち情報をマガジン風に

ネット上のギャルママ・サイトをのぞいてみると、さすが現代っ子のママたち。全国の仲間が瞬時につながるインターネットという利器を生かし、夢も活動もどんどん膨らんでいた。

「mama press」



前述の携帯サイト「GAL×BABY」(ギャルベビ)では、全国200のギャルママサークル(ギャルママ用語で「ママサー」と言うのだそう)のメンバーがプリクラ写真で地域別に掲載されている

ため、どの地域に何人のママがいるのか一目瞭然。これを生かし、「ママサーが存在しないエリアがなくなるまでサークル(立ち上げ)支援を行っていきます」というから、野望は全国制覇である。

ギャルベビではさらに、「全てのママが編集スタッフとして投稿したお役立ち情報」をメールマガジンにまとめてメンバーに無料で送信しているし、仲間に役立つ情報を活発に発信するリーダー的存在「カリスマ・ママ」の育成も行っている。

ネット上では他に、ギャルママたちが編集スタッフとなり、全国のママたちから寄せられる声に応じた記事を掲載する“リクエスト型新聞”「ママプレス」も創刊。

「ママたちの『夢』や『キモチ』をあきらめるのではなく、実現できるヨノナカをつくっていく」ために協働してくれる企業や行政も公募している。ギャルママ・パワー、恐るべし。

## 2.本人発で担い手がやるべきこと

- ①本人の意図を徹底して読む。本人の側から見る・考える（何が問題だと思っているか、誰にどう解決してもらいたいのか）
- ②本人の生活圏であるご近所へ来て、ご近所から地域福祉づくり
- ③本人が主役の役割を果たすよう指導する
- ④「当事者」とは、家族ではなく、本人のことと理解する

以上の4点が、担い手が受け手に対してすべきことだ。まず大事なのは、担い手が当事者の側に立って、その人が何を望んでいるのかを徹底して読むということができているかということだ。

### ①「私は嫁のためにデイサービスに行っておげボラ」

業界関係者が「当事者主導はもう実現している」と言うのは、介護保険でも当事者が主体的に選んでいるのではないかといった主張のようだが、それは本当か。

「私はね、嫁のためにデイサービスに行っておげボランティアなのよ」とある利用者が私に言った。自分には行きたくないが、嫁が行きなさいとせつつくから、仕方なく行っているの、ということだ。サービスを受けるかどうかは本人が決めることなのに、実際は必ずしもそうなっていない。

社会福祉協議会のスタッフと懇談している時に、彼らにこんな質問をしてみた。「みなさんの職場でもデイサービスをやっているけど、自分はこのサービスを受ける気はある？」

途端に彼らは一瞬ぎょっとしてから、「やだー！」と言って、その後は皆で大笑いした。冗談にもそんなことは聞くな、ということだった。自分は受けたくないサービスを提供しながら、当事者はサービスを選べるなどというのは、少々おかしくないか。

## ②看板に「工務店」。じつはデイサービスセンター

都内にあるこんなデイサービスセンターが人気だと聞いた。施設の看板には「工務店」とある。利用者は若年性認知症の人で、各自、名刺も持っていて、朝「出勤」するときはタイムカードを押す。「〇〇さんは、今日は幼稚園へ行って、△△の修理をお願いしますね。「はいよ」。

当事者が、どういうデイサービスなら納得するのか、ちょっと考えれば、こんなアイデアが出てくるものなのだ。このデイこそ、当事者の願いをよく読んだ人が考え出したものだなと納得できる。

## ③銭湯で毎晩、服をたたむ—これが私にとってのデイサービス

知人が銭湯に行き、湯船に浸かって、ふと脱衣場を見たら、私の服を畳んでいる人がいる！ 慌てて戻ったら、番台のおばさんが、「この人は認知症でね、毎晩、服をたたみに来るの。そうすると気が休まるらしいんだよ。あんたもやらせてあげなさいよ」。客はみんなそうしているという。この認知症の女性にとっては、ここがデイサービスセンターなのだ。番台のおばさんが所長？

デイサービスを嫌がる人の行動を丁寧に見ていくと、その人なりのデイサービスを自ら実践しているなということがわかってくる。



50世帯の小さな地区で、デイサービスを利用している人が5名いた。そのほとんどの人が、デイを利用しない日には畑仕事をしていた。それをご近所さんが手伝っているのだ。なるほど、彼らにとっては普段は、畑仕事がデイなのだなどと納得した。

当事者主導ということは、このように、本人が何を考え、何をしたがっているか、何をしてもらいたがっているかを、とことん「読む」という行為なのだ。それをやれば、何らかのサービスをする以前に、本人は本人用のサービスを自分で作ってしまっているという場合が少なくないのである。

#### ④「あの施設に入れられるのだけは勘弁してくれ」と理事長

マップ作りの場で、住民に尋ねてみる。「皆さんは、要介護度が重くなったら、施設に入りますか?」。この頃では、以前とは異なる反応が出てくる。皆さん、にやっと笑って、「入りようにも、入れないじゃないか」。順番待ちということだろう。それに、本人の希望は別として、施設以外に選択肢があるのかという人もいる。

老人ホームをたくさん作ってきた、全国でも名を知られた理事長がだいぶ弱ってきたので、部下が「そろそろ先生のおつくりになったあの施設に入りましょうか?」と進言したら、途端に理事長、「あそこに入れられるのだけは勘弁してくれ」と泣き出したとのこと。施設を作るのは得意だけど、そこに入るのはイヤ?

#### ⑤同じベッド生活でも、こちらは一国一城のあるじ

ショッキングな話だが、施設をつくった人自身、そこに入るのは絶対に嫌だというのである。では、施設に入らないでどうするのか。これまで数十年、全国でマップ作りをしてきたが、興味深いのは、一人暮らしでベッド生活という人が、案外い



るということだ。

88歳のH子さん。要介護でベッド生活、ヘルパーが1日4回。それでも一人暮らしを守っている。彼女の家が、一人暮らし高齢者達のたまり場になっていて（下の写真）、彼らは「（この人の）様子を見がてら」来るのだと。施設と異なり、1人で一国一城のあるじだ。

## ⑥福祉活動に「流行」がある奇怪さ

「サービスが選べる」とは言っても、選択肢は限られている。業界関係者のやり方は、大雑把に言えばこういうことだ。市町のセンターにある拠点にいて、そこからニーズを推測し、サービスをつくり、一方で住民を集め、教育し、組織を作らせる。そして「サービスを受けたい人はこっちまで来なさい」と当事者に呼びかけるのだ。



この頃では、当事者主導どころか、当事者の声を直接聞くまでもなく、彼らのニーズを自分たちで決めてしまっている。住民はこういうサービスが必要だろうと推測し、それでサービスを作ってしまったのだ。

介護保険絡みで厚労省が住民の活動にまで深入りするようになったせいか、行政関係者も民間事業の関係者も、一般住民も、みんな同じ発想になってしまっている。そうして、福祉活動には流行というものが生まれた。今はサロンと認知症カフェと子ども食堂。全国のどこへ行っても、関係者の関心事はこれのみ。

## ⑦当事者がいるご近所まで出かけるのが本当の当事者主体

振り返って、元々福祉というものは、当事者がいて、その人が何を望んでいるのかを探るものではなかったのか。もし当事者の声を真摯に聞くのであれば、どうすべきか。

当事者は要援護のため、自宅のあるご近所が生活圏であり、そこから出られない。だからやむを得ずご近所からニーズを発信している。彼らの声は、関係者がいる市のセンターや地区センターなどにも、全く聞こえない。筋論から言えば、当事者がいるご近所にまで行くべきなのだ。そこで彼らの声を丁寧に聞き、どういう支援を必要としているのかを把握するのである。

だから、当事者主体と言うのなら、まずご近所まで足を運ぶべきなのだ。そして当事者が生活しているこの「ご近所」を福祉のまちにすることが、福祉のまちづくりの第一歩になる。

## ⑧関係者全体が一丸となって努力していかねばならない

本人発というのは、当事者本人だけがいくら頑張っても実現するものではなく、担い手も含めた、しかも関係者全体がこれに一丸となって努力していかねばならないのである。

関係者全体となると、例えば市町村のセンターで指揮を執っている人たちも、自らご近所まで足を運んで、当事者の声に耳を傾け、それを実践するためにひと頑張りする必要があるのだ。本人発だから、本人がその気にならない限り駄目だ、などと言っていては前進しない。

## 1.当事者の遇し方②

# 1人ひとり

1人ひとりの違いを尊重し、個々のニーズに個別に対応しているか。当たり前のように、今は対象をひとまとめにして十把ひとからげで扱う傾向があるので、意外と守られていない。個を尊重するよりも、家族ぐるみ、会社ぐるみ—相手を「ぐるみ」で扱うのが日本人の悪い癖になっている。

また、本人が、自分を1人の個人として扱ってもらうように、私自身固有の考え方を持っていることを主張するのも「1人ひとり」だ。

## ■「1人ひとり」の解説

### 1.人間を「ひとまとめ」に扱う気風

意外なことだが、文明が発達していくと、個を大事にすることが疎かにされがちになる。文明は進化しているだけでなく、効率化することで、退化している部分もあるのだ。福祉は文明のせいで、人間を分別収集し、しかも十把一絡げに扱うことが当たり前になってしまった。怖いことだが、私たちも、十把ひとからげで扱われることに違和感を持たなくなっている。

#### ■介護保険サービスを選ぶのは家族でなく本人

以前、私たちは家族のメンバーと一体として（ぐるみで）扱われていた。それが最近、ようやく個人個人を大事にする傾向が出てきた。家族から孤族へ、というわけだ。

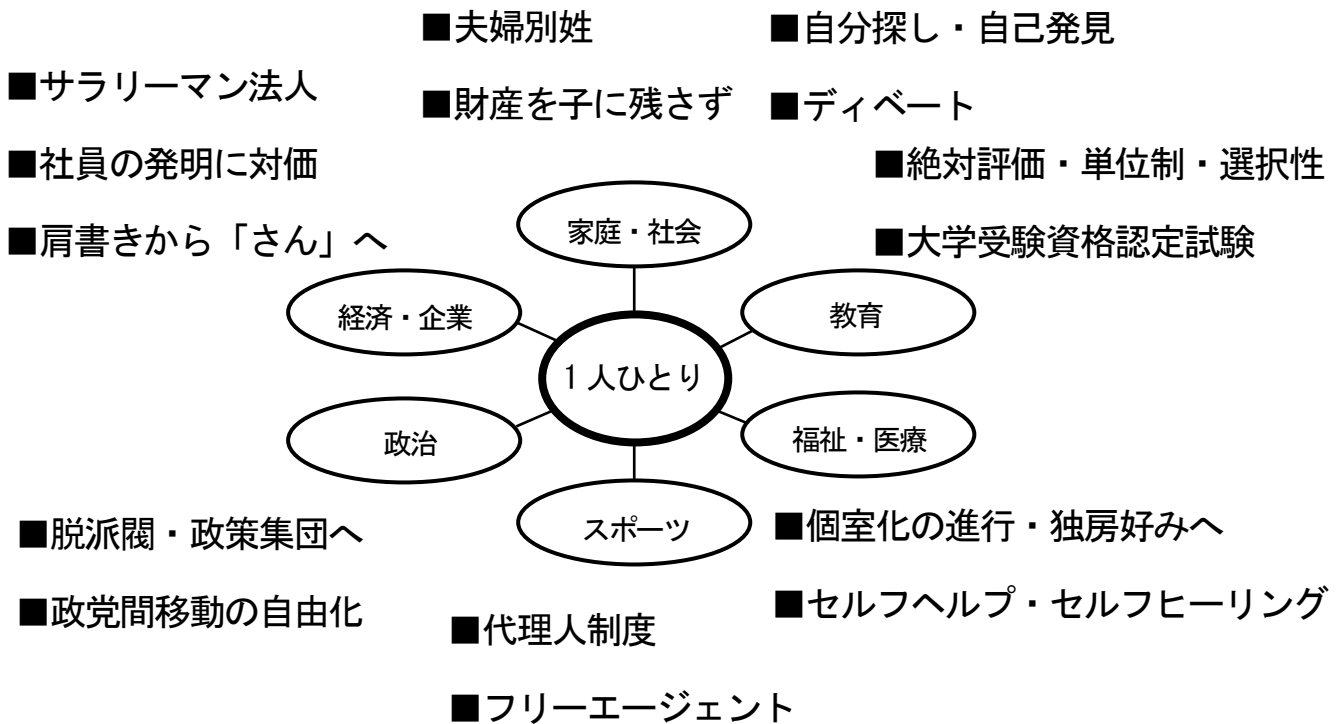
介護保険サービスを誰が選択するかと言えば、大抵は本人ではなく家族だろう。介護保険は今では、家族のためのサービスと見られるようになっている。デイサービスの良し悪しを住民と議論していた時、あるお嫁さんがこう言ったのが印象的だった。「嫁の私がいいって言うんだから、デイはいいサービスなんだよ」。

### 2.個としての「私」を主張し始めた

#### ①なぜ私が夫の名前を名乗らねばならないの？

「1人ひとり」の発想を社会の動きから拾ってみると、以下のようにいろいろあるものだ。

①**家庭・社会**では、夫婦別姓がこれに当たる。なぜ私が夫の名前を名乗らねばならないのか。素朴な疑問だ。財産を子どもに残すのではなく、自分で使い切る。わたしと子どもも違うというのだ。ディベートは、自分自身の考え方を確認するための行為でもある。



②**教育**では、大学受験資格試験は、それぞれの事情で高校に進学できなかった人も、その人なりの生き方を尊重するという事だろう。

③**福祉・医療**では、老人施設でも個室を求める風潮、刑務所でも独房がいいという人が増えているようだ。福祉も、それぞれが持っている福祉課題は人それぞれだから、それに沿った様々なグループが生まれている。障害児を育てながら働く親の会、シングルマザーで社長をしている人の会とか。

④**スポーツ**では、代理人制度が生まれた。選手1人ひとりが代理人を立てて球団側と交渉する。

⑤**政治**の世界では、今までは派閥に属していたけれど、もっと自分の主張を反映させようと、政策集団を作るようになった。政党間の移動も激しくなった。自分の主張がどの政党で反映されるのかを読んでいるのだ。

⑥**経済・企業**では、肩書でなく「さん付け」という企業も現れた。社員の発明を個人の仕事と評価されるようにもなった。

## ②自分の主張を持たないから、いじめ集団ができる

皆と同じだから安心するのではなく、皆と違うことに自信と誇りを持つ。

いじめ集団ができるのも、それぞれが自分の主張を持たないからだろう。自分がないから、結局、仲間の考えに雷同してしまう。個を尊重するということは、まず各自が自分自身、これを育てていかねばならないのである。

## ③できる子は何人でも優をあげる

生徒の通信簿を、今までは「優」の子はクラスで何人と決まっていたが、これからは、できる子は何人でも優をあげる、つまり絶対評価へ転換するようになった。個を大事にするとは、そういうことだ。

# 3.個別ニーズに応える

最近、個別ニーズに応えるという企業が増えている。

足の大きさが左右で違う客に、その客だけの靴を作る靴屋さんが人気だ。個人に合った化粧品を作る。1人ひとり異なるニーズに異なる支援を、ということだ。

オーダーメイドがこれにあたる。ワンストップサービスも最近の流行だ。1つの窓口で、1人のすべてのニーズを解決してあげます、ということだ。

「寄り添い」という活動も広がっている。悩める人に誰かがペアで寄り添ってあげる。企業なら新入社員にベテラン社員が寄り添うとか。1人が1人に、である。

## 4. 寄り添い人

特定の個人にその人だけのサポーターを付けるというやり方が広がっている。アメリカでは、いじめられている子1人ひとりにメンターとして上級生がついている学校がある。

新入社員にメンターをつける

新入生にサポーター

ジョブコーチ（障害者が企業で働くとき、施設の職員がついていく）

補助教員・学習支援員（小学校で）

不良少年に公的付添人

認知症の人に徘徊の寄り添い人

リハビリ犬・介助犬・盲導犬

## 5. 自前(セルフヘルプ)

自分の問題を手っ取り早く、自分で解決してしまおうという人が増えているようだ。人に頼んでいては、満足できるものが作れないという人が、ならば自分で作ってしまおうと動き出した。

セルフヒーリング

私募債

グループリビング（みんなで住む場所をみんなで作ってしまおう）

自己治療（自己透析・自己注射）

自分用化粧品

自分で家を建てる

### ① 難病のわが子のために治療薬を自身で開発

映画「小さな命が呼ぶとき」で話題になったジョン・F・クラウリー氏について同名の原作（ジータ・アナンド著、戸田裕之訳／新潮文庫）を読むと、親の心理がよくわかる。3人の幼い子どものうち2人が、遺伝性の難病「ポンペ病」と診断された。全身の筋肉が日ましに衰え、多くの子が2歳の誕生日も迎えられないという恐ろしい病だが、治療法は確立されておらず、成功する可能性のある酵素療法の研究は遅々として進んでいなかった。

そこに希望があるのに、時間だけが過ぎていく。待つことに疲れたクラウリー氏は、優秀なビジネスマンとしての自らの能力と経験、そして親だけが持つ切迫感を持ち込むことで事態を打開していくしかない、最前線に飛び出していくのである。

彼はノートルダム大学のロースクールを卒業後、ハーバード・ビジネス・スクールを卒業し、若くして大手製薬会社の重役に上り詰めたやり手だ。そのうえ決して諦めない



粘り強さと、人々を率いるリーダーとしての資質に恵まれていた。

#### ◇新薬研究開発会社のトップに

クラウリー氏もはじめは他の親たちと同じように、ひたすら研究の成功を祈り続けた。数人の研究者がそれぞれ異なる方法で酵素を作ろうと試みていたが、部外者である一般の親は蚊帳の外に置かれ、なかなか情報も手に入らない。

そこで資金集めに奔走し、ポンペ病研究のための財団を立ち上げ、見込みのある研究に資金を提供することにしたが、それでも子どもを臨床試験に参加させることはできず、支援している研究の進捗状況さえよく分からない。

ついに彼は、大手製薬会社のマーケティング部門の重役という地位を捨て、自分が立ち上げに関わったポンペ病研究のためのバイオテクノロジー会社「ノヴァザイム」のCEOに就任する、と妻に宣言する。「なぜそんなことをあなたがしなければならないのか」と驚く妻に、彼は、待つだけの生活にはもううんざりだと告げるのだ。

「君だってそうだろう。家で電話を待てと言われるのももうたくさんじゃないか？ あの子たちのために何かを起こしてやれる人間はたった一人しかいないと思うんだ。つまり、ぼくだよ。これは自分が直接関われるチャンスなんだ。傍で応援の手を振っているだけではもういやなんだよ」

#### ◇患者家族と研究員の対面を

彼はその計画を実行に移し、ノヴァザイムの研究を猛スピードに進めた後、このベン



テレビに登場したクラウリー氏（フジテレビ）

チャー企業を世界最大のバイオテクノロジー会社の1つ、ジェンザイム・コーポレーションに売却することに成功する。彼らの方が資金があり、研究をより早く成功させる可能性が高かったからだが、その際クラウリー氏は1つの条件をつけた。自分が、ジェンザイ

ムのポンペ病治療薬研究プロジェクトのトップに立つことである。

こうして彼は、わが子が患う病との闘いにおける最前線チームのリーダーとなったのだ。彼は研究チームを鼓舞するため、それまで業界ではタブーとされてきたことを実行する。彼らが開発に取り組んでいる薬を必要としている当事者—すなわちポンペ病の患者とその家族を招待し、従業員と対面させたのだ。当初はこのやり方に不満を持った従業員たちも、いざ患者と対面すると大きく心を動かされたという。

その後彼は、ようやくわが子を治験に参加させる準備が整ったところでジェンザイムから退く。開発した酵素は症状を改善する効果があり、世界中の患者が投与を希望していたものの、まだ製造できる量が少なかったため、批判を避けるためには一般人である必要があったのだ。子ども達の命は今も、無事つながれている。2007年にはこの薬が日本でも認証され、日本の患者たちを大変喜ばせたそうだ。

当事者としての切迫感を持つ人が、本業の腕を生かして動けば、これだけ大きな力を発揮するのだ。

## 2.問題解決の方向①

# フェアネス

ゴルフでは、うまい選手とまわる時は「ハンデいくつ」をつけてもらう。これがフェアネスだ。米国の大学入試では、黒人の学生は白人やアジア系の学生より有利な条件を付けてもらえる。しかし日本人はこれが嫌い。「平等」が好きなのだ。ちょうど相撲のように。欧米人は、相撲はアンフェアだと言うだろう。日本は、根本のところ福祉が分かっていない国かもしれない。

## ■「フェアネス」の解説

### 1. サービスを受ける屈辱感はどうやって払拭？

寝たきりの人の送迎には、ベントリムジンを使おう。「あなたも乗りたかったら、寝たきりになってみたら？」とお隣さんに自慢できる福祉こそが本物。要援護者には「並み以下」でも「並み」でもなく「並みより遙かに高い」サービスを。ベントはその象徴なのだ。

#### ①「家の前にデイサービスの車を横付けしないで！」

デイサービスの利用者から、「私の家の前に、デイサービスの車を横付けしないでほしい」という苦情が来るようだ。デイサービスの人たちは不審に思っているだろう。横付けするのはごく普通の車で、デイサービス自体、貧しい人のためのサービスといった暗いイメージはないのだから。

ただ、福祉の恩恵を受けるということ自体が、人々に屈辱感を与えるのだ。ではその屈辱感はどうしたら払拭できるのか。

子ども食堂を運営している人の中にも、同じような危惧を抱いている人がいる。貧しい人が慈善救済を受けに来るといった構図である。正月を越せない人のために、公園などで、おにぎりや豚汁を配布しているのも同じ。もらう側の屈辱感はどうしたら払拭できるのか。

#### ②ベントやリムジンなら傷つかない

変な話だが、「並み」程度のサービスが屈辱感を与えたら、あなたはど

う思うか。「並み」なら文句はないはずだと、担い手の方は言うだろうが、もらった方は違う心理が働くのだ。「並み」以上、もっといえば「並みよりはるかに上」のサービスだったらどうか。それがベンツであり、リムジンなのである。その時、サービスを受けた人に新しい感情が生まれる。「どうだ、凄いだろう！ 羨ましかったら、寝たきりになってみれば？」と。

### ③弱者にしかわからない心理

弱者の心理は複雑だ。たとえば、自分が弱者であること自体が耐え難く、誰かから攻撃を受けても、見下されても、支援を受けても、つらい。いつも誰かに反発を感じてしまうといったことがある。

では、そういう弱者が、提供される支援にどういう条件が付けば満たされるのか。それが、ベンツだ。並みよりはるかに高いサービス。これだけは譲れないのだ。これは弱者になった人にしかわからない心理だろう。

### ④「火炎放射器付き車椅子」だぞ。驚いたか！

右の写真は、火炎放射器付き車椅子。ほぼすべての地形に対応できる車輪を装備。座席は海洋レスキュー隊のヘリのもので、4.5mの炎を発射することができる。



Greathouse Labs

開発したランスさんは、兄がパーキンソン病になった時、「見るからに医療器具そのまま」の車椅子ばかりであることに疑問を抱き、「普通の男たちが羨むほどカッコいい」車椅子にさせようと決心したという。ネットマガジンでこの車椅子を紹介した男性記者は、「この車椅子に乗る

ためなら、オレは自分の足を折りたくなる！」。

ポイントは、当事者がプライドを守れるあり方。それには尋常な車椅子では駄目で、健常者が度肝を抜かれるほどの奇抜さ、とともにレベルの高さが必要なのである。

## ⑤障害者を一流のショコラティエに！

日本財団の「ゆめちょ総選挙」（寄付金付き自動販売機「夢の貯金箱」の寄付金の使い道を投票で決める事業）で選ばれた企画の1つが、「高級ショコラ作りを福祉施設がリードする」ことを目指すプロジェクトだ。著名なトップショコラティエと協働して商品企画や開発を行った上で、全国の就労支援施設に技術移転を行い、研修施設の整備やショップの立ち上げ支援も実施するという。

日本財団のサイトに掲載された夏目浩次さん（ラ・バルカグループ代表）のインタビュー記事によれば、日本に専門の職人が少ないチョコレートは、じっくりと地道に手をかけることでこそ美味しい製品が生まれるため、丁寧に手作業をすることの得意な障害者にぴったりなのだという。

### ◇安倍総理も利用した高級フレンチレストランも

このように「障害者の店だからこそ、敢えて高級品で勝負する」という方法は、飲食業界で既に成果を収めている。2009年に東京・世田谷区で“隠れ家的な本格フレンチ・レストラン”として「アンシェーヌ藍」をオープンしたのは、「社会福祉法人・藍」だ。料理長以外のスタッフが知的障害や精神障害を持つ人だとは気付か



NHK・ハートネットTV「僕らの夢のレストラン」

ずに帰っていく客もいるという。「誰もが『すてきね』と言うような場所で働く権利が障害者にもある」と話すのは理事長の竹ノ内睦子さん（毎日新聞）。去年は、安倍総理もお母さんの誕生日祝いにこの店を利用し

たとか。

そしてNHKでも取り上げられたのが、京都府舞鶴市の高級フレンチ・レストラン「ほのぼの屋」だ。スタッフは統合失調症や知的障害、難病などを抱える人だが、「予約のとれない店」として人気を博し、年間50組のウェディングも手掛け、最近では「一泊ディナー付きで1人2万円以上」のプチホテルも始めるなど、まさに「福祉の店」の常識とイメージを根底から覆す発展を遂げている。

これを実現させたのは、「支配人」である西澤心さんの並外れた情熱とパワーのようだ。舞鶴湾を一望できる一等地に、2億5千万円の建物、そしてグルメファンに名を知られた超一流のシェフを揃えた。従業員を指導したのはホテルの接客インストラクターだ。

#### ◇地域の人にも「誇りの店」

「福祉のレストラン」が、普通の店に肩を並べたというよりも、もはや一般的なレストランのレベルをも超えた時、どんな効果が生まれるのか。

まず、この店では原価率を高め設定し、テーブルも少なめで、回転率を上げることも意識していないという。従業員数も多いのでワークシェア的な要素もあるが、それでも月収15万円というスタッフもいる。

こうしたスローライフならぬ「スローワーク」とでも言うような、普通よりは緩やかな働き方ができるおかげで、障害の特徴である強いこだわりや几帳面さを生かしたサービスを提供できている。そのゆとり感とこだわりのサービスが、客にも好評なのだという（「WamNet」、NHK「ハートネットTV」）。

もう1つは、「障害者の店」というイメージに、店の高級性が完全に勝ってしまったことだ。建設前は地元住民の反発が強かったが、いざ完成した店で住民をもてなしたところ、一番反対していた男性がこう言ったそうだ。「こんなええもんができるんやったら、わし、反対せんかったのに！」（「ノーマネット」公開の西澤さん

の講演録より)。地域の人にとってこの店は「誇り」になっており、海水浴客にも「高台におしゃれなフランス料理の店がありますよ」と教えているそうだ(「いらっしゃいませ「ほのぼの屋」へ」(高橋清久・藤井克徳・まいづる福祉会・まいづる共同作業所運営委員会編著／クリエイツかもがわ発行)。

#### ◇普通より遥かに上のレベル

障害者のケーキづくりを一流シェフが指導することで、一般の人が買ったがるケーキができる。それによって障害者に対するイメージも変わる。こうして障害者に肩入れすることで「普通と同じ水準にする」のがフェアネスだと思っていたが、違った。むしろ「普通よりはるかに上の」超高級ケーキを作ってみせる。「障害者の店はわが街の誇り」と住民が思えるには、それぐらいのレベルが必要なのだ。

## 2.ハンディのある人にハンデをつける

### ①大学入試で、黒人の学生に有利な条件

柔道がオリンピックの競技種目になったら、階級制にされた。体重が100キロの人と50キロの人をハンデなしで戦わせるのはアンフェアだというわけです。

パレスホテル大宮の洋食レストラン統括料理長の毛塚智之さんは、障害者の作業所で作られた焼き菓子が、質に比してその価格があまりにも低いことに驚いた。そこで、ホテル主催で障害者作業所の菓子づくりコンクールを開き、優勝・準優勝の作品を「ホテル推奨」商品として販売したり、優秀な技術を発揮していた統合失調症の青年をホテルのパティシエとして雇用したりしている。つまりホテルという高級資源を使って「下駄を履かせた」ことになる。これで一般の菓子と横一線に並んだ!

アメリカでは大学入試の際、黒人などのマイノリティの学生には、白人やアジア



系の学生よりも有利な条件が与えられる。共通テストの結果に加点をしたりするのだ。

## ②韓国の少年院— 1年で1,278人が国家資格を取得

韓国の少年院におけるフェアネスの実現—詳しい記事はないかと調べてみたら、報道された当時の神戸新聞に、現地を視察してきた園田寿氏（甲南大教授）による談話が出ていたのでご紹介しておこう。

韓国では、少年院を実質的に収容施設から学校体制に変えてしまったというのだが、その教育内容がすごすぎる。全国12の少年院を最先端マルチメディアネットワークで連結し、1人に1台パソコンが貸与され、24時間いつでも学習が可能。情報通信の講師はなんと「サムソン」社の現役エンジニアが、英語の講師はネイティブの外国人が務める。

結果、1年間で1278人が国家資格や学力検定試験に合格。38人が大学に入学し、468人が一般校に編・転入学した。在学中に国際会議の通訳ボランティアを務めたり、英語弁論大会で優秀する少年まで出てきた。

日本以上の学歴社会である韓国では、こうした実績が少年たちの自信を回復させ、脱走者も激減。それどころか「資格が取れるまでもうちょっといさせてくれ」と、退院延期の申請が相次いだとか。

犯罪の軽重は問わないため、殺人などの重犯罪者もこの高度教育を受けられる。当然、当初は反対意見が強かったが、劇的な犯罪率の低下がこれを抑えたという。

「暴走族の落書きを消すのに100万円かかるなら、同じ費用でそれをやらない人間をつくる。長い目で見れば、その方が社会の利益になる」。(神戸新聞)

嘘かまことか、英国の赤ちゃんが初めて覚える言葉は、「イツツ・アンフェア！（フェアじゃないぞ）」だそうなの。

どこかの本に載っていたのを思い出したもので、まさに「嘘かまことか」だが、イギリス人の気質の中に、フェアネスというものが確かにあるという証拠かもしれない。

### 3.福祉に「正義」というものがあるとしたら…

#### ①川上福祉か川下福祉か、それが大事なのだ

重度の身体障害者に最適なポジションはどこか。それは、他の人に指示を出すだけでいい、社長の椅子。習得すべきは帝王学だ。

この世界に正義というものがあれば、その正義とやらはこういうことを要求するのではないか。若い頃、最重度の障害のある人たちといろいろ議論したことがある。その時、1人が「川下」福祉という表現を使った。例えば、新たに画期的な生活器具が発明されたとする。ちょうどその頃は、電磁調理器だった。するとまず、金持ちが「これは面白い」と購入する。その時のメーカーのコマーシャルはこう言うた。「これでキッチンがきれいになります」。そして、みんなが飽きた頃、最後に、最もこれを欲しがっていた人たちがようやく使えるようになる。

視力障害者で特に女性の場合、目が見えなくても調理ができるのが結婚の条件だった。しかし全盲の場合、天ぷらなどは難しい。油を使うのが怖いからだ。ところ

がこの電磁調理器だと、油を使わなくてもいい。しかも火の加減は、天ぷらの場合は何度とか決まっている通りに、つまみを回せばいい。つまりこの調理器を最も欲しがっていた人、そしてこれを最も有効に生かしてくれる人の所にこの調理器が届くには、相当の月日がかかる。これを川下福祉というのだと。

しかしこれは不合理だ。そういう便利なものができれば、それをもっとも有効に生かしてくれる人の所にまず提供されるべきではないのか。これが「正義」だ。

## ②重度障害者は大企業の会長室の椅子に座るのが「正義」

そうすると、最重度の人はどういう職種が向いているのか。私の頭にふと、こんな人物像が浮かんできた。大企業の社長か会長。広い部屋に1人だけ、大きな椅子に座ったまま、たくさんの秘書や部下に囲まれている。仕事は彼らがやってくれるから、自分は腰を上げることなく、あれこれと指示を出すだけでいい。ならば、このポジションこそ重度障害者にぴったりじゃないか！

これらの正義がきちんと働く社会になるまでは、まだまだ福祉社会になったとは言えないという感じがするのだ。これが究極のフェアネスである。

## 2.問題解決の方向②

# スロー

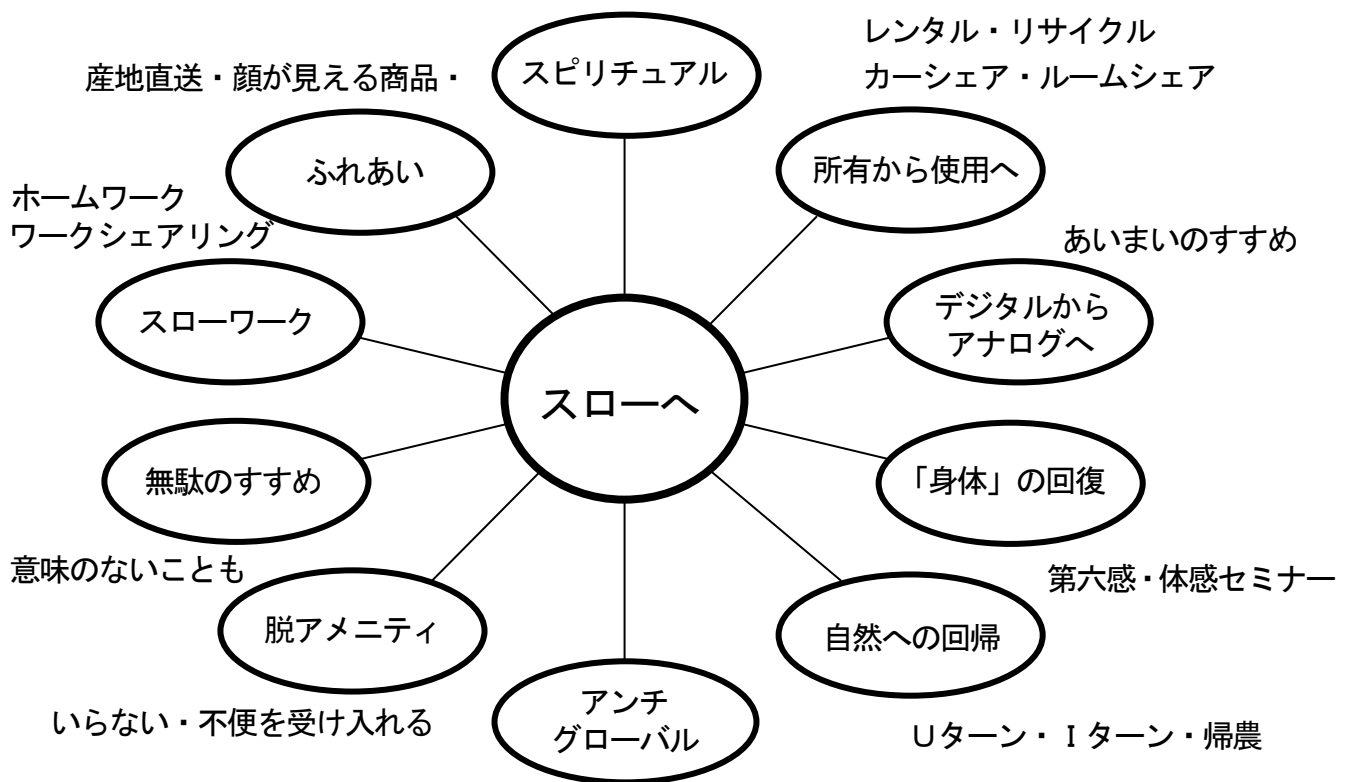
「スロー」という言葉がよく使われる。反文明、人間復興のシンボルだ。効率や便利さを求めてきたけれど、これらは人間を本当に幸せにはしてくれなかった。原点に戻って、自分の手で食べ物やモノを作る。人間と人間が直にふれあう。

だがその結果として、肉体労働が増えるし、人間関係の面倒さも復活するし、嫌な相手とも付き合わねばならない。それを敢えて引き受けようというのだ。

# ■「スロー」の解説

## 1.スローでくくれるキーワードはこれだけある

試しに、スローでくくれるキーワードを集めてみた。これらをじっと眺めていると、これらのキーワードがめざすものがおぼろげながら見えてくる。



## 2.心地よさから脱して、面倒臭い生き方に戻る

これは、文明への対抗軸と考えられる。ではこれまでの文明とどのように異なるのか。文明は、アメニティ（心地よさ）、効率、シンプル、やり易さ、すぐ効く、面倒がないなどを追求する。

これに従ってやってきたが、その結果どういうことになったか。心地よいことを追求するあまり、心地悪いことはことごとく避けるようになった。地域のお付き合いも、助け合いも、困った人を助けることも、困った時に助けを求めることも、体を使うことも。そして面倒なことはハードにやらせる。要するに、楽をしたいというにすぎない。これに理念などないのだ。ところが私たちは、アメニティなどと格好いい言葉を使い、これに立派な理念でもあるかのように見せかけ、もっと便利に、もっと楽にと、追い求めてきたのである。

そこで、図にあるように、このアメニティに見切りをつけて、面倒でも生きがいのある人間らしい生き方を再び取り戻そうという営みが様々な側面から始まっている。

## ①息子を殺した犯人を隣人として受け入れ



イズリエルさんとメアリーさん  
「死から生へ」ホームページより

アメリカに住むメアリー・ジョンソンさんは、17年前に息子を殺した加害者を隣人として迎え入れ、同じアパートで暮らしている。

### ◇憎しみは癌のように私を冒す

加害男性の名前は、オーシェイ・イズリエルさん（34）。当時はマーロン・グリーンという名前で、16歳でギャングに所属し、麻薬もやっていた。あるパーティで20歳の青年と口論になり、青年が何かを取り出そうとしたのを見て発砲し、胸に3発、倒れたところでさらに頭部に1発を撃ち込み、射殺した。殺された青年はメアリーさんの大事な一人息子、ララミアン・バードさんだった。

メアリーさんは怒り、加害少年とその母親を憎んだ。「事件はまるで、津波のようでした。ショック、不信感、憎しみ。怒り、憎しみ。非難、憎しみ。私は彼を獣

だと思い、折に閉じ込めるべきだと思いました」。法廷では少年の母親と激しい口論になり、つかみかかろうとして職員に止められた。少年は第2級殺人で懲役25年半の刑に処されたが、メアリーさんからすればとても十分とは言えなかった。

その後10年以上、メアリーさんは少年を憎みながら日々を送るが、それで苦しんでいたのはメアリーさん自身だった。彼女は信仰心の篤いクリスチャンであり、キリスト教では「許し」を重視する。それも1つの理由だったが、それ以上の何かがあった。「人を憎み続ける心というのは、まるで癌のようなものなんです。内側からその人を食い尽くすのです」。そう気付いたメアリーさんは、どうにか、何とかして、少年を許すことができないだろうかと考え込むようになる。

やがてメアリーさんは、少年が収容されているスティルウォーター刑務所に連絡し、「彼と会いたい」と願い出る。1度目は本人に拒絶されたが、もう一度申し入れると受け入れられた。仲介者が準備段階として双方と面談を重ねた後、いよいよメアリーさんは少年と直に向き合った。少年はもう30歳を過ぎ、少年ではなくなっていた。

この日のことを、後にメアリーさんはイズリエルさんにこう語っている。

「私はあなたが、法廷で見かけた時のあなたと同じ心のままなのかどうか、知りたかったの。でもあなたはもう、あの時の16歳の少年ではなく、成長した1人の男性になっていた。私はあなたに、息子の思い出を語って聴かせたわね」。

面会が終わると、メアリーさんは感情が激しく高ぶり、泣き崩れた。戸惑いながら彼女の体を支えたのは、イズリエルさんだった。イズリエルさんは、とにかく自分のベストを尽くしてメアリーさんを両手で支えたという。自分の母親にするように、メアリーさんに腕を回した。

「あなたが部屋を出た後、私はこうつぶやいたわ。『私はたった今、息子を殺した男と抱き合ったんだわ』ってね」。

## ◇対話による癒しを促す運動も

その後も、2人は何度も面会を重ね、対話を続けた。メアリーさんの話に耳を傾けるうち、イズリエルさんの中でただの被害者だったメアリーさんの息子は、1人の人間として形を成していった。他の受刑者たちの前に2人で出て体験を語ると、受刑者の多くは涙を流したという。



左がメアリーさんの部屋、右がイズリエルさんの部屋  
(CBS ニュース映像より)

イズリエルさんが釈放された時、メアリーさんは自分が住むアパートの大家に願い出て、イズリエルさんを隣の部屋に受け入れてもらった。支援者とともに、イズリエルさんを再び地元を迎え入れるための「ホームカミング・パーティー」も開き、(現在は遠くに住む) イズリエルさんの母親・キャロリンさん

んも呼んだ。

メアリーさんは「死から生へ：癒しのために2人の母親が歩み寄るとき」という名前のサポートグループを創設した。暴力によって子どもを亡くした母親たちを支えるとともに、加害者家族との対話による癒しを促す活動で、加害者の母親も受け入れる。メアリーさんとイズリエルさんはそれ以外でも様々な場所で、体験を語る活動をしている。メアリーさんはそのことで、イズリエルさんに敬意を抱いていると言う。「彼にとっては、私たちの物語と一緒に語ることは、簡単なことではないはずです。こうやって顔を突き合わせて一緒に座っているだけだって、彼にとっては簡単ではないと分かっています」。

よく考えてみれば、そうなのだ。メアリーさんの「許し」は、修復的司法などが行われているアメリカでさえ、驚愕の、奇跡の物語として報道されている。そこで称えられるのはいつも、メアリーさんの愛や人間性の素晴らしさだ。一方のイズリエルさんは、加害者である。



メアリーさんと関わり続けることは、イズリエルさんにとって楽な道とは言えないのだ。10代で犯した罪を20年以上かけて償い、名前も変えて出所すれば、普通なら誰も知らない新しい土地で、ごく普通の人間として一からスタートできる。ところがイズリエルさんは、メアリーさんと関係を築いたことで、自分が殺人犯として知られている地元に戻り、自分が殺した青年の母親と毎日顔を合わせて生きていくのである。これでは一生、自分の罪から逃れようがない。見方によっては、メアリーさんがしているのは、加害者を許さずに一生関係を絶ったまま生きていくよりも、はるかに厳しい関わり方と言えるのではないか。

よく記事を読むと、2人はこのことをはっきりと語り合っていないが、意識はしているようだ。メアリーさんは「私は自分の息子にするように、あなたに接するのよ」と言っている。本物の母親の愛情とは何か。やさしさと厳しさを兼ね備えたものだろう。そしてイズリエルさんは「もしも自分がまた道を踏み外しかけるようなことがあれば、真っ先にメアリーさんが教えてくれるはずだ」と言っている。

彼が何日も顔を出さないと、隣からこんな声が飛んでくる。「ちょっと、私がどうしてるかちっとも見に来ないなんて、どうなってるの？ ゴミ出しをしてほしいかどうかさえ、聞いてくれないじゃない！」。

「こういうのが面白いと思うのは、まるで本物の母親との関係みたいだからだよ」とイズリエルさんが言うと、メアリーさんは、こう答えた。「私の血のつながった息子はもうここにいない。彼が卒業する姿を見ることもできない。でもあなたがいま大学に通っていて、私はあなたの卒業式を見ることができるのよ」。メアリーさんは、いつかイズリエルさんの結婚式に出ることも楽しみにしている。

メアリーさんのこうした信頼と期待が、自分を正しい道に進ませるのだとイズリエルさんは語っている。イズリエルさんは現在、昼間はリサイクル工場で働き、夜は大学に通っている。

メアリーさんはクリスマス・イブに、イズリエルさんの母親を招待して食事会を催した。2人が顔を合わせたのは法廷で言い争った日以来、2度目だ。その席には、メアリーさんがサポートしている他の被害者の母親たちも並んだ。メアリーさんは言う。「なにも、彼女と親友になる必要はないのよ。まあ、絶対にそうならないとも限らないけどね。被害者になると、周囲の人はみんな、加害者の親は怪物を生み出したんだって言うの。でもその親にだって、できることは何もなかったかもしれない。人の命を奪うような人間に子どもを育てようとする親なんて、どこにもいないでしょう」。

2人は、1人の息子を共有する不思議な関係になっている。メアリーさんが身につけているロケット・ネックレスの表には、メアリーさんと息子の写真が入れられ、引っくり返すと、そこにはもう一人の息子、イズリエルさんの写真が入っている。

といっても、メアリーさんは「許し」は彼のためではない、と強調する。許したことで彼が犯した罪が消えるわけではない、と。「許しは、加害者のためにすることではありません。自分のためです。相手に対する全ての怒りを解き放した時にはじめて、これから自分は元気になれると分かるのです」。

#### 【参考記事】

- Love thy neighbor: Son's killer moves next door / CBS
- Gunshot took her son, but forgiveness finally came / Star Tribune
- Forgive, never forget, moms agree / Star Tribune
- When parents of killed, Killer meet / Chicago Sun-Times
- Forgiving her son's killer: 'Not an easy thing' / NPR

## 3.まず助け合いの「ご近所」づくりを

福祉の世界でいえば、まず取り組むべきは「ご近所」作りになるかもしれない。人々は50世帯程度でまとまって生きている。大宝律令でも国郡里の里は50戸と

規定。現代のマンションも一棟平均50世帯だ。そこで日常のご近所内の世話焼きさんが、ご近所内の要援護者に関わっている。地域を細かく区切れば、助け合いはしやすい。

アンチ・グローバルのシンボルとして、要援護者の生活拠点たるご近所を丁寧に福祉コミュニティ化していくのである。面倒なことをことごとく排除してきた私たちは、ご近所づきあいは苦手なはずだ。でもそれを敢えて取り戻さなければ、助け合いはできない。

## ① プライバシーゼロの長屋も「住めば都」

ご近所付き合いの極致といえるのが長屋のふれあいだ。それについて、面白い話を聞いた。

法政大学総長の田中優子さんは、若い頃、長屋に住んでいたそう。隣とは襖一枚。プライバシーはゼロ。「息が詰まるのでは？」と聞かれ、「それは全くなかった。むしろ委ね合っている感じだった」。

長屋というものは、全体が今で言えば子育て支援センターであり、学童保育所であり、デイサービスセンターだった。

インテリの最たる存在の1人と言える人からこういうことを聞くと、元気づけられる。人間の柔軟性というのは、私たちが想像している以上のものがあるのだ。

大震災の被災地で建てられた仮設住宅も、長屋に似たような構造を持っている。住民はプライバシーが守れないと、大変なストレスを感じた一方で、最近では、復興住宅に移ったけれど、そこにはふれあいが無いということで、仮設住宅に戻ってきた人もいるという。

## ② 80代の要介護夫婦が40代夫婦とシェアハウス？

面白いことに、最近は若い人の中でルームシェアやシェアハウスが流行している。

先日、住民リーダー向けの講座で、受講生に自助プランを立ててもらった。これからの自分に訪れる危機をあらかじめ予測して、そのための対策を立てようというものだが、80代のS男さんは、認知症の妻との2人暮らし。これからどうやって生きていくかと考えたS男さんは、最近、植木の剪定を頼んで知り合った40代の夫婦と、二世帯住宅で同居をしようと話し合いを始めているという。

# 4. 迷惑をかけられる社会、お節介できる社会へ

## ① 助け合うための必須の前提条件

ふれあい、助け合いをするには、いろいろハードルを乗り越えなければならない。困ったときに助けを求めれば、相手に迷惑をかけなければならない。助ける側も、困っている人がいないか詮索することも必要だし、遠慮する人にはお節介も必要だ。そこで生じうる軋轢を乗り越えてこそ、本物の絆が生まれる。

特に日本人が苦手なのが、人に迷惑をかけることだ。これをどう乗り越えるか。

AさんとBさんは同じ職場で、子どもも同じ保育園。早く仕事を終えた方が相手の子ども連れて帰って預かることになっている。ある日、Aさんの残業が長引き、申し訳ない気持ちでBさん宅に着くと、「子どもはもうお風呂を済ませて、夕食も食べて、寝かせてあるから、今日はウチに泊めましょう。あなたもお腹が減っているでしょ、食べていきなさいよ」。Aさんは涙が出そうだったと言います。「今までBさんはただの同僚でしたが、このことがあってから友達になりました」。

## ②人に迷惑かけてなんぼの世界

### ◇異文化体験者が共通に言うことは…

「迷惑」と「助け合い」について、私たちはどのように考えればいいのだろうか？

それを考えるヒントをくれそうなのが、海外で生活をした日本人たちの異文化体験を綴ったブログ記事だ。それぞれお国柄はまったく異なるものの、共通しているのは、それが非常識な迷惑行為でない限り、「迷惑はかけてはいけない」のではなく、「迷惑はお互いにかかけ合うもの」というのが常識になっているということだ。

### ◇迷惑をかけることに罪悪感を持たない国民性？

#### イタリア

「イタリア観察サイト～イタリア駐在員は見た！イタリアってこんなところ？」は、日本企業の元駐在員である男性のブログだが、「日本人との違い」という記事で第2番目に、『他人に迷惑をかけること』に対する『罪悪感』の違いを挙げている。

日本人には「他人に迷惑をかけること」は「ものすごく悪いこと」という意識があるが、ここではそれほど悪もの扱いされていないようだ。～自分が生きるためには周りに迷惑をかけることは仕方なく、また、時には迷惑をかけられることもあるから、「まあ、迷惑かけるけどいいじゃん」といった感じではないか。

### ◇迷惑をかけ合うという感覚

#### アメリカ

「スモールビジネス・サポートセンター」を主宰する茂木賛さんは、ブログ「夜間飛行」で、まずボストン在住である心療内科医の海原純子さんのコラム（毎日新聞）から、以下の部分を引用している。

アメリカに住んで気がつくのは、「迷惑とお互いさま」の論理の違いである。～アメリカの場合は、「お互いさま」の論理が先行する。自分が迷惑をかけるかもしれないが、相手の迷惑にも許容範囲が広くなるというスタイルだ。ボストンに20

年以上住んでいる日本人が、「迷惑をかけあう、という感覚ですかね」と言っていたが、この思考性に気づかないとアメリカに住むことはストレスになるだろう。

そして茂木さん自身が、こう続ける。

私もアメリカに長く住んでいたから、海原氏の指摘に同感する。アメリカに暮らしていて、「人さまに迷惑をかけるんじゃないありません」といった意味のフレーズは聞いたことがない。

### ◇迷惑な人でなく要援護の人と見る

「目指せグローバル才女！薫子の『飛んだ人生』」は、「PFC (People Focus Consulting)」というグローバルな人材・組織づくりを支援する会社のスタッフ、薫子さんによるブログだ。

アメリカ人は、よくも悪くも「人目を気にしない」ため、日本と比較するとマナーがなっていない人も多いということで、薫さんは長年、そういうところが嫌だったそうだ。ところがあるハンディキャップを背負ってから、見る目が変わったという。それは、小さな子どもを抱える母になったことだ。

子供が生まれてから、自分の力ではどうしようもなく、周囲に迷惑をかけてしまう事態を何度か経験しました。そのときに、冷たい視線を浴びせられたのは日本で、助けの手を差し伸べてもらえたのはアメリカでした。

息子さんを保育園に迎えに行った帰り、混んだバスの中でその子が泣き出してしまった。つんざくような鳴き声が響き渡り、薫さんは冷や汗をかきながら必死であやすが、泣き止まない。

すると、隣に座っていた初老の女性は「私にも同じ年くらいの孫がいるんですよ」と話しかけてくれ、息子をあやしてくれました。ふと気付くと、向かいに座っている人も息子に向かって手を振ってくれたり、面白い顔をしたりして、あやしてくれています。息子は泣き止んで笑顔になりました。バスを降りるときは乗客の一人が

さっと荷物を持って降ろしてくれました。「皆、親切にしてくれて嬉しいね」と息子に話しかけながらの帰り道、心がほっこり温かくなりました。

今の日本は、公共の場での「迷惑」にとっても厳しいが、このエピソードは、だれかが否応なく周囲に迷惑をかけてしまっている時に、それを「迷惑」ととらえずに済む方法もあることを、私たちに教えてくれる。その人を「援護の必要な人」と見るのだ。このような寛容さは、障害のある人に対しても発揮されていた。

### ◇「迷惑をかけざるを得ない」時期が来る

サンフランシスコにはたくさんのバスが走っていますが、時刻表はあってないようなものです。車椅子の人がバスに乗るときは、運転手がステップの上げ下げをして、6人くらいの人を立たせて椅子をたたみ、その空間に車椅子の人を入れます。そのプロセスに5分くらいはかかりますので、バスはどんどん遅れていきますが、誰も文句を言いません。車椅子の人もし訳ないといったそぶりも見せず、堂々とバスに乗ってきます。

こう見ると、常にきちんと機能することをお互いに求め、そこからはずれると「迷惑」とされてしまう日本の社会は、「人に迷惑をかけずに生活できる人」に合わせてつくられているということだ。薫子さんは出産をして初めて、他人に迷惑をかけなければならない時があることを知る。

それは高齢になったり障害を持ったり、そのほか様々な問題を抱えた時も同じで、生きていけば誰にでもそういう時期がくることを想定しない社会は、私たちの困難を増幅してしまうだろう。

### ◇迷惑を許容する文化

#### インド

コピーライターの境治さんのブログ「クリエイティブビジネス論～焼け跡に光を灯そう」では、子育てと日本式「迷惑」の相容れない関係について考察し、「ぼく

たちは、迷惑に敏感になりすぎていないだろうか？」と問いかけている。

この“迷惑”という言葉は水戸黄門の印籠のように強い威力がある。「それは迷惑である」と言われると「ははあ〜！」とひれ伏さざるをえないオーラを放つ。太刀打ちできない。謝るしかない。でも赤ちゃんは、迷惑だと言い出したらどこへどう連れて行っても迷惑だ。

そんなことを考えていた矢先、ヨガ教師でモデルの吉川めいさんと対談し、こんな話を聞いたそうだ。

インドには“迷惑”を許容する文化がある。だから子どもを連れていくと、安心して迷惑をかけられる。インドの方が人口がずっと多くて、だったら迷惑に敏感になりそうなのに、逆に寛容になっている。子どもが多少羽目を外したりなれなれしくても、受け入れてくれる。吉川さんのお子さんはその違いをもうすっかり呑み込んでいて、インドでは見知らぬ人にどんどん話しかけ、日本では逆に大人しくしているそうだ。日本社会の度量の狭さを見透かされている。

#### ◇遠慮がさらに深刻な事態を招く

「心のヨガでシンプルに暮らそう〜アドヴェイタ ヴェーダーンタ」は、インド在住の aiko さんのブログだ。彼女は以前、オーストラリアでライフセービングのトレーニングを受けていた時に、トレーナーからこう言われたそうだ。

「日本人は自分が危険な状態にあるのに、遠慮してギリギリまで助けを求めない。俺たちは助けるために待機しているのに！ 自分で何とかしようとしなくて、危ないと思ったらすぐに助けを求めるべきだ」。

Aiko さんは日本人だから、そのように遠慮する気持ちはよくわかるという。しかしこの遠慮が、結果として多くの日本人の命を奪っているのではないかと考えるに至っている。インドを含め、海外にいるとよく聞かれるそうだ。「日本はなんで自殺者が多いの？」と。



なぜ人は思いつめるのか。「人に迷惑をかけてはいけない。」その真面目さが始まりなのではないのでしょうか。「相談したいけど、こんな夜遅くに電話したら、迷惑だろうな」～もし相談していたら、話ただけで気持ちが楽になっていたかもしれないし、根が深くなならないうちに具体的な解決方法を提案してくれる人がいたかもしれない。何より、ひとりぼっちにならない。

では、インドではどうなのか。

#### ◇迷惑かけ合いは意外に心地よい

どうやら彼らは、「あなたは人に迷惑をかけて生きていかなければならないのだから、人のことも受け入れてあげなさい」と教えられ育っているようなのです。

混乱して夜中に電話をかけてきたり、留守の間に勝手に部屋に入って必要な物を借りて行ったりと、「日本人なら家族にも遠慮して出来ないようなこと」を、彼らは他人にも平気でできるという。「そんなことはとても我慢できない」と私たちは感じそうだが、aikoさんは、迷惑のかけ合いをやってみると以外に心地よいことに気付いたという。

実際されてみると、大して迷惑なことでもない。自分のプライバシーへのこだわりを少し減らせばいいだけのこと。そして相手を受け入れる器さえあれば、相手もいつでも受け入れてくれる。相手がズカズカと踏み込んでくるというのは、逆に言うと、相手にもズカズカ入っていける。つまり相談しやすい雰囲気でもあります。もっと私の時間を使ってもいいよ。もっと私のこと使ってもいいよ。

結論として、aikoさんはこんな気付きを得ていた。自力で解決できない重い問題を抱えたとき、日本人はその問題の上に、さらに「助けてもらえば、人に迷惑をかけてしまう」という余分な悩みを上乗せしてしまうのだと。

だから彼女はこう提言する。まず彼らのように「人は迷惑をかけなければ生きていけない存在である」ことを認めて、「自分が迷惑をかけないこと」よりも「相手

を迷惑だと思わないで受け入れる」努力をする方がみんな幸せになれるのではないかと。

## ◇人を助けてナンボの世界

### インドネシア

「Relaxing days in Bali」は、インドネシアのバリに移住して4年という kiko さんのブログだ。インドネシアの「迷惑のかけ合い」は、さらにパワフルである。

kiko さんは、インドネシアを「人に迷惑かけてナンボの世界」と表現している。びっくりを通り越してあきれれるほど「あれして」「これして」と、こちらの都合も考えずにいろんなことを頼んでくるのだと。しかし同時に、「人を助けてナンボの世界」で、その人助けの熱意はハンパなく、やたら道など聞こうものなら、知らないくせに頑張っって教えようとしたり、他の人を引っ張って来たりするという。

また、会うとこちらのことを近況から何から根掘り葉掘り聞いてきて、聞かれてもいないのに自分のこともあれこれ教えてくれるのだという。「放っておいて」と思っっいても放っっっておいてくれず、あれこれ構っってくる。

これはカルチャーショックで、以前は大きなストレスの原因だったという kiko さんだが、否応なく彼らの仲間の輪に引っ張り込まれ、人は助け合っって生きるのだと実感するようになり、「人に迷惑をかけないように頑張りすぎるより、『あ、○○にお願いしよう！』と気軽に思える気持ちが大切だ」と考えるようになったという。

## ◇人に助けを求めることの大切さ

### ガーナ

最後は、オランダの大学でMBAを取得後、ガーナで起業した「ちいさん」のブログ「旅がらすLife in ガーナ」だ。彼女はオランダでの寮生活で、アフリカや東南アジア出身の隣人たちを相手に、ある「事件」を起こしてしまった。彼女がプリンターを買ったため、授業が始まる前に彼等から印刷を頼まれることが日課になっ

てしまい、「迷惑をかけられる」ことに慣れていない彼女はある日、その怒りを爆発させ、「大人しい日本人がキレた！」と皆を驚愕させたのだ。

「朝は化粧したり、色々忙しいんだから、直前じゃなく、余裕をもって頼んでよ。私は、授業に遅れるのは嫌なの。人に何か頼むときは、迷惑かからないようにするのが礼儀じゃないの!」。私は自分の怒り、常識が、正しいと疑わなかったが、彼らは、迷惑をかけているという認識は毛頭なく、「全然気づかなかった、ごめん」と謝罪された。

彼らは、迷惑をかけて、かけられて（だから逆に、自分が頼まれても迷惑だとも思わない）ということが当たり前の環境から来ていたのだ。だから、それが、失礼だという概念は全くなかったのだ。

彼女はその後、初めての試験で苦難に直面する。全く理解できない科目もあるのに、「みんな忙しいし、人に迷惑をかけられない」と、誰にも助けを求めず、追試になったのだ。クラスメイトは、彼女がなぜ相談してくれなかったのか、理解できない。「みんな忙しいと思って…」と言うと、「どんなに忙しくても、一緒に数問解くぐらいの時間はいつでもあるよ」と諭された。

私は、ちょっとした迷惑をかけられるのも、かけるのも嫌だったのだ。勝手に、迷惑をかけられないと思い込んでいただけで、それは他の人にとっては、なんてことのないことだったのだ。～クラスメイトに教えてもらおうと、それまで意味をなさなかったものが、いとも簡単に解けるようになった。遠慮せずに、助けを求めるべきだったのだ。

こうして彼女は、オランダの学生生活で「人に助けを求めることの重要性」を学び、その後ガーナで暮らし始めると、今度は「人に迷惑をかけてもいいこと」を学んだという。

ガーナでは、深夜零時過ぎでも「タイヤがパンクしたので、助けてくれ」と友人

からの電話が鳴る。隣人の治療費を代わりに払ってあげることさえあるのだそうだ。

万が一に備えて準備することのない彼ら（予測できないことが多すぎるので先ばかりを考えても仕方ないせいもあるが）。

みんな楽な生活ではないけれども、できる人ができることをする。困ったときに助けるからこそ、自分が困ったときに、助けが得られる。だから、備えてなくてもどうにかなるのだ。

### ◇他国には日本のような「迷惑」の概念はない？

このように見てくると、他国では、悪質なレベルの「迷惑」と、日常的な「迷惑のかけ合い」は別に考えていることが分かる。困った時に必要な助けを求め、求められた人がそれに応じるという相互行為は、社会の中で常に循環する「助け合い」という必要不可欠なやりとりのいっかんであって、これは「迷惑をかけること」ではない、ということだ。

各筆者のブログでも、「迷惑をかけ合う」といった言い方が出てくるが、そもそもこれは日本人にわかりやすく説明しようとするからこういう表現になるのであって、各国の人は日常的な頼み事に「迷惑」という言葉をあてはめないのではないか。「迷惑」という概念が、そもそも日本と異なるからだ。

たとえば「迷惑をかける」を和英辞書で引くと「cause trouble (problem)」と出てくるが、アメリカ人は、たとえば誰かに助けてもらう時に、「cause trouble (相手に迷惑をかける)」などという意識はまず持っていないし、そういう言葉も使わない。あくまで、「help (ヘルプ)」の世界なのだ。

## 5. 「介護文化」は復活できるか？

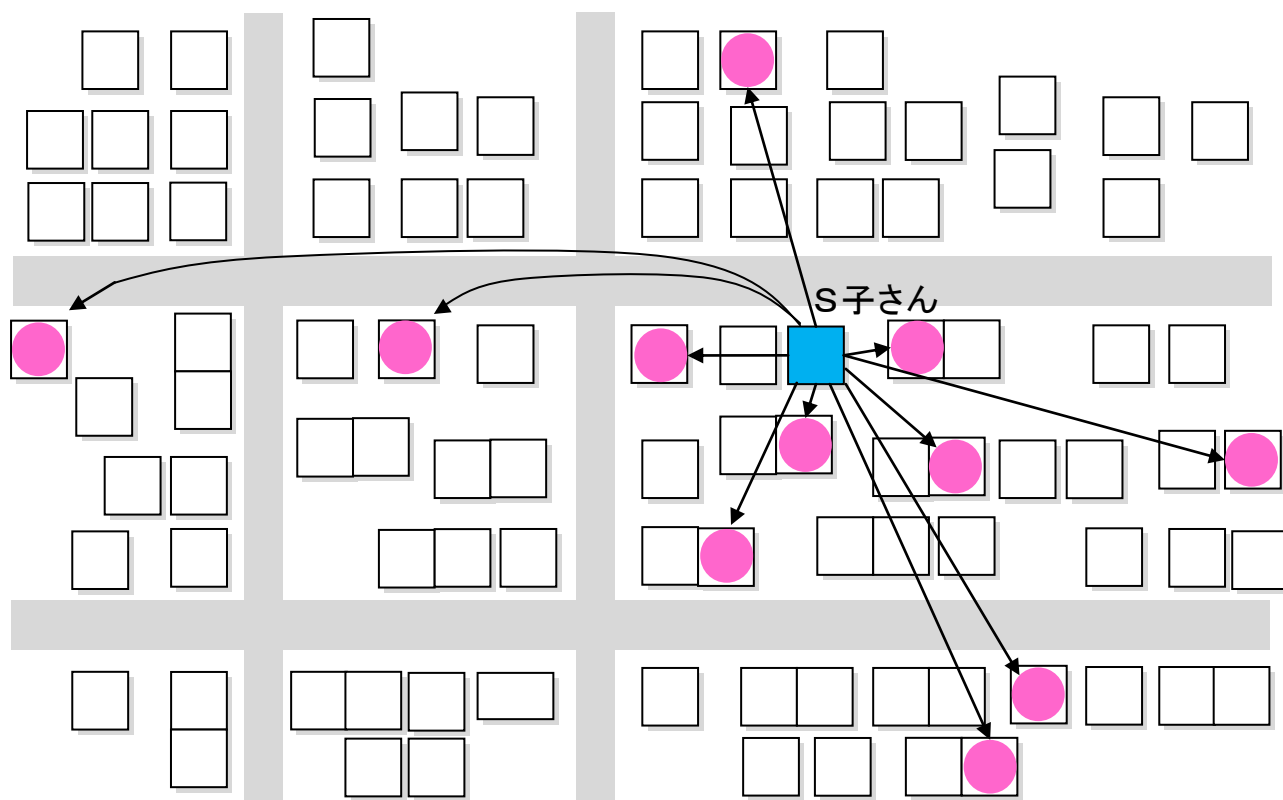
### ①夫の親が要介護になったら「離婚しましょ」

アメニティの時代になって、自分の体を使って人に奉仕したりすることをできる限り避けるようになった。以前は高校生にもヘルパー研修をしていたのに、最近は全くそういう事例を聞かなくなった。結婚し、夫の親が要介護になったら離婚を言い渡すのが流行のようになっている。私はあなたの親を介護するためにあなたと結婚したわけじゃないというわけだ。

## ②介護保険以前には全国におむつ替えの名人がいた

一方で、支え合いマップ作りをしていて、発見したことがある。

介護保険が始まる前、各地に「おむつ替えの名人」がいた。釧路市のS子さんは娘さんと、毎日数名のおむつ替えに巡回。柏崎市のA子さんが施設に行くと、入所者は「今日はA子さんに取り替えてもらいたい」。那覇市のT子さんは、夫の介護の傍ら、近隣の数名の介護を手伝っていた。住民にもちゃんと介護力があつたのだ。



考えてみれば、これから訪れる超高齢社会には、地域に相当数の高齢者がいることになる。当然、要介護者の数も増える。これを介護保険だけで対応できるのか。アメニティだと言って、すべてを介護保険に委ねられるのか。もしかしたら、スローの流れの発展形態として、新たな介護文化が生まれる可能性もある。

### ③「昔はそういう文化があったんだな」

長野県のある町を社会福祉協議会のスタッフと歩いていたら、その人の知り合いの主婦に出会った。どこへ行くんですかと社協の女性が聞いたら、この先の家におむつ替えに行っているの、と言う。どうしてかと聞くと、以前にお世話になったからと。いとも気軽に言うのを聞いて、昔はそういう文化があったんだなと納得した。

### 3.救済の対象①

# 日陰に光を

私たちはどうしても、光の当たっている所に関心を集中させがちだ。だからこそ、日陰になった部分にも目を向けるのが大切なのだ。解決策を考える過程で、必ずそれを確認しよう。「ちょっと待て、我々が見逃した相手はいないだろうか」と。

## ■「日陰に光を」の解説

日向には必ず陰ができるように、日の当たる世界がある一方で、そこから捨て置かれた部分ができるものだ。その日陰の部分に光を当てることが、どの時代にも要請されている。

### 1. 陰の部分が、見える人・気づく人とは？

#### ① 就職氷河期で希望の就職ができなかった人に再挑戦の機会

就職氷河期に当たったために、自分の希望の就職先を見つけられなかった人たちを対象にした就職試験が実施された。採用予定人数はわずかに数名、これに応募した人が数百名。宝くじ並みの当選率だ。

これを考えた自治体の担当者は、素晴らしいセンスの持ち主だと思う。こういう視点が、私たちは持ちにくいのだ。今日、陰に置かれた人は誰だろうかと考えるまではいいが、具体的に就職氷河期に当たったために希望の就職先が見つけれなかった人を思い浮かべるのは、難しいはずだ。この「日陰に光を」というキーワードは、こういう視点を持っていただくためのものである。

#### ② 被害者の遺族が、「ストーカーの救済」という陰を発見

妹をストーカーに殺害された男性が、なんとそのストーカーの救済活動を始めたというのも、驚くべき視点だ。ストーカーと言えば、その人をどうやって社会から排除するかということばかりを考えるが、逗子ストーカー殺人事件の被害者・三好梨絵さんの兄は、いくら責めて



三好梨絵さんの兄(NHK「クローズアップ現代」)



もストーカーがそれをやめることができないのであれば、被害者を守るためにできることは、治療を受けさせることだという結論に至ったという。

### ③「妊婦のお腹は美しい」で価値観を逆転

「妊婦のお腹は美しい」と、その写真ばかりを撮り続けている写真家がいる。その後、お腹が大きくても堂々とドレスを着て結婚式を挙げたり、妊婦用のおしゃれなファッションが流行するなど、妊婦のお腹が市民権を得たようだ。日陰の存在を逆に最も光の当たる場所に引き出した！

社会的に日陰の位置に置かれている人を日向に出してあげるということも、このキーワードに含まれる。例えば上記のように、妊婦のお腹というのは、以前は、本人がその状態の間は何となく目立たないようにしているのが慣例というところがあった。しかしある写真家の行動をきっかけに、妊婦のお腹に社会的に光が当てられた。こういうのも福祉的だなと感じる。

### ④殺処分危機の野良犬を本国へ連れ帰るーソチ五輪の舞台裏

◇「野良犬は生きたゴミ」？

連日、氷上で熱い戦いやドラマが繰り広げられ、大盛況のうちに閉幕したソチオリンピック。しかしその華やかな舞台の影に、命を巡るドラマがあったことをご存じだろうか。

ソチ市は、街をクリーンなイメージに保つため、五輪開幕前までに市中の野良犬を大量処分した。元々避妊・去勢の制度がない上、会場建設に携わった労働者が餌を与えるなどして数が増え、市は最終的に 2000 匹を処分したと言われている。さ

らに、処分方法は毒殺と見られ、動物愛護団体の激しい非難を浴びた。市の委託を受けた駆除業者の経営者はこう言い放った。「野良犬たちはしょせん、生きたゴミだ」。

このニュースは各国の主要メディアで報道され、世界的に批判の聲が高まった。国際的な動物福祉団体、ヒューメイン・ソサエティー・インターナショナル(HSI)のアンドリュー・ローワン会長は「私が覚えている範囲で、メディアがここまで野良犬の問題を大きく取り上げたことはなかった」と述べた。

行政の心ない措置に憤慨し、まずロシアの富豪、オレグ・デリパスカ氏が立ち上がった。氏は、自らが組織する慈善団体とともに、野良犬たちの救助費用を提供、急ぎ建設したシェルターに犬たちを収容し、スタッフが新しい飼い主を探す活動を続けている。

「ソチ」とジャコベリス選手(ロケットニュース24)



#### ◇選手たちが続々と引取り

さらに、多くのアメリカ代表選手が、現地で出会った犬たちを引き取り、共に帰国する決断をした。スキーマジス男子スロープスタイルの銀メダリスト、ガス・ケンワージー選手が、ソチ滞在中幾度もシェルターを訪ね、子犬4匹とその母犬のために犬小屋や餌を購入し、最終的に5匹全てを連れて帰る決意をしたと自身のツイッターに投稿すると、米のポップスターもリツイートするなど国際的に注目を集めた。

女子スノーボードの米代表、リンゼイ・ジャコベリス選手も野良犬を保護、「ソチ」と名付けたその子犬と共に帰国の途に着いた。さらに、米アイスホッケーチームのデビッド・バックス選手も、2匹の子犬を家族に迎えた。バックス選手は、本国ですでに数匹の保護犬と暮らしており、妻と共に「アスリート・フォー・アニマルズ」という組織を設立、里親探しの支援活動などを行っている。

## ◇元タレント・女優も

犬たちを救ったのは選手だけに留まらない。米の元人気タレントで現在記者のアリ・フェドトスキーさんは、取材先のソチから2匹の子犬と共に帰国。保護犬の里親探しなどを行う財団も設立している米人気女優のキャサリン・ハイグルさんらと協力して、2匹の里親を探している。

さらにハイグルさんの財団は、ボブスレー米代表チームの広報担当のアマンダ・バードさんが本国へ連れて帰った犬がジステンパーと診断されたと知ると、無償で治療を引き受けるなど支援を申し出た。

バードさんは、今まで面識のなかった多くの人の優しさに触れ、こう話した。「野良犬たちへの思いやりだけではなく、お互いを思いやる心を感じた。私は今までこれほどまでに、お互いがどこの何者でも、国を越えて団結するという姿勢を感じたことはない。これがまさにオリンピックが私たちに教えていることではないでしょうか」。(AP 通信)

犬たちが保護されているソチのシェルターの担当者によると、引き取りを望んで連絡してくる人の90%が米国人だという。前述のHSIでは、ホームページにソチの野良犬の引き取り方法についての情報を掲載した (The Wall Street Journal)。

## ◇大量処分は過去にも

実は、野良犬(猫)の大量処分はソチ市だけではなく、2004年のアテネ五輪や2008年の北京五輪でも行われた。罪のない命の犠牲の上に成り立つ祭典に、真の価値を見出すことはできない。現在、五輪規定で、開催国が準備の名目で動物達に対して非人道的な扱いをしないよう定めることを求める声が上がりはじめている。東京五輪で、再び命が虐げられることがないよう願うばかりである。(萩原桃子)

## ⑤元麻薬の売人が企業のトップセールスマンに

ニューヨークには、元ギャングリーダーや麻薬の売人たちのビジネス力を徹底して開発し、プロのビジネスマンたちの支援で起業させて立派に利益を生み出しているという、驚きの非営利団体「ディファイ・ベンチャーズ」がある。(以下、ビジネス誌「Inc.」より)。

設立者のキャサリン・ロアさんは、ベンチャー企業や未公開株式への投資を扱う会社にいた経験から、高い能力を持つ受刑者に投資した場合の利益率の高さに気付き、この活動を始めたという。

「私は初めて刑務所を訪れた時、受刑者たちの持つ性質が、企業のCEOやウォール街の人々のそれと非常に共通していることにすぐに気付き、大きな衝撃を受けました」。

ロアさんはまず、テキサスで「刑務所起業プログラム」を立ち上げた。80%の参加者は暴力犯罪の前科を持ち、大半がギャング活動や麻薬の売買において大変立派な(?)リーダーシップと能力を証明した人たちである。

彼女が指導した5年間に600人が卒業したが、彼等の再犯率はわずか5%で、98%が就業し、60以上のビジネスを立ち上げた。彼等はそれまで刑務所や福祉で税金を使うばかりで、公的財政の重荷でしかなかったのが、1年間に1,300万ドルの収入を達成し、400万ドルの税金を納めたのである。

次にロアさんが設立したのが「ディファイ・ベンチャーズ」で、ベースをニュー



ヨークに移し、起業支援の体制はさらにプロフェッショナルになった。資金提供やマネジメントを行うのは、投資家や起業家たちである。2010年の設立から3年近くで1,000人の企業幹部たちがボランティアで協力し、ビジネスプランの審査から指導役、相談役まで

キャサリン・ロアさん(中央)と元受刑者たち<Defy Ventures>

務めた。優秀なプランには資金が提供される。

例えばマイキー・コールさんは小学3年で麻薬売買を始め、20年間かけて一大事業を築き上げ、逮捕された。彼は「ディファイ・ベンチャーズ」に参加し、徹底した人間性の成長や財務モデリングなどの指導を受けてアイスクリームビジネスを起業。これがシリコンバレーの著名な投資家の目に留まり、工場を拡張するために6万ドルの投資を受けた。

ロアさんがこの活動を始めた時、まわりからは「クレイジー」とけなされた。ベテランの刑務職員からは「こいつらは実家のママに送る手紙さえ満足に書けないんだぞ」と嘲られ、元ギャングへのそうした誤った思い込みが彼女のやる気に火をつけたという。

再犯した人の95%が逮捕時に無職だった—という事実を、彼女は重視する。「こう考えてみてください。あなたという人間が、これからの人生ずっと、これまでにあなたがした最悪の行為によって評価され続けるとしたら、どんな気がしますか？」

#### ◇元ギャングを投資の対象に

実際に、元ギャングの能力を見込んで雇用し、育成に成功した企業の事例を2つ紹介しておこう。

まず「エレクトロニック・リサイクラーズ・インターナショナル」というアメリカの電子機器リサイクル会社だ。世界を股にかけて活躍する同社が誇るトップセールスマンは、元麻薬の売人である。

全身100カ所に入れ墨を入れたこの元受刑者は、60回も就職面接で落とされ続けていたが、カリスマ経営者として知られるCEOのジョン・シェゲリアンさんは、面接で感じた彼の「頭の良さ」を評価し、雇用した。

するとすぐ、その男性の働きぶりに、同社COO（最高執行責任者）である妻も目を付けた。「彼は頭がいいし、いろんな能力を持っている。麻薬セールスのベテ

ランなんだから、うちの商品を売るのだって大して変わらないわよ」。

夫婦の太っ腹な期待に、男性は見事に応えた。「彼はいまや、1日19時間は世界中からの取引の電話を受け、プラスチックやガラス、銅など様々な材料の売り買いに奔走しています。私たちは、彼が生まれ持った能力を活用し、良い方向でその力を生かせるように支援しただけです」(CBS ニュース)。

また、「ザ・マーケティング・グループ」のオーナーで、複数のベンチャーを起業したベス・ヴァレンテさんも、試しに1人の暴力犯罪者を雇用したところ、2つの支所と4つのチームを任せられるまでの人材に成長した。少額の投資で、大きく育ったわけだ。ヴァレンテさんは「このような人たちは、これから成長を目指す企業にとって大きな財産になる」と気づき、戦略として新たに元犯罪者を30人雇い入れたということである(Inc. 誌・キャサリン・ロアさんの記事より)。

## 2. 周縁へ目を向ける・足を運ぶ・定住する

### ① 中央集中から地方分散への努力

最近中央集中から地方分散への努力が始まっている。どこの国でもあるだろうが、日本という国は一極集中しやすいお国柄なのかもしれない。自分自身に独自の信念なり理念を持っていないと、誰か中心になる人又は場所に皆が集まるようになるのではないか。みんなが東京へ行けば、我も我もと同じ行動をとる人が集まってくる。そうやって、東北では仙台に、北陸では金沢に、集中している。そしてそれ以外の地域が過疎化し、廃墟化していくのだ。

### ② 地域ごとに自立した小社会を作っていこう

この一極集中を何とか変えていこうと、いろいろな試みが始まっている。地方に

出店を作ったり、前線拠点を作ったり、もっと発展して、電力等のエネルギーを地元で自給することで、地域ごとに自立した小社会を作っていこうという動きもある。

### ③過疎地の逆襲

#### ◇合同学習や教材共有で対処

全国の過疎地で小中学校の統廃合がすすめられてきたが、徳島県教育委員会は「過疎地の学校を存続させる」道へ方向転換した。「これ以上の統廃合は地域の実情に合わず、望ましくない」と、人口の少ない地域の学校を維持するため、既存の制度にとらわれない新しい学校づくりをめざすという。

徳島新聞の報道によれば、県と鳴門教育大学の共同研究の結果、2種類のモデル事業が始まった。1つは近隣の学校間で連携を強める「チェーンスクール」事業で、阿南市の3つの小中学校で合同授業をしたり、教材や備品を共有して経費削減を図る。

2つ目は牟岐町で行う「パッケージスクール」。小学校と中学校が同じ敷地内にある利点を生かし、教師が学校の垣根を越えて指導を行うほか、保育所や福祉施設との連携を深め、「地域になくてはならない中核施設」に育てる。

学校がなくなると、地域から活気が失われ、未来への希望がいよいよ薄れてしまう。IターンやUターン希望の子連れ家族にも敬遠され、さらに過疎化が進行するという悪循環。そこで、過疎でも学校を存続させようという努力は全国で見られる。報道されている事例から、その手法を見てみよう。

#### ◇対象児が1人いれば開校

まず、Iターン・Uターンで移住してくれる家族を積極的に募り、たとえ1人でも子どもが来れば学校を開けます、というやり方だ。

熊本県多良木町は、過疎からの再生をめざして小学校を再開するため、「小学校進学を控えた子どもか小学生の子どもがいること」という変わった条件を付けて、高齢者を支える「集落支援員」を外部から募集した。結果、就学前の2人の子がいる夫婦が福岡県から移住し、まずは長女1人から学校を再開するという（毎日新聞）。「生まれ故郷に家族を連れて戻りたい」という元住民が、Uターン移住するために学校を再開させた事例もある。大阪市でデザイン会社を運営していた福井大和さんは、香川県高松市の男木島出身。瀬戸内国際芸術祭の会場となった男木島を家族で訪れたことがきっかけで移住を希望するようになったが、小中学校ともに休校中だった。

当初、学校再開の要望は却下されたが、福井さんは島民や島の出身者900人分の署名と要望書を提出し、小中学校の再開を見事実現した（関西テレビ「スーパーニュースアンカー」）。

結局、芸術祭を機に男木島出身の合計4世帯のUターンが決まり、福井さんらは「どうせなら学校再開を島の魅力発信につなげよう」と、市内のデザイナーの協力を得て、島をイメージした新しい制服デザインも考案したということである（四国新聞）。

#### ◇高校魅力化プロジェクト

なくなって困るのは、小中学校だけではない。島根県の隠岐島前地域では、超少子高齢化に歯止めをかけるために産業創出や子育て支援策などを講じたが、大きな問題があった。中学卒業と同時に本土の高校へ進学する生徒が多く、島唯一の隠岐島前高校の生徒数が激減し、廃校の危機に瀕したのだ。

島外へ子どもだけが通うと家計の負担になるため、子どもの多い家族ほど、一家で島を離れることになる。子連れ家族のIターン・Uターンも激減する。いくら島の生き残りをかけて移住推進策を講じても、「地域から高校がなくなることで水泡



に帰す」のだ。

そこで島民は「隠岐島前高校魅力化プロジェクト」を立ち上げ、大胆にも、島外から講師に呼んだ優秀な人材に目をつけ、「島に移住してくれ」と熱烈にアプローチ。学生時代に20カ国の地域開発の現場を歩いて本を出し、その印税でアフガニスタンに学校を建設し、ソニーで人材育成や組織開発に従事していた岩本悠さんだ。

住民の熱意に折れた岩本さんがプロデューサーに就任し、「魅力化」を推進。主な特徴をまとめると、①少人数だからできる綿密な個別指導、②「島留学」推進制度で多彩な生徒を誘致、そして③地元資源を生かした仕事づくりや、地元の問題解決に取り組める人材を育てるということだ。

#### ◇少数だからできる個別指導

①は、「島だから学習レベルが低い」というレッテルを払拭し、逆に少人数だからこそできるハイレベルな個別指導をめざした。地域に「隠岐國学習センター」という公営塾をつくり、高校と連携して一人ひとりに合わせたカリキュラムによる個別学習とキャリア指導を行っている。地理的なハンディキャップを補うため、必要に応じてIT技術も活用し、全国のプロフェッショナルとの対話や東京の高校生との議論の場などもつくっている。

②意欲のある生徒、優秀な生徒には3年間の入寮費などを補助することで、島外からの「留学」を推進し、多様性を実現した。様々な視点から地元資源を評価できたことから、高校生が地元の観光プランを発案する「観光甲子園」でグランプリを受賞。

③教員数は少ないが地元資源は豊富—という特性を生かし、「島全体が学校」と考える。まちの人と一緒に実際のまちづくりや商品開発を行って学習する中で、「仕事がないから島に帰れない」から、「仕事をつくりに島に帰りたい」へと生徒の意識を転換する。

例えば「地域学」という科目では、地域内外のエキスパートの協力を得ながら、生徒それぞれの興味に応じてプロジェクトチームを組み、地域の課題解決に取り組む。23年度は「船とバスのダイヤ改正を通じた住民の利便性の向上」や「子どもも楽しめる島前の新たなパンフレット作成」などのテーマに生徒が挑戦し、実際にダイヤ改正やマップ作成が実現した。卒業後、島と東京をつなぐ人材ビジネスを構想してビジネスプランコンテストで入賞した生徒もいる。

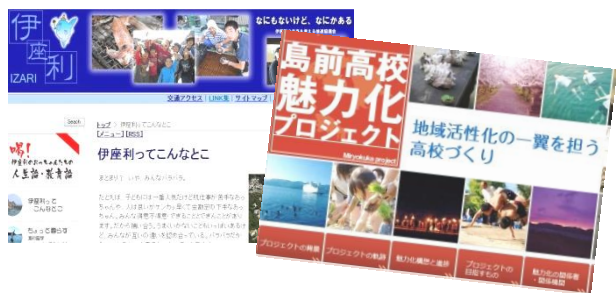
こうした取り組みの結果、隠岐島前高校の入学希望者はV字回復を果たし、24年度には僻地の学校としては異例の学級増（定員40名から80名へ）を実現した（以上、隠岐島前高校魅力化プロジェクトのホームページ資料より）。

#### ◇「なんとかせなあかん」

これほどの規模の事例になると、参考にならないと思われる方もいるだろう。過疎地域の住民だけで何ができるのか—ということだ。

だが徳島県由岐町の伊座利小学校の事例は、ちょっと違う。「なんとかせなあかん！」というおっちゃんおばちゃんの気合だけで、小学校の存続を実現した所だ。

地域の小学生が5人に減ったとき、「なんとかならんか」と考えてみたが、いい案が浮かばなかった。そのうち「5年後には生徒が1人になる。学校は閉鎖」と町から通達があり、「なんとかせなあかん！」となった。県や町に学校を残すよう陳情し、都市部の子どもを受け入れる留学制度を提案したが、反応なし。「これはもう自分たちでやるしかない」と、住民だけで都会からの留学生の受け入れ制度を立ち上げた。



まず「おいでよ海の学校へ」という一日留学体験イベントで、大敷網漁やクルージングを楽しみ、キャラの濃さが自慢の伊座利住民とふれあってもらおう。留学

写真：「伊座利の未来を考える推進協議会」と「隠岐島前高校魅力化プロジェクト」のホームページ

は1年の短期から可能だから一時的な住民も多いが、それでも生徒数は確保できる。学校への入学者は倍増し、現在は受入れ家屋の不足から断ることが多いほどだという（徳島新聞）。

#### ◇「あきらめ感」を払拭

こうした成功例には、「インターネットでの活発な情報発信でUターン希望者にアピールする」などいくつかの共通点が見られるが、中でも大きいのは、最大の敵は住民の間に漂う「どうせ無理だ」というあきらめ感であることと、そこからポジティブ思考に切り替え、「過疎のデメリットも含めて、ここにあるものを最大限生かして勝負する」という発想の転換の精神であるようだ。

隠岐島前高校の岩本さんも、当初は「2学級を目指そう」という意見が出れば「何を寝ぼけたことを」とあきれられ、目標として掲げることもさへ却下されたり、「意欲の高い生徒を全国から募集しよう」と言えば「こんな所にそんな生徒が来るわけがない」と失笑が起きたといったエピソードを紹介している（山陰中央新報）が、「できない理由を考えるよりも、できる方法を考える」というプラス思考で島民を導いた。

伊座利でも以前はあきらめ感が強かったが、全住民をメンバーに「伊座利の未来を考える推進協議会」を発足して活動に踏み込むと、「なにもないけどなんかある」を合言葉に、島の「変なおっちゃんたち」までもが資源化され、中学生が作ったおっちゃんおばちゃん辞典なるものがホームページに堂々と掲げられている。

「子どもが少ししかいない」「住民同士が家族同然に関わり合う」といった田舎の特性も長所として生かし、「集団生活になじめず小学校入学から5年間不登校」という子や、不良になりかけていた男子中学生なども受け入れ、毎日楽しく登校できるようにしてしまった。

その男子中学生いわく、学校へ行くのが面倒で家で寝ていたら枕元に先生が座っ

ていたり、道を歩いているだけで、その辺のおっちゃんおばちゃんに「ちゃんとあいさつせん！」と怒られる。「なにもかも伊座利はめちやくちや。ほなけど、おもしろかった」。

今では島民が集まると、北海道、東京、千葉、京都など様々な地域のアクセントが飛び交い、「伊座利もすっかりインターナショナルやお」と住民。そして彼らはこう振り返る。「こんな小さな集落が行政に頼らんと、ここまでやってこれたんは誇ってもええと思うんよ」（徳島新聞記事）。

### 3.「ご近所」は13番目のキーワード

前掲の「地域ごとに小社会」を最も具体化したのが「ご近所」だ。このキーワードは、12のキーワードの「本人発」でも出てくる。福祉関係者には、福祉の拠点は市町村のセンターだという思い込みがあり、そこでサービスを作り、そのサービスを受けたい人はこっちまで来なさいというやり方をとっている。

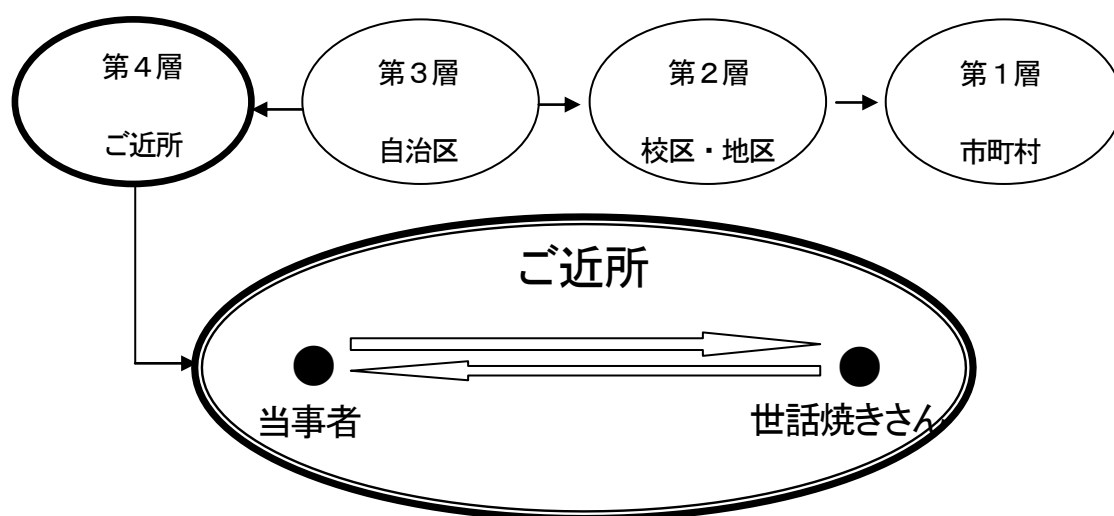
ところが、当事者はそこから遠く離れたご近所にいて、そこでニーズを発信している。要援護のため、ご近所から出るのは難しく、ここが生活圏になっている。だから、当事者のニーズを把握したければ、ご近所まで足を運ぶべきなのだ。当事者はこのご近所をこそ理想的な福祉の場にしてほしいと言っているのであり、そのために関係者はご近所に結集すべきである。そうすることが、「本人発」の実践になる。

この「ご近所」は、「スロー」でも出てきた。人々の最も身近な生活拠点であるご近所で寄り添い、助け合うことが「スロー」な生き方にピッタリだし、それを応援することが「日陰に光」を与えることにもなるのだ。

既に述べたように、古代の日本では、地方行政制度が国郡里と定められ、その里

は50世帯だった。今でも実質的に50世帯程度で人々は寄り集まって暮らしている。そこに当事者がいるのだが、一方で、この「ご近所」には世話焼きもいる。世話焼きさんは後の方で出てくるキーワードの1つだが、この人が地域を福祉化するのに重要な役割を果たしている。

この両者がご近所で出会っているのだ。世話焼きさんはいつも、困っている人はいないか気にかけているのだが、この上の層である自治区は広くて要援護者を見つけにくい。そのため、世話焼きさんは主に「ご近所」で活躍している。



このように「ご近所」は、「本人発」と「スロー」と「日陰に光を」の3つのキーワードに関わっており、「ご近所」は13番目のキーワードと言ってもいいのだ。

## 4. 「にも」という、陰の存在への目配り

「にも」という言葉がある。この言葉が、陰になった対象をあぶり出し、そこに光を当てようという、まさに「陰に光を」を象徴する用語になっている。その「にも」で最近目立つのが、「子どもにも」という使い方だ。

## ①子ども「にも」ホスピスを用意しよう

子どももまだ日陰の存在と言える。この部分で希望が出てきているのが、「にも」。子どもも1人の人間として扱おうというものだ。小学生に大学並みの講義、緊急地震速報は子どもにも、子どもの臓器移植に子どもの同意も、子ども向けのホスピスも、がんの告知を子どもにも、幼児向けのクラシックコンサートなど。

## ②飲酒運転を許す店主「も」犯罪者

これまでは飲酒運転をする人だけに目が向けられていたが、今は飲酒運転を許す店も問題だ、喫煙を許す飲食店も問題だ、子どもの喫煙を許す大人も問題だというように、反対の意味で日陰にいる人にも光が当たり始めた。こちらは、陰に隠れた問題行為をあぶり出すという意味である。

## ③死「も」豊かに。病気「も」豊かに

死とか病気にも光を当てようという動きも出ている。自分の葬儀や、お棺や死に装束を自分で作る人が増えている。病気と言えば、病院食を美味しくしようという動きや、癌患者のための魅力的なかつらをつくろうといった動きもある。

### 3.救済の対象②

# 森羅万象

人間が人間を救うというように、私たちの視点は人間に限定しがちだが、実際には人間も自然に救われているし、その反対もあるのだ。人間だけでなく、鳥や犬、樹木や水、それらすべてが救済に巻き込まれているという広い視点で考えてみよう。そうすれば、意外な救済者が解決策として登場するかもしれない。

## ■「森羅万象」の解説

### 1.「人間だけの福祉」と「万物を含めた救済」

森羅万象を辞書で引くと、天地間に存在する、ありとあらゆる、すべてのもの、事象とある。これをいただいて、今までの「福祉」よりももっと広い概念を作る必要がある。

#### ①鳥や水、樹木などが、命を守るのに関わり合っている

というのは、救いというものは、人間対人間の間だけで行われているものではない。鳥や水、樹木、空気などが、互いに命を守るのに関わり合っていることが分かってきた。これまでの「福祉」は、人間対人間の関わり合いだけで考えられてきたが、これからの地域社会では、鳥獣や自然も含めたすべての命を包含した新しい福祉概念を作り出す必要がある。それを「救済」と言ったらどうか。

では具体的にどんな救済がなされているか。

### 2.救済の存在を証明する「癒し」

万物が助け合っていることをどうやって感得するのか。「癒し」という言葉がある。これによってその存在を明らかにすることができるかもしれない。

#### ①あなたは何に癒されている？



80代の一人暮らしの女性に「何に癒されているのか？」と聞いてみた。

答えは…①畑（自分で耕作）、②ボランティア（5つのグループに所属）、③ご近所の子ども（遊びに来る）、④家、⑤手毬づくり、⑥写経、⑦弟（警察官で、見回りに来る）など。

手毬づくりがどうして救済行為をするのか、またそれをどうやって明らかにするのか。その時、「癒し」という言葉に意味が出てくる。本人が手毬で癒されたと実感すれば、その手毬が彼女に救済行為をしたとすることができるのだ。むろん主観的なものだが、主観は主観なりに、当人の心が癒されたと言えるのだ。

## ②祖父母と同居したら、優しい子になった？

ある幼稚園に高齢の先生がいて、園児たちは「おばあちゃん先生は、僕が遊ぶのを見ててね」と言う。彼女が見ているだけで満足するのだ。つまり子どもは、彼女に見守られることが癒しになっていた。森林浴ならぬ老人浴とでもいうのか。

この先生、園児に2種類の子がいることに気づいた。心豊かで優しい子とそうでない子。家庭調書を開いてみたら、前者は家に祖父母がいた。高齢者は居るだけでボランティアをしていた？

救済が行われたことは、それをされた方が癒しを実感することで明らかになるとすれば、救済はいろいろな場でいろいろな形でなされていることがわかる。

上記の場合、子どもが高齢者に見守られることで癒されたと実感した。ならばこの先生は子どもに対して救済活動を行ったことになる。高齢者が家に居ることで子どもが「心豊かで優しい子」になりやすいとすれば、これもまた救済の証明という

ことになる。

老人病院で化粧教室が開かれた。効き目のほどは？と院長に尋ねたら、「すご  
いよ、寝たきりの人が起きてしまう」。なぜか。「こんなきれいな顔になったのに、寝  
ていられるか！」ですと。

### ③化粧をしたら寝たきりの人が起きた！

化粧教室を担当した資生堂のスタッフに2枚の写  
真を見せてもらった。認知症の人に化粧をしてあげた時の、  
「使用前・使用后」の写真。明らかに使用後に表情が変  
わっているのが分かった。化粧が彼女を癒した、治療したのである。



## 3.救済の存在をどれだけ見つけられるか

森羅万象が助け合っている、癒し合っていることは、今述べたように目には見え  
ないけれども、された方がそれによって癒されたと実感することで、救済が行われ  
たことが分かる。としたら、この森羅万象に限っては、当人の癒しの実感という主  
観的な反応で、救済の効果を見ていく必要がある。だから、水面下で行われている  
さまざまな救済行為をどう特定し、大事にしていくかが重要になる。

### ①目に見える行為しか評価できない業界人

住民の間で行われている助け合いを、業界関係者（施設職員や福祉系学校の教員  
など）に観察してもらったら、彼らの感想はたった一言、「あれはただのおしゃべ  
りで、福祉活動ではありません」。配食サービスや友愛訪問といった形式的なもの、

目に見えるものしか評価しないのである。

住民間の福祉的なやりとりは、たしかに見えないはずだ。住民は、見えないよう  
に行動しているのだから。福祉行為を受ける側の人からすれば、ミエミエでやられ  
るより、その方がずっと有難いのである。

## ②サロンの会場の中心には仏壇があった

全国各地でふれあいサロンが開かれている。公的施設でやっている場合もあるが、  
空き家だとか、お堂のようなどころで行われる場合もある。

そういう場を訪問していて気づいたのは、サロンが開かれる場の中央にはよく、  
仏壇やお地蔵様などがあるということだ。別に信心をしていなくても、サロンはそこ  
にお参りをしてから始める。地域に行ってみると、大体50世帯単位に神社ができ  
ていて、そこが昔は1つの集落だったということがわかる。救済の中心には神社が  
あったのだろう。

## ③花で「癒し合い」

庭にたくさんの花を植えている家があり、通りがかりの人がそれを見ているとい  
う光景はよく目にする。ある家の主は、通行人が長いこと庭を見ているので、疲れ  
てしまわないようにと、庭に縁側も作り、そこに座って見てくださいと呼びかけた。

私の家の近くの住宅地を何気なく歩いていたら、ほとんどの家が、門の脇や垣根  
に花を植えていた。よく見ると、すべて外向きに植えられている。通る人たちに楽  
しんでほしいというのだ。住民たちに聞いてみたら、珍しい花を株分けしたり、タ  
ネをもらったり、花で助け合いをしていた。

これまでは、このような行為は福祉とは何の関係もないと思われてきたが、救済  
となると、福祉的な行為としてその効果も考慮されるようになる。

## 4.問題の捉え方①

# ポジティブ

物事を良い方に考える。問題といえば悪い事象だが、それを良い面から考え直してみると、意外な解決策が出てくるかもしれない。障害は意外や才能だった。悪もそれを良い面に生かせば、社会の役に立つ。お酒をやめられない人に、他の人にお酒をやめろと説得する役割を与えるなんて矛盾しているようだが、その結果、本人は酒をやめられた！ すべて、物事をポジティブに考えてみた成果だ。

# ■「ポジティブ」の解説

## 1.物事をプラス面から見る

### ①「癌はゆっくり来るからいい」というプラス思考

病気や障害をプラス面から見る。癌はゆっくり来るからいい、という人がいた。突然病気が襲ってきて、突然あの世に行ったのでは心残りだ。じわりじわり来るのなら、いろいろな準備ができる。物は考えようというわけだ。だから何なんだと言われるかもしれないが、ここから意外な成果が生まれてくる。

### ②大リーグのコーチは、いい所だけを伸ばす主義

悪い面は避けて、良い面だけを見て、それを褒めるという方法。けなすのではなく褒めるというのも同じ。元阪神タイガースの掛布さんが、しばらくアメリカのマイナーリーグの監督を務めた時のことをこう語っていた。

向こうでは、選手の欠点には目をつむる。それよりも、いい点を探し出し、それを徹底的に磨かせるのだ。そう言えば、向こうの選手のバッティングのやり方を見ていると、これで本当に打てるのか素人のこちらまでが心配になったりするが、それでも立派にホームランを打っている。

日本のコーチは、どちらかと言うと欠点を治すことに関心を集中させていると彼は言っていた。有望なホームランバッターになるはずだったのに、コーチにスイングをいじられ過ぎて、駄目にしてしまったというケースがたくさんあるらしい。

### ③義足のファッションモデルーこれで5種類の背丈を選べる

◇自由に足を取り替えられる

大手化粧品会社「ロレアル」パリ社のイメージ大使に選ばれたエイミー・ムランさんは、腓骨（下肢の細い骨）を持たずに生まれたため、両足を切断。義足のアスリートとして、パラリンピックで複数競技の世界記録を更新し、その後はファッションモデルや女優としても活躍している。

エイミーさんは言うまでもなく美人だが、これまでジェニファー・ロペスやビヨンセといった超大物の美女たちが務めてきた役に、知名度では劣るエイミーさんが採用された上、義足を隠すのではなくそれを生かしたCMが作られるということは、障害を含めた1人の女性としての美しさが認められたと言えるだろう。

ではエイミーさんは、どのように特別なのだろうか？ エイミーさんについて最も有名な事実と言え、彼女自慢のコレクション—「12種類の義足」がある。ない足を補うためだけなら、1足あれば足りるはずだが、彼女はそうは考えていない。

せっかく自由に足を取り替えられるのだから、単に歩けばいいというのではなく、義足だからできる方法で人生を豊かにしようと考えているのだ。



エイミー・ムランさんがモデルをつとめたケネス・コール社の広告

例えば、走るための義足は、チーターの後ろ足を研究してつくられたカーボン・ファイバー製。きれいに見せたい時は、バービー人形風の美足がある。どれもオーダーメイドで、用途に応じて12種類を使い分ける。

## ◇失った足の代替品ではない

エイミーさんの名を広めた活動の1つが、TED会議で行った、義足の可能性についての講演だ。TED（テクノロジー、エンターテインメント、デザインの世界をつなぐ会議を主催する団体）がHPで公開した映像が感動を呼び、世界中で多くの人が視聴しているが、その中で彼女はこんなエピソードを披露している。

エイミーさんは義足のおかげで、5種類の背丈を選ぶことができる。その中のお気に入りの1足は、背をすらっと高くし、彼女をモデル体型にしてくれる逸品だ。その義足が完成した時、マンハッタンでのおしゃれなパーティーにつけていったところ、そこに彼女を長年知っている女友達が来ていて、エイミーさんの姿を見た途端、口をあぐりと開けて叫んだ。「あなた、背が高いわっ!」。彼女が得意気に「そうなの。これいいでしょ?」と言うと、その友達はエイミーさんの目を真っすぐに見て、こう言った。「でもエイミー、そんなのって…フェアじゃないわ」。健常者に「ずるい」と言わせたこの瞬間、エイミーさんの義足は「フェアネス」を実現したのだ。エイミーさんは聴衆と一緒に楽しそうに笑いながら、興奮気味に語った。

「何が面白いって、彼女は本気でそう言ったのです。このとき私は、この10年間で社会は変わったと悟りました。もう『欠けたものをいかに補うか』という問題ではなくなったのです。足がないことに新たな可能性が生まれるのです。義足はもはや喪失した足の代替品ではありません。それを身につける人が、そのスペースに自由に、創りたいものを創れるということです」。

彼女はそれを実現するために、既存の医療装具業界の外にいる、科学や芸術の専門家たちに、その才能を提供してくれるよう訴えかけた。現在の医療装具が、欠けた身体の代替品以上のものになるには、最新の科学だけでなく「アート」、つまり「美」も必要だと彼女は言う。

「美は、重要なものです。美は、人々が目を向けられないもの、こわいと思うものを芸術品に変え、もっとよく見てみたいと思わせ、もしかしたら理解することさえ可能にしてくれるかもしれないのです」。

## 2.障害は見方を変えれば才能だ

### ①天井のシミが気になるのは「才能」だった

例えば自閉症の人が天井のシミが気になって仕方がないというのは、障害特性だが、見方を変えればその特性を才能として生かすことができる。

天井のシミが気になる自閉症の人が、印刷所では、印刷ミスに瞬時に気づき、紙の裏表も瞬時に見分ける特殊能力の持ち主として重用されている。障害は、じつは才能だった。

「シミが気になる」だけだったら障害になってしまうが、その特性を逆に生かして、印刷所で印刷ミスを瞬時に見分けられるとなると、これが才能に転換されるのだ。そうすると、その人が持っている特性そのものが障害というよりは、そのマイナス面だけが表に出ている状態が障害なのだと考えたらどうか。

最近では、日本の企業の間でも、「障害特性を生かす」という発想が使われているようだ。その特性を能力として活用する知恵があれば、いくらでも障害者は社会進出できるのだ。

### ②イスラエル軍の情報部隊で自閉症の人たちが精鋭として活躍

イスラエル軍の「インテリジェンス・ユニット」（情報部隊）で、情報活動に携わる自閉症スペクトラムの若者たちが話題になっている。「軍にとっては、彼等の優れた映像思考能力や細部へのこだわりが、航空写真のアナリストという高度に専門的な任務において資産になっている」と米国のアトランティック誌は伝えている。



同誌によれば、「ビジュアル・インテリジェンス・ディヴィジョン」(衛星・航空写真の分析を行う部門)では数十人の自閉症の人が働いており、軍事衛星を使って世界中からリアルタイムで送られてくる複雑な写真を分析している。



普通の人にとって、同じ場所を様々なアングルから撮影した写真を1ミリごとに精査し、異変やパターンを見つけ出すというのは困難な仕事だが、自閉症スペクトラムの兵士にとっては違う。ある青年は、「まるで趣味のように、とてもリラックスできる仕事」だと言い、軍によれば、彼の功績で兵士たちの命が救われた場面がこれまでに何度もあったということである。

これまで障害者の作業所で行われてきたのは、誰でもできる簡単な作業をやらせようことだが、そろそろ1人ひとりの能力を障害特性の分析を通して発掘し、それを伸ばす方に転換する必要がある。

### 3.犯罪を悪行でなく「力がある」と見る

アメリカでは、非行少年にボランティアをさせている。ワルは、たまたま力が非行の方に向いてしまっただけで、元々は力がある証拠であり、その力を良い方向に向けさせれば、普通の子よりも素晴らしい活動ができると考える。

アメリカの刑務所では、受刑者に刑務所内のホスピスの運営から介護までを任せられているところがある。その技術や患者への気遣いがあまりに優れているので、介護のプロを驚かせている。

#### ①「国防省に侵入して能力を見せなさい」とハッカーに

## ◇「生徒への情報モラル教育を強化せよ」？

「巨額の予算を投下して進められた最先端の情報管理システムは1人の少年の独学技術によって突破されてしまった」（産経ニュース）—まるで映画の宣伝文句のような報じられ方をした、17歳少年による佐賀県教委の情報システムへの不正アクセス事件。少年は、独自に開発した攻撃用プログラムでシステムの脆弱性をつき、情報を盗んでいた。

驚くのはそれだけではない。じつはこの少年、有料衛星放送をB-CASカードを使わずに無料で視聴できる不正プログラムを作成して公開した罪でも逮捕されていた。警視庁によれば、カードの偽造は珍しくないが、カード自体を不要にしてしまうプログラムの摘発は初めてのことで、少年は「数百ページに上るデジタル放送の仕様書を読み込んで視聴の仕組みを把握した」（同紙）というのである。

事件について問われた馳文部科学大臣（当時）は、「能力にちょっと驚く」と認めつつも、セキュリティ対策を強化したいというコメントしかなく、県教委は「生徒に対する情報モラル教育を強化する」と述べた。

## ◇少年の才能に目を向けろ

これらの“対応策”は、確かにこれまでの日本社会の常識には則っている。だが事件の報道後、ニュースのコメント欄やツイッター、ブログには、少年の行為の善し悪しばかりに目を向け、その裏にある能力や可能性を生かそうとしない日本社会のあり方自体に、ネット世代が大いなる不満や落胆の声を続々と寄せていた。

彼等のコメントの主旨を羅列してみよう。「『これだけのことができる能力がある』と見るべきだ」「能力を良い方向へ生かすためのガイドをしてあげて」「こういう子を生かさず芽を摘むだけだから、日本は亡ぶ」「サイバー犯罪対策に有能な人材が不足しているのだから警視庁で雇うべき」「若いうちから能力を生かせる場がないから、こういうことをする」「この子には、ビジネスの才能のある人が側に必要」。

アップル社を創業したスティーブ・ジョブズ氏とスティーブ・ウォズニアック氏もまた、高校生の際に無料で電話をかけられる違法の機械を作り出して販売していたという事実を指摘している人も少なくない。

これまでも、中学時代にプログラミングに使う「C言語」を独学で習得して国外のハッカーと英語で交信していたという16歳の「自称アノニマス」の少年（ウィルスを保管した罪で書類送検）や、日本初の身代金要求ウィルスを作成したと見られる17歳の少年（不正アクセス禁止法違反で逮捕）などが世間を騒がせたが、東京スポーツにコメントしたITジャーナリストの井上トシユキ氏によれば、10代で時間を持て余し、興味から独学でハッキング等の技術習得にのめり込む子は多く、事件は氷山の一角だという。

井上氏は身代金要求ウィルスを作成した少年について、敢えてコンピューターに強い出版社を狙っていることから、記事に不満があったか、あるいは「セキュリティが高そうだからチャレンジしたかったのかもしれない」と推測している。

#### ◇自分の能力を見せつけたい

こうした少年たちに共通して感じられるのが、高度なコンピューター技術を持つ一方で、精神面ではかなり稚拙であること、そして「自分の能力を見せつけたい」「自慢したい」という強い自己顕示欲に動かされている点だ。

こういう子に「情報モラル教育」をしたところで、あまり効果は期待できそうにない。あるネット民は「この子は褒めて伸ばすタイプ」と書き込んだが、その方が正しいのではないか。

今回の“天才少年”は17歳で学校には行っておらず、教育機関に恨みがあったという供述もしており、そのあたりの経験にも反社会的行為につながる一因があったかもしれないが、学校へ行こうが行くまいが、早いうちに向社会的な方法で技術を披露して評価を得られる場があり、そこから有利に仕事への道が開けるような環

境が広がれば、興味本位で裏の道へ行く子は減らせる可能性がある。

## ◇国防省をハッキングせよ

欧米では、ハッカーは一律に悪とせず、白いハッカー、グレーのハッカー、黒いハッカーといった呼び分けをしており、悪意のある危険なハッキング攻撃から企業や国の重要な情報を守るために、有能な白い（善意の）ハッカーとなる候補者を早くから発掘し、登用しようとしている。

マイクロソフトやグーグルといった企業が行ってきた「バグ（脆弱性）発見報奨金制度」が多くの企業に広がり、今年はずいに国防総省が「ハック・ザ・ペンタゴン」（ペンタゴンをハッキングせよ）と題したプログラムを実施した。

バグ発見報奨金制度とは、自社のシステムに敢えてハッカーに挑んでもらい、悪意のあるハッカーよりも先に脆弱性を発見してもらおうというもので、その重要度に応じて、場合によっては数百万、数千万単位の報奨金が支払われることもあるという。

WIRED NEWS が取り上げたルーマニアの貧しい少年は、子供の時からコンピューター技術に夢中になり、脆弱性をブラックマーケットで高額で売る犯罪行為が横行している同国でその誘惑にさらされながらも、15歳でバグ発見報奨金制度を知ったことで、技術を合法的に生かしながら十分なお金を得ることができるようになり、生活費も学費もそれで賄っているという。

国防総省のプログラムでは、特に多くの脆弱性を発見した2名のハッカーがペンタゴンに招かれ、カーター国務長官から表彰までされたが、その1人は高校3年生だった。

授業の合間にハッキングに熱中していたこの少年は、発見したバグはいずれも残念ながら他の参加者に先に発見されていたため報奨金はもらえなかったものの、代わりに彼の能力に目をつけた複数の企業の採用担当者からインターンシップの申

し出があったというから、成果は十分。さすがアメリカだ。

### ◇犯罪歴があっても雇用

サイバー犯罪の脅威と深刻性が増し続ける中、アメリカやイギリスの捜査機関はその対応にあたる人員の確保に苦労している。できるだけ高度な技術を持つ人材をリクルートしなければならないのだが、そこでは「闇の世界の方がはるかに技術がお金になる」という問題に加え、もうひとつ困った問題に行き当たる。「そうした技術は、アンダーグラウンド（非合法的、反体制的）なハッカーや、ハイテク技術系の犯罪者が精通している」のである（Mail On Line）。

FBIでは2014年、まずは「過去3年間にマリファナを吸っていないこと」という入局基準をどうにかしないことには必要な人材が雇えないということになり、抜け道作りに取り組んでいると長官が発言している（ウォールストリートジャーナル）。

またイギリスでサイバー攻撃に対応するNCCU（ナショナル・サイバー・ディフェンス・ユニット）では、もともと犯罪歴のある人の雇用は禁じられていたが、近年、「犯罪歴のあるハッカーでも、セキュリティ審査に通れば雇用する」と宣言した。国防長官はBBCのインタビューでこう述べている。「私たちは、その人の性質について安易に厳しいルールを設けるよりも、その人の能力の可能性を見たいのです」。

FBIやNCCUのこうした方針転換について、ケンブリッジ大学のコンピューター研究室のリチャード・クレイトン教授は合理的だと評価している。「彼等が雇用したいと望む人材は多くが若者で、若者というのはマリファナなどの良くない習慣に陥りがちだが、年をとるにつれて、それは変わっていくものだ」と。

ただ、これはクレイトン教授も指摘していることだが、犯罪をおかしたにもかかわらず、簡単に給料の良い職に就けるとなると、これもよろしくない部分がある。

その辺りの調整は難しいところだが、教授自身は「たとえば、罪をおかしたらその後5年間は雇いませんよ」といった線引きをしたらどうかと提案している。

NCCUの場合は、国防長官によれば、「個々のケースについて、罪をおかしたのがどのくらい前で、どの程度の罪で、どのような判決が下されたかなどを考慮し、利益に基づいて判断する」としている（BBC）。

また、日本の17歳のハッカーについて、ネットにこんな提案をしている人がいた。「どこかの会社が執行猶予をつけた上でうちに来ないか？みたいな制度があったらいいんじゃないか」。そしてこの意見に対し、「超同意です。才能を世の為になる方向に使って罪を償うという考え方があっても良いですよ」と言葉を寄せた人も。

大きな事件を起こしたにも関わらず、世の中の人たちがこれだけ自分を高く評価し、期待してくれていることを、当の少年にはぜひ知ってほしいと思う。

## 4.問題を抱えた人ほど、活動をすれば治療効果

### ①元犯罪少年が犯罪少年を裁く「ユースコート」（十代裁判所）

「ユース・コート」（少年法廷）は「ティーン・コート」とも言い、アメリカではその効果の高さから、今では全米1000カ所にまで広がっている。その中でも特に本格的に取り組まれている一例が、アメリカの首都ワシントンDCで行われている「タイム・ダラー・ユース・コート」だ。創設者は、タイム・ダラー制度の考案者でもあるエドガー・カーン教授（ディストリクト・オブ・コロンビア大学法学部名誉教授）である。

「ユース・コート」とは一言で言えば、軽犯罪をおかした少年を、軽犯罪歴を持つ少年たちが陪審員として裁くという制度である。検察官役や弁護士役の少年がいる



場合もあるが、このユース・コートでは、陪審員たちと被告の少年が直接対話できるようにとの配慮から、検察役などはいない。

対象となるのは、暴力的でない軽犯罪をおかした12歳～17歳の初犯者で、罪を認めている場合に限るが、ユース・コートに出れば犯罪歴はつ

かない。科される刑には通常、「ユース・コートで陪審員を務める（トレーニングを含め7回）」刑が含まれ、1時間務めるごとに1ドルのタイム・ダラーが獲得でき、貯まるとリサイクルのコンピューターと交換することができる。

#### ◇陪審員と少年が直接対話

では実際に少年たちは、どのような「判決」を下しているのか？ カーン教授が執筆した記事（「Yes!」誌）の中に、こんな事例が紹介されている。

ある少年が、担任の女性教師の車のタイヤを切り裂いた罪でユース・コートに出廷した。彼は宿題をしてこなかったため、放課後に居残りさせられたのだが、先生に「10分だけ家に帰してほしい」と懇願したにも関わらず、無視されたからだという。

彼の自宅と学校の間にはギャングの縄張りが広がっていて非常に危険なため、弟や妹を安全に家まで連れ帰るのが彼の大事な役目なのだが、その日は付き添うことができず、2人を危険にさらしてしまった。また「必ずその役目を守る」と誓ったのに両親をがっかりさせたと思いつめ、彼は怒りを抑えられなかったと言う。

このケースで陪審員たちが出した判決は、以下の通りだ。

- ①この子の担任を変えてあげなさい。この子がどんな境遇にあるかを理解しないような人に、この子の先生になる資格はありません。
- ②先生に謝罪の手紙を書き、30ドルでいいから、自分で稼いだお金で誠意をこめ

た弁償をしなさい。

③弟と妹にも手紙を書いて謝り、いくら腹が立ったからといって、このような行為をすることがなぜ間違いだったのかを教えてあげなさい。彼らはあなたを尊敬し、手本にしているのです。このような行動の仕方は正しくないということを、はっきりさせておく必要があります。

④来月は、地域のボーイズ・クラブ（10代の少年がスポーツやアート、教育プログラムに参加できる施設）で20時間以上過ごしなさい。あなたはもっと同年代の少年たちとふれあい、子どもらしい時間を過ごす必要があります。

#### ◇助け合いを教える必要なし

カーン教授たちはユース・コートを始めて間もなく、「この少年たちに、互いに助け合うよう教える必要などないのだ」と理解したという。人は誰でも、自分と同じ立場で苦しんでいる人と出会えば共感し、何かしてあげたいと思うものであり、それは十代の少年たちも同じなのだろう。彼は初期のケースから次のような事例を引用している。

被告人は、深夜2時に車を盗んで乗り回したロナルドという少年だったが、前かがみで床を見つめたまま、質問にはほとんど答えない。陪審員のイライラが募る中、ついに陪審員のリーダーを務める少女が、ちゃんと話すよう少年に訴えかけると、同席した少年の母親が、彼が話せないので自分が代わりに説明したいと言った。

「私たちが住んでいる地域には、麻薬しかありません。殺し合いしかありません。子どもの手本になるような大人がいません。長男はロナルドの目の前で殺され、それ以来、ロナルドは問題ばかり抱えるようになりました」。彼は誰も信用せず、誰にも心を開かなくなったという。

法廷がショックと静寂に包まれる中、先程の少女（リーダー）が口を開いた。「彼がなぜ問題を起こしてしまうのか、私には、完全に理解できます」。



彼女は声を詰まらせながら言った。「私も、母が殺されるのを見たからです。自分の意思に関係なく、そういうことを経験しなければならない世界で成長するというのは、とても困難なことです」。そして涙を落としながら、少女は少年に向かってこう語りかけた。「私たちは、あなたを助けるためにここにいるのよ。でも、まずあなたが私たちを助けてくれないと、私たちもあなたを助けられないの」。

このようなユース・コートでのやりとりについて、カーン教授はこう述べている。「これが、いわゆる専門家たちが“スーパープレデター”（手に負えない犯罪少年）と呼ぶ少年たちである。私たちはこの子たちと顔を合わせても、彼らのこのような姿を見ることはできません。でも彼ら同士は、見知らぬ相手でも、互いに気遣うことができるのです」。

#### ◇再犯率は3分の1の低さ

ニューズウィーク誌の元社説担当でピューリッツァー賞も受賞しているティナ・ローゼンバーグ氏が昨年、このタイム・ダラー・ユース・コートについて2つの記事を書いている（ニューズウィーク誌）。それによれば、そもそもユース・コートという制度は、「人は、自分たち自身の問題の解決に取り組んだとき、特に大きな力を発揮する」という考えに基づいているという。

その効果はといえば、「Urban Institute」という研究機関がメリーランド州など4州のユース・コートについて調査したところ、同じような罪を犯して通常の司法制度で処遇された少年に比べ、ユース・コートへ送られた少年の再犯率は2分の1から3分の1の低さだったという。また、タイム・ダラー・ユース・コートへ送られた少年の77%が高校を卒業しており、これはワシントンDCの高校生一般的な卒業率よりもずっと高く、ユース・コートへ送られるのはすべて犯罪をおかした問題少年であることを考慮すると、非常に驚くべき数字であるという。

では、ユース・コートという制度に、なぜそれほどの効果があるのか？ ローゼ

ンバーグ氏は関係者への取材を経て、いくつかの可能性を指摘しているが、それをここでは、以下の2つのポイントにまとめてみた。

### ①まずは仲間の問題に取り組むことから

興味深いのは、問題の当事者（被告人）として法廷に立つ経験よりも、その後、陪審員として他の少年の問題を協議する経験により、彼らのものの見方が変わっていくという点である。

1週間前に自分が座っていた被告人席にいる少年が、自分と似た境遇で育ち、同じような問題に悩み、同じような理屈を並べて罪を正当化するのを目の当たりにするうち、自分の姿を客観的に見ることができるようになる。

そして、「この子が抱えている問題行動を解決するにはどうしたらいいのか」とみんなが協議する経験を積み重ねる中で、問題解決能力や自信が磨かれ、同じように自分の問題にも取り組むことができるようになるのだ。

事実、その後の学校での成果を見ても、目標を決めて達成する力、問題解決力や決断力といった能力の高さが目立っているという。

### ②問題少年に、あえて向社会的な役割を与える

ふてぶてしい態度で被告人席に座っている少年を、強制的にトレーニングして陪審員席に着かせ、他の少年を救う役割を与えるというのは、ボランティア活動をする人の動機を厳しく見るような日本人にはまったく考えられない発想である。しかし、ユース・コートを経験した少年たちによれば、「僕たちだって、本当は正しい行動をとりたいと思っているけど、どうやったらいいか分からないから、バカばかりやっちゃうんだ」。たしかに今の社会で、悪いきっかけが重なって道を踏み外した少年が、まっとうな生き方に戻るための「直接的なきっかけ」を見つけるのは難しいものだ。

そこでユース・コートでは、その子が改心しているか、他人の問題を裁ける人間

性が育っているかなどということは一切不問で、まずは形だけでも向社会的な役割につかせてあげるのだ。周囲から軽蔑され、司法制度で罰されるという立場から一転、本物の裁判所に裁判員として出廷し、自分と似た境遇にある少年への判決を決定するという重要な責任を与えられるのである。それまでの人生では、敬意を得るにはタフさを誇示するしかなかった少年たちにとって、これはまったく新しい目の覚めるような経験なのだ。

すると、ふまじめな被告人だった少年が、陪審員として活動するうちに頑なな反抗心がやわらぎ、刑期終了後も自主的なボランティアとして熱心に陪審員を務める一といったことも少なくないという。少年たちの自治権をより尊重しているユース・コートほど成功している（「Urban Institute」調査）というのも、なるほど、うなずける話である。

## ②酒をやめられない人は、他人の酒をやめさせよう

日本では、ボランティアをするには品行方正でないと駄目という、暗黙のルールがあるが、これは大きな間違いだ。

酒をやめられない人は、当面、他の人の酒をやめさせよう。振り返ったら本人もやめていた。ヘルパーセラピー効果と言う。「自分の頭のハエも追えないくせに」は間違いだった。

アメリカ人の面白さは、こういうことを積極的にやるところだ。そして実際にその効果が出ているのだから。「自分の頭のハエも追えない癖に」人のハエまで追ってあげようというのは筋違い、というのが日本人の論理だろう。ところがこの論理は、一見正しいようでそうではなかった。

### ③受刑者による刑務所内ホスピス「仲間を絶対に1人では死なせない」

独りで生きる者同士、病に倒れれば互いに介護し合い、看取り合う一極めて濃密な助け合いが、アメリカの最重警備刑務所の中で実現していた。

「全米で最も血生臭い刑務所」として恐れられてきたルイジアナ州のアンゴラ刑務所を変えたのは、ホスピスの立ち上げをきっかけに受刑者に芽生えた、「絶対に仲間を1人で死なせない」という強い覚悟だった。



「Angola Prison Hospice:Opening the Door」映像より

#### ◆患者と親しい者を「所内家族」

アンゴラ刑務所では、所内の暴力が73%も劇的に減少し、全米の注目を浴びている。そのきっかけとなったのは、敬虔なクリスチャンであるバール・ケイン所長が仕掛けた2つの“セルフヘルプ作戦”だ。1つが「刑務所内牧師の養成」、そしてもう1つが「受刑者ボランティアが受刑者を看取るホスピス」である。

ギャング同士の殺人など重罪犯が多く収容されるアンゴラ刑務所では、85%の受刑者が塀の中で死んでいく。多くは家族との絆も切れ、最期に病院に運んだところで看取る人もいない。新聞でホスピスの記事を目にしたケイン所長は、手を打った。「これをうちでもやろうじゃないか」。

刑務所内ホスピスには僅かながら前例があったが、アンゴラ刑務所での取り組みは「当事者である受刑者を主体的に参加させる」という点でまったく新しい挑戦になった。外からボランティアを連れて来る代わりに受刑者のボランティアを募り、プログラムの立ち上げから患者のケア、看取り、見送りに至るまで彼らが関わっていくのだ。

このアイデアを受刑者のリーダーたちに持って行き、受刑者に話してもらおうと、

意外なことに彼らはこの話に飛びついた。自分たちがこのようなプログラムを必要としていることを十分承知していたというのである。中には「病気の仲間の世話？それなら俺はもうやってるよ」と言う受刑者もいて、さっそくボランティアに名乗りを上げた。

患者が刑務所内で築いてきた仲間とのつながりも生かすべく、患者と付き合いの深い受刑者をその人の「刑務所内家族」と認定し、希望すれば泊まり込みの付き添いもできるなど、特別な面会許可を与えるようにもした。

### ◇あいつの痛みを俺も感じる

ボランティア（全員が受刑者）に参加理由を聞くと、3つの答えが挙がる。「人のために何かしたい」「罪を償いたい」、そして「俺もいつか独りで死ぬから」である。未来の可能性というものが極度に制限されている世界で、家族の支えもなく孤独に死んでいく仲間の姿に、彼らは自分を重ねずにはいられない。俺もいつかああなるかもしれない—だから未来の自分のための準備として、そして今苦しんでいる目の前の仲間に手を貸そうと、ホスピスの立ち上げに協力したのだ。「俺も同じ目にあうのさ。だから俺は、あいつらのそばにいてやりたい。あいつらの痛みを、俺も感じるからだ」。(ボランティアのマイク・スミスさん※①)

患者の多くは、癌やエイズの末期患者。「自分が人のオムツ交換をするなんて夢にも思わなかった」と言う受刑者たちだが、今では「お手の物さ」。彼らは研修で教えられた仕事以上の献身的な介護をするようになり、スタッフを驚かせた。体を洗ったりシーツを交換するだけでなく、患者が少しでも楽になるようにと優しく声をかけ、手を握り、髪を撫で、体を起こし、背中をさすり、手足をマッサージする。死にゆく患者に気まずい思いをさせないようにとの配慮から、臭気を除くような行為はしないという暗黙のルールもある。

患者の死が近づくと、担当する6人のボランティアによる寝ずの番が始まる。「仲

間を決して1人で死なせない」という固い決意から、片時もそばを離れずに見守る。

患者が死を迎えると、ボランティアの中の「キルト制作チーム」が縫ったレースや刺繍入りの埋葬布にくるむ。そして大工職人（これも受刑者）がつくったベルベ

受刑者のキルト制作チームが縫ったキルト



「Grace Before Dying」より

ット敷きの棺に納められ、仲間たちみんなの手で運び出される。

受刑者が企画する別れのセレモニーの後、受刑者がつくった葬儀用の美しい馬車で墓地へ運ばれ、神父（これもまた受刑者）による葬儀が行われる。「一周忌のセレモニー」も受刑者のアイデアだ。以前

は、刑務所の墓地に寂しく埋葬されることを受刑者は恐れたが、これほど手厚く見送ってもらえる今は、「ここに埋葬されたい」とリクエストする人が増えている。

キルト制作チームは、患者のベッドに敷くキルトを縫っているが、販売用にも作り、患者のための資金集めをしている。他の様々な受刑者グループも、それぞれの活動を生かして資金集めに協力している。

資金の使い道はと言えば、病室はもともと独居房だったため、殺伐として何も無い。そこで画材を買って壁に教会のある風景を描いたり、病室用のコーヒーメーカー、ラジオ、本、テレビなどの他、患者の癒しになるようなグッズ—美味しい食べ物、スウェットパンツ、スリッパなどを購入している。キルト作りの腕は上がり、一般のアート・コンテストで受賞するほどになった。

## ◇患者が他の患者の世話も

ホスピスでのボランティア活動は、受刑者の人間性に多大な影響を与えている。「ここで働くには、心がなければだめだ。人間を感じられなければいけない。そして、自分には人に与える力があることを自覚しなければならないんだ」とあるボランティアは言う。暴力しか知らない受刑者にとって、自分が他人を癒すことができ

るというのは、まったく新しい経験であるという。

「自分の中に巣食っていた憎しみや怒りが消えてしまった」という人も多い。冒頭の写真で食事介助をしているレスリー・ウィリアムスさんもその1人。貧困と暴力ばかりの地域で育った黒人の彼は、ずっと白人を敵として憎んできた。「でも今、俺は自分が世話をしてるこの患者を大事に思っていて、この患者は白人だ」。

ウィリアムスさんはまた、自分が心を込めて世話をした患者が亡くなり、家族が泣き崩れる姿を目の当たりにするうち（ホスピスは家族の訪問も支援している）、自分が犯した罪の重さを初めて理解した。「俺は、自分が被害者をその患者のような目に遭わせ、被害者の家族を患者の家族のような目に遭わせたことに気付いたんだ。それは…よくないことだ。俺にも母親とか家族がいて、誰かが俺にそういうことをして、俺の家族をあんなふうに悲しませるなんて受け入れられないからな」。

(※①)

ケアされる患者の側も受け取るものは大きく、患者でありながら、他の患者の世話を始める人もいる。ケニー・ミンゴさんはエイズとC型肝炎を患うホスピス患者だが、他の患者の手助けをすることが生きがいになっている。最近、自分より病状の重い患者に自分の病室を譲ってあげた。「彼を見たとき、自分を見た気がしたん

だ」。(※③)



ボランティアを真似て、仲間の手足をさする受刑者たち「Grace Before Dying」より

## ◇I love you が最後の言葉

ホスピスでの実践は、他の受刑者にまで影響を及ぼしている。ここへ2年半通った写真家のロリ・ワセルチュクさんは、ある象徴的な場面を目撃した（写真）。大工として受刑者の棺作りもしてきたリチャード・リゲットさんは肺癌と肝臓癌で、まったく動けなくなる前に自分の棺をつくり、そ

れからホスピスに入ったという男だ。そんな彼の病室を3人の弟子が訪れ、お喋りをしてきた時のことである。

「彼らは、ボランティアがリチャードに水を飲ませたりベッドを調整したり枕を整えたりするのを見ていたが、そのうち、何かが起こった。大工たちは、リチャードへの愛情を示さずにはいられなくなり、見よう見まねでケアに参加し始めたのだ。ボランティアのランドルフ（右端）は、リチャードのむくんだ手首をマッサージしながら、こうすると血液の循環が良くなってむくみに効くのだと説明した。すると大工の1人が、こわごわとリチャードのもう一方の腕に手を伸ばし、別の1人もリチャードの足首をさすり始めた。彼らは皆、このような身体的なふれあいにはまったく不慣れだった。リチャード本人にとっては、言葉では表現できないような特別な瞬間であり、仲間たちの愛情に満ちた手をありがたく受け入れながら、この経験に圧倒されている様子だった」。(※③)

ボランティアに倣うように、連日泊まり込みで友人に付き添って世話をする受刑者まで出てきた。末期の看取りという、何もかもさらけ出すような関係に踏み出した時、彼らは「人として関わり合い切った」とでもいうような境地に至るようだ。自ら看取った30年来の友人の埋葬で、カルヴィン・デュマスさんはこうつぶやいた。「俺たちは互いに、何ひとつ包み隠さない付き合いをした」。(※③)

この「関わり合い切る」経験を通じて、見知らぬ同士だったボランティアと患者の間にも、本物の兄弟のような感情が芽生えている。「死別体験ケア」の場で、ボ



患者との死別体験を語るラリー・ランドリーさん  
「Angola Prison Hospice: Opening the Door」映像より

ランティアのラリー・ランドリーさんは自分が初めて担当した患者の最期を、嗚咽しながらこう語った。

「ある日、彼に会いに行って彼の手を握ると、彼は俺の手を引き寄せて、俺の手にキスをしたんだ…。

彼が目を開けて何か合図をしたから、背中をさすっ



てほしいのだと思った。だから彼の体を起こしてやると、彼は俺の耳元で、自分を抱擁してほしいと囁いた。そうしてあげると、彼は『I love you』と言った。それが、俺が聞いた彼の最後の言葉になった」。(※①)

アンゴラ刑務所でのホスピス・プログラムは、全米病院協会の賞を受賞し、その教育効果の高さから、州内の他の刑務所へも広がっていった。今年2月には、アンゴラ刑務所内で「受刑者ホスピス・ボランティア・カンファレンス」が開かれ、終末医療や矯正教育の専門家とともに、女性刑務所を含む4つの刑務所から130人の受刑者ボランティアが参加したということだ (PRNewswire)。

<参考資料： ※①「Angola Prison Hospice:Opening the Door」／Open Society Institute (ビデオ)、 ②アンゴラ刑務所ホスピスのボランティア・コーディネーター、タニヤ・ティルマンさん執筆の記事(「Innovations in End-of-Life Care」誌)、 ※③「Grace Before Dying」Lori Waselchuk／Lawrence N.Powell (Umbrage Books) >

## 5.助けられている人ほど、人のためにしたい

文明というのは、じつに単純な考え方をするものだなと思う。助けられる一方の人と、助ける一方の人をつくり、後者が前者に関われば前者は喜ぶというのだから。

ある老人ホームが、在宅の認知症の人の訪問活動に、施設の認知症の人を連れて行った。在宅の人が「アンタよく来てくれた、わしは嫁に押し入れに入れられとる」と言うと、入所者は「あんたはまだいい方だよ。わしは施設に入れられちゃったんだから」。職員はビックリ。その入所者は、自宅と施設の区別もつかないはずなのに。訪問活動をした側の人に治療効果が！

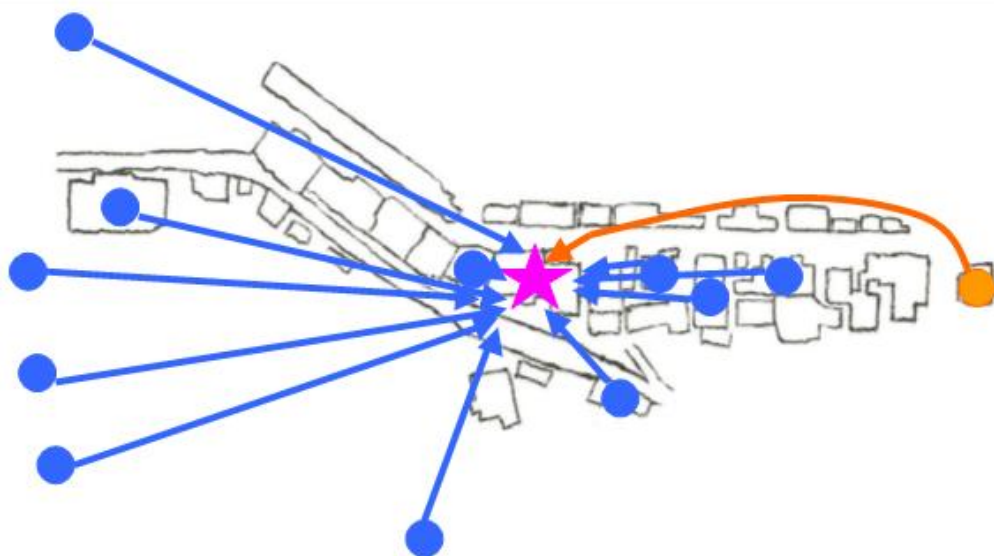
### ①要援護者を「借金まみれ」にするな

私たちには、貸し借りのバランスをとりたいという本能的な欲求がある。自分が助けてもらうばかりでは借金がかさむので、毎日毎日サービスを受ける一方では、バランスが滅茶苦茶に崩れてしまう。それが崩れた人ほど、人のために尽くしたいという切実な思いを持っていて、それが叶えられたとき、治療効果が期待できる。こういうからくりなのではないか。

ある小規模多機能施設であった話。利用者の1人が地域で誰に支えられているのかを調べたら、なんと11人の人から、おすそ分けをもらったりしていた。ところが本人は、この11人全員の悪口を言っている。ただ1人、彼女が悪口を言わない相手がいたが、その人は、11人が彼女の所に持ってくる食べ物などを持っていってしまし、彼女をレストランや洋服屋に連れて行ってお金を払わせている。つまり、彼女を利用していたのだ。ところが彼女は、その人の悪口は言わず、むしろ大事にしている。「あの人はかわいそうな人なの。私が面倒をみてあげているのよ」と。

これはどういうことなのか。彼女は11人もの人から毎日与えられる一方で、欲求不満が溜まっていた。それが彼らへの悪口となった。ところが彼女を利用する人は、一見悪い人間のようにだが、彼女から見たら「自分が与える相手」だから、11人に負わされた「借金」をこちらで返していたことになる。だから文句を言わないのだ。

ちょっとややこしいカラクリだが、要するに、相手を借金まみれにはするなということである。



## 6.障害者はなぜ力を証明する必要があるのか？

### ①「発達障害の不便さが分かった」だけでいいのか

NHKが発達障害を取り上げた。発達障害が日常生活でどのように不便なのかを、NHKらしいわかりやすさで表現していた。

しかし発達障害になるとこんなに生活が不便になる、というだけの理解でいいのか。発達障害は確かに障害（を負わされた）者だとなってしまう。それだけではなく、発達障害だからこそ持っている能力があつて、それが発揮されれば、一般の人以上の境遇を確保することもできるのだということが納得できないと、「偏見」、偏った理解の仕方になってしまうのではないか。

その時アナウンサーが、「発達障害の人の能力が注目されると、能力があつて社会の役に立つからその人を認める、ということになるが、それは違うのではないか」ということを言っていた。なにも、こんな能力があるのだと言わなくても、障害を持つその人をそのまま社会が認めることが大切なのではないかと。

### ②要介護や障害を持つと「何もできない人」と思い込む

しかし、障害があつても、そのままでも価値がある、といった見方はちょっと危険でもあるのだ。そのままでもいいと言いながら、頭の中では「上から目線」になってしまう。ここが恐ろしいのだ。

私たちの障害に対する見方が「偏見」になってしまうのは、障害を持つと、その人の能力ががたんと落ちてしまうという「思い込み」が生まれてくるからだ。

福祉関係者も住民も同じだが、どういうわけか、対象としている人が要介護とわかると、途端に「この人は何もできない人」と思い込んでしまう。本人もそう思い込む。だから、グラウンドゴルフに興じていた女性が認知症になったと聞くと、も

うグラウンドゴルフはできないと決めつけてしまう。「認知症でもやり方次第では  
できる」と私が言っても、まともに取り合わない。

### ③偏見除去の近道は、こんな能力があると見せること

私たちには障害イコール能力が劣る・無力といった思い込みがあるのではないか。  
そうだとすれば、障害への理解をすすめたり、偏見を除去したりするための近道は、  
その人にはこんな能力があるのだということを見せてあげることではないのか。

### ④社会が障害者の行動に価値・能力を見出せるか

この「能力」については、2つの視点を理解する必要がある。まずその1つは、  
障害者からその人独特の能力を発見できるかということだ。ただなんとなく見たら、  
能力が見えない場合でも、もっと深読みして、その人らしい能力を発掘できるか  
ということだ。

企業の社会貢献セミナーで、事例発表者として招待された某企業の知的障害者の  
授産施設の長が、余談として「面白い知的障害の青年がいる」と言い出した。その  
青年の挨拶の仕方に物凄い魅力があって、施設を訪れた客は、その挨拶に出会うと、  
メロメロになってしまうほどだというのである。

たまたまそのセミナーの席に都内の百貨店の社会貢献担当者が数名いたので、私  
は尋ねてみた。「この知的障害の青年を、挨拶という仕事だけで雇用する気がある  
か？」と。すると彼らはヒソヒソ話し合い、結果を1人が発表した。「雇います」  
と。

そうすると、その人が障害者になるか、才人になるかは、社会のその人に対する  
見方や関わり方次第ということになる。未だに大部分の人が「障害者」と見られて  
いるということは、社会が彼らの能力を開発し、活用できていないということに他

ならないのだ。

## ⑤生かせる対象が見つければ、能力になる

能力に関するもう1つの視点が、先ほど述べた「障害特性を生かす」という発想だ。自閉症の人が、天井の細かいシミが気になるのは、障害の表れである。しかし見方を変えて、「ちょっとした印刷ミスに瞬時に気づく」という能力として活かしているといった具合だ。生かせる対象が見つければ、そのまま能力に変質するのだ。

こだわりの強い自閉症の人が豆腐屋に就職し、いい油揚げを作るための豆腐の薄切りの技術で名人と言われている。また、細部が気になり、同じ作業をいくら繰り返しても飽きないという特性を生かして、コンピューターソフトのテスターを請け負っている自閉症の人たちもいる。自閉症の子どもを持つ、デンマーク最大の通信会社の社員だった男性が会社を立ち上げ、その技術の確かさから、マイクロソフトやオラクルといった大企業を顧客として獲得し、今では世界中に広がっている。

いま企業の世界では、障害者をただ雇用するだけでなく、彼らを戦力化しようという動きが広がっている。どうせ雇用するのなら、きちんと戦力になってもらおうというのだ。そこで企業が目をつけたのが障害特性を生かすということだった。

## 7.障害と才能の両面からの診断ができるか？

障害は個性だと受け入れたり、障害を逆に活かせないかと考えたり、障害というのは能力ではないか考える。すべては障害に対するポジティブな見方によるものだ。

### ①「ポジティブ診断」ができない日本の精神科医

障害の診断にあたる医師などが、対象者の障害や病気の面だけに関心を集中させ、ただリハビリや投薬等の処方をするのを見ていると、まるで相手の悪い面をことさら暴き立てているようで、これでは救いが無い。

どうせ診断をするのなら、もう1つの面、すなわちその人の持っている潜在能力についても同様の診断と処方をすべきではないか。こちらが今述べたポジティブな視点なのだ。今の福祉・医療の世界はそう考えると、ネガティブな発想でこり固まっているような気がしてくる。

自閉症を能力の面から見直すということは、このようなポジティブな視点と、その能力を開発する社会の努力が欠かせないということだ。能力にこだわるということは、その人の可能性をとことん探そうと努力することであり、それこそが本当の障害への理解なのではないか。

## 4.問題の捉え方②

# 全体を見る

文明の影響で、私たちは物事をすぐに分別し、個々のパーツに目を奪われがちだ。カメラをぐっと引いて、全体が視野に入れば、見え方が変わってくる。ボランティアは「社会活動」の一面にすぎず、悪いことをしない努力をするのも、不祥事を二度と起こさないよう企業が努力するのも、困ったときに助けを求めるのも、広く見ればみんな「社会活動」だと認知したらどうか。オレオレ詐欺の「受け子」の勧誘を断ったことを褒めれば、その人はもう一歩前進できる。逆に勧誘に乗れば、巨悪を為すことになるのだ。

## ■「全体を見る」の解説

### 1.対象を分別し、そのパーツだけを見る癖

文明は、効率を求めて分別収集を好む。何でも対象を分別するのが私たちの癖になっている。そして各自が、分別されたパーツの1つに取り付いて、あれこれ議論したりしている。

そんなことをしている間に、全体の姿がどうなっているのかがわからなくなってしまう。そういう現代人が苦手なのが、その反対の全体的思考なのだ。

### 2.分別したものを、再度まとめてみる

#### ①助けを求めるのも、悪いことをしないのも、みんな活動だ

私たちは、「良いことをする」と「悪いことをする」の2つに明確に分けて考える癖ができているが、その中間にある、例えば公衆道徳を守るとか、悪事を思いとどまるということも、状況によっては社会の役に立っている。

オレオレ詐欺の「受け子」になれと若者に勧誘攻勢が来ている。悪い誘いを断るのも、その人にとっては「活動」になるのだ。

コロナ禍で仕事を失った若者めがけて、オレオレ詐欺のグループが猛烈な攻勢をかけている。ついつい苦し紛れに引き受けてしまう人も多いのではないか。そんな時に、その勧誘を断るということがいかに大事なこと、勇気のいることであるかをマスコミや様々な媒体で知らせていく必要がある。



コロナに感染していることを承知で、東京からバスに乗って山梨まで行った若者がいるが、その一方で、自分の事情で本当はそうしたくても、感染を広げないためにこれを思いとどまる人が多くいる。これも活動と言うべきだ。

以前、アメリカのデボルトファミリーという一家が、マスコミによく登場していた。心身に重い障害のある子を十数人も養子に迎えて育てているデボルト家のことだ。デボルト家では、例えば階段を1段上がったということで、みんなでお祝いのパーティをする。だから、この家ではしょっちゅうパーティが開かれている。一見たいしたことに見えなくても、その「一歩」が重要だからだ。

同じように、人が悪い方向へ進む場合も、ある日いきなり凶悪なことをするのはなく、いくつかの「一歩」を経ている。その一歩を思いとどまらせることが重要なのだ。そのためには、そのような小さな行為も社会的な行為（活動）として認知する必要がある。

## ②「ボランティア」をやめて「ソーシャル」にしたら？

「ボランティア」という言葉は、そろそろ他の言葉に変える必要がありそうだ。人々が社会に関わる様々な行動を包括した言葉を作り出す必要があるからだ。例えば「ソーシャル」と言ったらどうか。

そうでないと、「ボランティア」の定義に照らし合わせると、日本で「活動」をしている人はほんの僅かということになってしまうが、実際には、誰でも何らかの活動をしているはずなのだ。日本人は特に、表立って活動をするのは苦手で、日常や仕事の中でさりげなくやっている人が多い。そういういわゆる「ボランティア」からはみ出した行為を全部さがして「あなたも活動をしているのですよ」と認知し、推進していけば、日本らしい助け合いの社会ができていく。せっかくやっているのを、あえて「活動」の定義を狭めて排除するのでは、逆効果だ。

### ③活動はグラデーションになっている。そのどれもが活動だ

企業なら、社会貢献をすることから始まって、顧客サービスをする、苦情に積極的に対応する、特注対応をする、問題を発生させたらすぐに認めて対応や再発防止に取り組むなども活動で、これらがグラデーションになっているのだ。

認知症の女性客に数十万円分の買い物をさせたということで、あるデパートが問題になっていた。デパート側は、いろいろ理屈をつけて正当化しようとしていたが、見苦しい感じがした。こういう場合に、認知症の人には売らずに必要な対応をすれば、それだけでも立派な社会貢献になるということを社会的に認めるような制度を作れば、デパート側も考えるのではないか。今の社会はとにかく、良いことをすれば褒められる、逆に悪いことをすれば叱られる、ないしは警察に連れて行かれるという極端な選択肢しかないのがおかしいのだ。あとは褒め方の技術論になる。

### ④ペットを売らないペットショップ

企業のソーシャルな活動の中には、「良いことをする」わけではないが、「悪いことをしない」「社会に迷惑をかけない」といった努力を積極的にすることも含まれ、実はこれも意義深い活動なのだ。

例えば環境的、倫理的な観点から「～な商品は売らない」という選択がある。禁止されていなくても自主的に控えるという場合で、特に率先して行動し、他社に影響を与える企業が果たす役割は大きい。

環境に配慮した最近の事例では、ミツバチ大量死の原因と考えられているネオニコチノイド系農薬の新規登録が禁止されたアメリカで、既存の農薬は使用できるにもかかわらず、敢えて「既存のネオニコチノイド系農薬の販売も段階的に減らしていきます。自然と調和した園芸や農業をお客様に勧めていきます」と宣言する大手ホームセンターが現れた。

最近では日本でも動物福祉の意識が進み始めており、「動物の毛皮を使った残酷な商品は売れません」というファッションブランドや「動物実験はしません」という化粧品会社が目を引くようになってきたが、ペット業界では、殺処分される犬猫の問題に真正面から向き合い、なんと「ペットを売らないペットショップ」になった店がある。

岡山県にある「Chou Chou (シュシュ)」という店は、「多くの動物が毎日殺処分されているのに、新たなペットを販売していてよいのか」と悩んだ。そして動物の販売をやめてグッズだけの販売に切り替え、代わりに保護された犬猫を店内で世話をし、譲渡活動を行うという、驚くべき決断をした。さらに、県外でも同社に賛同して同じ決定をするペットショップが数店舗生まれているという。飼育コストは店の負担になるが、事業への共感から店頭やオンラインでの商品の売上げが伸び、従業員が今まで以上に自分の仕事にやりがいを感じるなど、メリットの方が大きいということである（産経フォト）。

## ⑤ 10年前の不祥事を入社式で語り続ける

不祥事を起こした場合でも、社会に与えるマイナスの影響を減らすべく積極的に行動すれば、結果として社会にプラスの影響を与えることさえできる。

近年、食品への異物混入がたびたびニュースになったが、事後対応の不誠実さで非難を呼んだ企業がある一方で、廃棄したはずの冷凍カツが横流しされていた「COCO 壺番屋」は、とにかく消費者の安全を最優先し、社をあげて素早く徹底した対応を行い、商品回収に動いた。

膨大な数のフランチャイズ店を擁しながら、一パート従業員がスーパーで買い物中に自社のカツらしきものを発見したという報告がすぐさま本部に吸い上げられ、即刻調査をして廃棄業者に横流しを認めさせ、通報し、公開して回収を呼びかけた。

見つけたのが自社の従業員だったにもかかわらず、商品を撤去させて済ませようとはしなかった。この対応が素晴らしいとネットで話題になるなど、消費者に高く評価され、実際に株価まで上がり、企業の危機対応の今後の見本となったのだから、結果として社会にプラスの影響を与えたことにもなる。

また同じ不祥事でも、「それを絶対に繰り返さない」と本気で決意し、そのために行動し続ける—というあり方もあった。明治安田生命の根岸秋男社長についてAERAが取り上げた記事がそうだ。

10年前に保険金の不払いで2度の業務停止命令を受けたという暗黒の過去を、社内でタブー視する代わりに、あえて入社式で語り続けているというのである。根岸氏は当時、業務改善計画づくりの指揮を執ったが、社長就任後もことあるごとに「行政処分を風化させない」と社内で訴え、自らの経営の道筋を示した「ビジョンブック」の巻頭にも掲げ、行政処分から10年の節目だった15年末には、実際に処分を経験した職員が退職などで減ってしまったことから、各部署で当時の経験を共有するミーティングも呼びかけたということだ（AERA）。

### 3.担い手と受け手を分けるのもやめよう

担い手と受け手、サービスする側とされる側を明確に区分けするのも、おかしいことだ。誰でも、両方の体験をするべきであり、要援護の人ほど担い手になるチャンスを求めているのだ。

#### ①「作るのは私たち、あなたたちは食べる役」

会食会関連の集会で、「今回はマーボ豆腐」とボランティアが言うと、参加者の1人が、「私、マーボ豆腐作りが得意だから、私が作るわ」。もう1人が、「俺んちは豆腐屋だから、豆腐を持ってくる」。そこでボランティアが一喝、「作るのは私たち、あなたたちは食べる役です」。担い手と受け手を区別したがるのは悪い癖だ。

「ボランティア」という言葉の問題は、こういう誤解をする人が出てくることわかる。「私が担い手、あなたは受け手」と分けられることが、特に受け手には屈辱を与えることが、(ボランティアには) わからないようだ。

## ②利用者になったり、職員になったり

例えばデイサービスセンターで、1人の人が利用者になったり、職員になったりしたとすれば、どうなるのか。

デイサービスの所長が、若年性認知症でほかの利用者のお世話をよくしている利用者を職員に抜擢した。「利用者の気持がわかる職員になって」と。その後症状が進行したら元の利用者に戻るが、今度は「職員の気持がわかる利用者になって」と。柔らかく考えれば、こういうことができるのだ。

利用者にとっては、こういう対応でいかに誇りを持てることか。全体的思考ができる人というのは、担い手と受け手の区分けを全くせずに、両者を自由無碍に往還することができる人のことを言うのだ。

## 4.助けられるけど助ける、助けるけど助けられる

## ①上手に助けられると「活動」に見えてくる不思議

認知症の女医が、自分が望むケアの仕方をパンフレットにして配っている。もっと進行した時のために、思い出の写真をアルバムにして解説もつけた。「これを見れば、私をよく知らない人でも私とコミュニケーションがとりやすいはずです」。要援護者として上手に助けられるのも「活動」なのだ。

彼女がやっていることは、要するに認知症の患者として周囲に支援を求めることだが、しかしそのために、パンフレットを作って知り合いに配ったり、病気が進行した時のケアの問題にまであらかじめ対処したり、ホームページで訴えたり、まるでボランティア活動をしているような積極性を感じる。そして本人がこれだけやってくれば、周囲はかなり楽になる。

彼女の行為を見ていると、担い手と受け手という区分け自体にあまり意味がないような感じがしてくる。要するに「活動」をしているのだ。自分のためでもあるし、その自分を助ける人たちの役に立つようなことでもある。

## ②サロンを主宰しながら、自分は見守られていた

一人暮らしの認知症の人がサロンを主宰していた。6, 7名の人が参加していたのだが、参加の理由を聞いたら、「見守りがてら」ですと。彼女はボランティア活動をしながら、見守られていたのだ。自助と共助が一体になっている！

自分は自宅を開放して、みんなに寄ってもらってサロンを開こうと思っただけで、それに呼応した人たちが、彼女の見守りも兼ねて、と考えたに過ぎない。町というのは、大抵、担い手になったり受け手になったりしているものなのだ。むしろそれをきれいに分けようとしている福祉施設の方が、異常なのではないか

## 5.問題解決の人材①

# アマチュア

日本人は専門家好きだ。社会問題が発生すると、すぐに専門家にお伺いをたてるし、「〇〇大学教授」の肩書も大変好まれる。しかし地域では、世話焼きさんと呼ばれる住民が、要援護者などの支援の必要な人を日々、支えている。犯罪被害者の会や裁判員裁判、検察審査会などでも、「素人」の住民がしっかり役割を果たしている。





## ①大小世話焼きさんが活躍。助け合いはすべて双方向

このマップで、緑色の2人が大型世話焼きさん。大体周りの人、10名ほどのお世話をしている。また、すぐ周りの数名の人におすそ分けをしたり、送迎をしてあげたりしているのが中小の世話焼きさんだ。彼らが、別に組織を作るわけではなく、何となく、阿吽の呼吸で連携しているにすぎない。それぞれが別々に行動しているのだ。

それだけではない。一人暮らし高齢者同士が見守り合ったり、また周りの人にニーズを発信したりしている。しかも、ほとんどが双方向であることが分かる。まさに助け合いだ。

80歳の女性が中心になって、花一杯の活動をしていることもわかる。彼女がお地藏様の所に花を植えたりしていて、それを皆が手伝っている。

## 2.こじあげ屋さんは世話焼きさんでも別格

自治会長の悩みはある老々世帯。夫が妻を介護中だが、妻に会わせてくれない。2度も断られ、これが最後と世話焼きさんを同道したが、それでも拒否。仕方なく引き上げようとしたが、世話焼きさんは上手にそれとなく、奥の部屋まで入り込んでしまった。するとそこに奥さんが倒れていた。「こじあげ屋さんのおかげで」と会長は感謝感激。

世話焼きさんと一口に言っても、いろいろな人がいる。それぞれ担っている役割が異なる。いま特に注目されるのが、こじあげ屋さんだろう。日本人は、お節介をするだけでも陰口を叩かれる社会だが、こじあげ屋さんはそれ以上の行為をしてしまう。

こじあけ屋さんにはたくさん出会ってきたが、本人はそんなにたいそうなことをしている自覚はなく、特別勇気が必要な活動とも思っておらず、ごくさりとやっ  
てしまっている。

アパートの隣室のベランダから、子どもを怒鳴る声がして、子どもを洗濯機に入  
れた様子。そして洗濯機のスイッチを入れた音。夫は妻に110番通報させ、仕切り  
を蹴り破り、子どもを救出した。

この人もこじあけ屋さんの一種といえるだろう。もし勘違いであればこちらが非  
難されてしまうが、世話焼きさんは人を助けることを優先する。こういう人がこう  
いう大事な時に動いてくれることで、社会問題はもっと容易に解決するのだ。

## ①友だちを押しかけ介護

「親しい友を看取るのは変ですか？」一朝日新聞の「声」の欄で、こんな問いかけ  
をした人がいた。投書の主は、千葉県に住む伊賀三江さんという79歳の女性だ。

伊賀さんには、20年来文通してきた同窓生の友人（男性）がいた。妻に先立た  
れて一人暮らしの彼は、末期の肺癌と診断されたが、療養できる施設がなく、子ど  
もも海外などにいるため、一人自宅で闘病するしかなかった。

それを知って彼の家を駆けつけた伊賀さんは、「私は時間だけはたっぷりある」  
と、その場で「押しかけ介護」を申し出たが、あっさり断られた。しかし自宅へ戻  
ってからも平常心でいられず、その1週間後、意を決して寝袋を抱えて彼の家へ行  
き、「今日から押しかけ介護をやります」と宣言したのである。

「その夜から彼のそばで眠り、食事を作り、足をさすり、下のお世話をし、できる  
限りの介護をした。友は1カ月後に亡くなった。最期は彼が願った通り、自宅での

静かな眠りだった」。

だがこれを、友人からは「たとえ親しくても、そのような行為には違和感がある」と非難されてしまったということで、冒頭の問いかけとなったのであるが、後日、同じ「声」欄に、伊賀さんの行為を称えるメッセージが2通掲載された。

「押しかけ介護に心を打たれた」という79歳の男性は、『『プライバシーの尊重』を隠れみのに、目の前で困っている人すら見ないふりをする人も多い』と指摘した上で、「これからは高齢者同士が男女を問わず助け合わなければならない時代を生きるのだ」と書いている。

伊賀さんの友人は、一つ屋根の下で夫でもない男性に寄り添うことに拒絶反応を起こしたのだろうが、この投書を読んだ多く的人是る、夫婦どころか親族でさえない他人が、わざわざこんな大変な介護を買って出たことに驚いたのではないか。

だが、血のつながりのない他人が介護を引き受けたり手伝ったりするという話は、意外にあるものだ。このように、病気の相手が他人であっても、いてもたってもいられずに押しかけて介護をしてしまうのが世話焼きさんなのだ。これは天性の資質であり、こういう人を養成することはできない。

## ②虐待家庭にこじあけ屋さんを派遣—制度的こじあけ？

「こじあけ」を制度としてやっているケースもある。

福岡の児童相談所は、ワーカーズコープに気になる家庭の訪問を委嘱。「子育てに悩んでいませんか」と接触し、虐待と分かれば、すかさず次の行動に。名古屋の児相は、元警察官を虐待家庭に派遣して子どもを保護していた。

児童福祉の専門家ではない、そういう意味では素人を上手に活用している事例だ。

素人を評価する点では、アメリカは優れた先進国といえる。

### 3. 普通の住民にもアマチュア力があつた

#### ① 自殺を思いとどまらせる力は素人が上だった

アメリカで変わった実験をした。自殺願望のある人に自殺を思いとどまらせるのに、プロと素人どちらの説得が効果があつたか、というのだが、結果は素人の力が上だった。プロは相手を客観視して冷静に対応するが、素人の方は、とにかく死なないうと、そればかりをしつこく説く。その熱意に、こんなに私のことを思ってくれる人がいるのなら、もう少し生きてみようかと思ひ直したというのである。

#### ② 司法の世界でも素人が活躍—裁判員制度も成功

裁判員制度ができてから大分たつが、これだけの成果が出るとは法曹関係者も思っていなかつたのでないか。一般の市民でも、立派に裁判員を務めあげることができるといふのは、大発見だ。彼らが、裁判のプロたちが作ってきた妙な慣例を次々と壊している。

## 5.問題解決の人材②

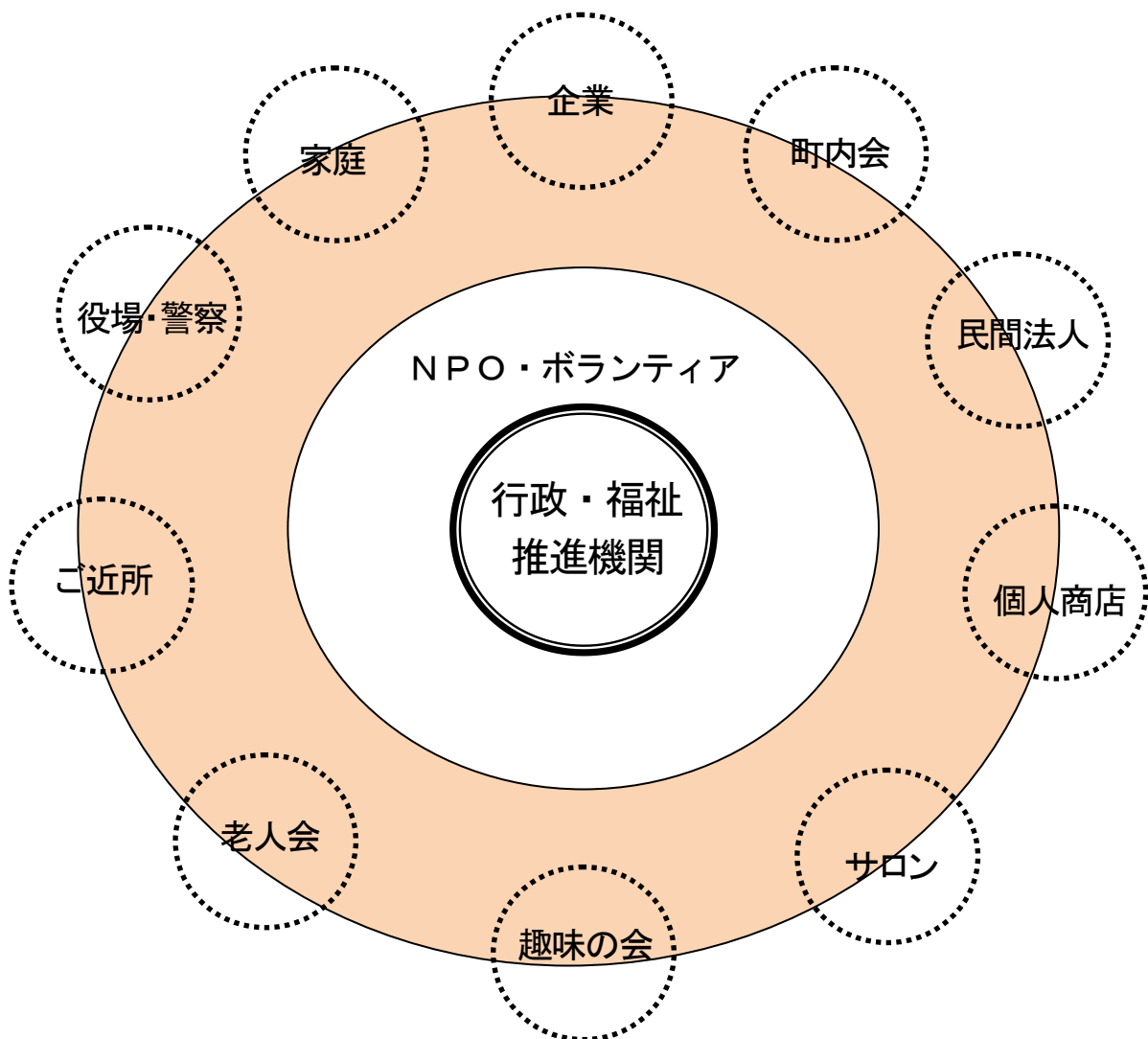
# ひらく

社会問題に取り組むのは、NPOだけではない。日本人は、日常の営みの中でさりげなく対応したいと思っている。コロナ禍ではトヨタが人工呼吸器を生産し、水着メーカーがマスク作り。クリーニング店が小学校のカーテンや上履きを無料でクリーニングしたり、仕上げた製品にかぶせる人型のビニール袋を活用して防護服を作り、病院に寄付した。「本業をひらく」活動である。老人クラブが認知症の人を仲間に入れれば「グループをひらく」。介護家庭が支援者を受け入れたり、他家の介護を手伝えれば「家をひらく」。みんながひらけば、膨大な社会資源が発動されるのだ。

## ■「ひらく」の解説

### 1.人材はどこにいる？

地域は下の図のようになっている。福祉の資源・人材はどこにいるのか。推進機関の次に、NPOやボランティアがいる。意図的に福祉活動をする人たちだ。



その周りに、地域のさまざまな人や組織、機関がある。点線で示した小さい円だ

が、私たちは、この小さい丸のいずれか、または複数に所属している。

## 2.各組織が窓口で地域の問題に取り組めば…

問題を抱えた人は、これらのどこかの組織にやってくる。その（たまたま接点のあった）組織が、その人の問題に関わってくれば、大いに助かるのだ。これを「組織をひらく」と私は言っている。

### ①コンビニに来る、不自然に厚化粧な女性客

あるコンビニに毎日、奇妙な女性客が来る。おしろいを分厚く塗り、真っ白な顔に真っ赤な口紅が異様に目立つ。よく見ると、ケガをした傷を隠すためにやっているようで、店員は、何らかの暴力を受けている被害者と察知し、半ば強引に警察に連れていき、解決につなげた。

### ②各組織に対内活動、対外活動の2つの機会

点線の小さな円を大きな円が通っている。この大きな線で区切られた小さな円の内側が地域との接点で、このいずれかに地域の問題がやってくる。これが対外活動だ。

それぞれの組織には、対外活動のほかに、もう1つの活動の機会が待っている。小さな円と大きな円が混ざった所の外側で、ここでは組織の仲間への関わり、つまり対内活動が行われる。認知症など、要援護の人を仲間を受け入れることも、立派な活動になる。

あるサロンでは、認知症の人も2人受け入れたが、ポットをコンロに乗せるなど、危ないこともする。「あんな人を仲間にするものじゃないのに」と、メンバーから愚痴も出始めた。そこでリーダーは宣言。「これからは、わがグループは『非常識の会』とする」。変なことをやっても誰も笑わない会。「グループをひらく」だ。

### 3.業種毎に本業の腕を生かせば、大変な資源力

この小さな円の中の企業が最大の資源と言えるだろう。それぞれの企業が本業の腕を生かせば大変な資源となるが、今はここがまだ眠っている状態で、災害や今回のようなコロナ禍になると、その力がフルに発揮される。

自動車メーカーがコロナ用人工呼吸器を生産。競技用の水着やラグビーのソックスのメーカーがマスク生産。各業種が本業の腕を時代の要請に応じてシフトすることで、強大な力が生まれる。これが「本業をひらく」だ。

企業の持っている力は、それだけではない。例えば企業が営業や宅配にまわる時、例えば一人暮らし高齢者宅を訪問する機会もあるだろう。その機会を生かせば、素晴らしい活動ができる。ヤクルトレディーが宅配ついでに一人暮らし高齢者の安否確認をしている。

#### ①企業活動の1つ1つが社会貢献になる

その他にも、生産工程に高齢者や障害者を組み込めば雇用促進になるし、社員教育のノウハウを生かして、公民館の社会教育の研修プログラムを作っている



企業もある。社員向けサービスを住民におすす分けする一たとえば社員向けの保育に一般家庭も受け入れれば、これも活動になる。

このように、企業の通常活動の1つ1つが、応用するだけで社会に貢献できるのだ。あるシニアグループが素晴らしい活動をしているので、リーダーにその腕をどうやって身に着けたのか聞いてみたら、企業の総務課長時代に身に着けたと言っていた。

## 4. 迷惑かけ屋さんも温かく受け入れる地域

どの地域にも大抵、迷惑かけ屋さんがいます。たとえば、早朝にピンポンと来る。玄関に出ると近所の女性が立っていて、「ヌカミソの付け方を教えて」。昼間来ればと言うと「今知りたい」。彼女が訪ねてくる家は13軒もある。断ると悲しそうな顔をするそうで、迷惑だが、みんな受け入れている。「集落をひらく」です。

### ① 5人死亡・5人負傷。それでも犯人を赦す

Terri Roberts, Mother Of Amish Shooting Perpetrator Cares For Her Son's Victims



アメリカの「ニッケルマイン乱射事件」では、32歳の白人男性チャーリー・ロバーツが、アーミッシュの小学校で少女たちを次々と撃ち、5人が死亡、5人が負傷したが、地元のアーミッシュのコミュニティは即座に、自殺した犯人への赦しを表明し、犯人の葬儀

にも参列し、犯人の両親を再びコミュニティに迎え入れた。

その信じ難い行動に感動が広がる一方で、一部では「そんな簡単に赦せるはずがない」「偽善だ」と、疑念や批判も生まれた。しかしこの経緯を調査した学者たちがまとめた本「アーミッシュの赦し」（亜紀書房）を読むと、そんな単純な話でな

いことが分かってくる。

アーミッシュの人々は、「赦す」と宣言することで、その努力を自らに課した。絶え間なく湧き起こる怒りと闘い、加害者の両親とあえてふれあうことで、憎しみの連鎖を断ち、コミュニティの絆を守り、愛や許しという善の力によって犯人に報いろうとする。聖書の教えに厳格に従おうとする彼らの信仰心に基づく行動ではあるが、人として誰しも学べる要素が、そこにはある。

その後の物語は、ほとんど知られることはなかった。しかしニッケルマイン周辺のコミュニティではひっそりと、淡々と、修復の努力が続けられていた。加害者の母親であるテリー・ロバーツさんが経験を語った音声教会のウェブサイトで公開され、その内容をもとに宗教関連のメディア「リリジョン」紙が記事を掲載したことで、加害者家族と被害者家族の驚くべき交流が明らかになった。(以下、同紙の記事「Terri Roberts, Mother Of Amish Shooting Perpetrator Cares For Her Son's Victims」より)

#### ◇「私たちはあなたを憎みません」と1時間以上も慰め

テリーさんはあの日、穏やかな10月の空の下、職場の同僚たちと屋外でランチを食べながら、事件現場へ急行する救急車のサイレンを聞いた。信仰心の篤いテリーさんは、いつもするように、救急車を待たれかのために祈りを唱えた。自分がだれのために祈っていたのかを知ったのは、夫からの電話で、息子の家に駆けつけてからだった。

はじめテリーさんは、息子は子どもたちを助けようとしてケガをしたのだと思った。「しかし息子は死んでいただけでなく、想像を絶する凶悪な犯罪の加害者だったのです」。元警官である夫のチャックさんは、タオルに埋めた顔を上げることができず、涙を拭き続けて皮膚がはがれてしまったという。

その夜、ニッケルマインから6マイル離れた夫妻の家を、ヘンリーさんという近所のアーミッシュの男性が訪れた。チャックさんは定年後、馬車で行かれない場所

までアーミッシュの人を車で運ぶ仕事をしていたのだが、もうアーミッシュの人々には二度と顔向けできないと言い、ヘンリーさんの顔を見ることができなかつた。しかしヘンリーさんは「私たちはあなたを憎みません」と1時間以上も慰め続け、ついにチャックさんは顔を上げて、「ありがとうございます」と口をきくことができた。

その後、被害者の両親を含むアーミッシュの人々がチャールズの葬儀に参列したり、夫妻の家を訪問するなどの交流を経て、事件から3ヶ月後、テリーさんとチャックさんは、被害者の家を訪問し始めた。テリーさんは生き残った被害者と母親たちを、自宅へお茶やランチに招待した。彼らのうち、特につらい思いをしていたのが、ロザンナ・キングちゃんの母親のメアリーさんだった。現在11歳のロザンナちゃんは重度の障害が残り、体を動かすことも話すことも食べることもできず、ロザンナちゃん自身、その変化にとっても苦しんでいたのだ。

それを知ったテリーさんは、「自分にも介護を手伝わせてもらえないか」と申し出る。毎週木曜、数時間をキング家で過ごすようになった。ロザンナちゃんの髪をとかし、風呂に入れ、シーツを交換し、バイブルを読んであげる。

始めの頃はいつも、帰りの道中、テリーさんは自宅まで泣き通しだったという。「ああ神様、こんなことはとても続けられません…」とつぶやいていた。しかしそれでも彼女は、木曜日が来るたび、キング家の扉をノックしたのである。

#### ◇関係を断絶すれば、憎しみや罪悪感は当時のまま残り続ける

顔を合わせるのもつらい間柄なのだから離れていけばいいものを、互いにこれほど苦しい思いをしてまでなぜ関わり合うのかと奇異に思う人もいるだろう。しかし彼らは、関係を断絶すれば、それぞれが抱える憎しみや罪悪感は事件当時のまま残ってしまうことを知っているのだ。このような関わり合いから何が生まれるのかは時が経たなければ分からないが、それでも彼らは、その「何か」をしっかりと見据

えている。

## 5.要援護者と資源の両面で「ひらく」

### ①老人クラブに要援護の仲間と介護グループを受け入れる

ひらくと言えば、組織に他人を受け入れるとか、その資源を社会のために生かすといった意味があるが、もう1つ、資源を受け入れるのも「ひらく」に相当する。例えば老人クラブの場合、これからはこの「ひらく」をやらなければ成り立たなくなっている。

超高齢者ばかりで構成されたこの組織は、メンバーだけでは存続できない。すでにリーダー級は80歳代になり、会長のなり手がおらず、解散に追い込まれているといった話をよく聞く。ではどうするか。2つの「ひらく」を実行する以外に方法はない。

あるクラブでは、50代の自治会長に老人クラブの会長を兼ねてもらっている。人材と要援護者の両者を受け入れて、人材がその要援護者を支えてくれればいいのだ。あるクラブは、40代の準会員を受け入れている。60代はまだ入会しないが、その人たちを「ボランティア」会員として受け入れている。それなら入りましょう、というわけだ。

こうして老人クラブは、さまざまな人材を受け入れることで、ようやく独り立ちできるようになっているのだ。もっと発展させれば、これからは超高齢社会に入り、90代の人や要介護の人が増えるのだから、この人たちも仲間に加えることが求められている。そのために介護資源を導入するのだ。介護グループと連携している老人クラブもあった。こうして老人クラブは、一方で要介護者も受け入れ、そのために介護の人材も受け入れる。両方から「ひらく」をすることが、唯一の生き残り策

となった。

## ②介護で「家庭をひらく」のも両面型

介護家庭が、自宅をオープンにし、どなたでもお手伝い歓迎。その代わり介護技術を手ほどきする。それに要介護の母も参加する。介護している家の手伝いもする。枕元で趣味教室も開く。これを「家をひらく」と言う。

これからは介護の時代。介護は介護保険で、となっているが、超高齢社会で、これからはそう簡単にはいかないかもしれない。それに、「スロー」の時代を志向するのなら、各自が介護資源ともなっていくことが求められる。

ただし、その介護をお嫁さんだけにやらせるというのでは困る。親族だけでなく、ご近所の人たちにも参加してもらおうという新しい「ひらかれた介護」を作り出していく必要があるのだ。

ここに、介護者ができる「ひらく」を並べてみた。この「ひらく」にも、2つの面がある。まずは周りに介護を手伝ってもらおうという意味での「ひらく」。もう1つが、「他の介護者の手伝いもする」という意味での「ひらく」である。

◆ある介護者は、自宅のドアに「介護中」という看板を掲げているとか。オープンにただけでなく、お手伝いをお願いしたいという意思表示でもあるのだ。

◆おむつ替えを手伝うというのは、さすがに無理としても、介護者が困っていること、例えば子どもの預かり、夕飯づくりならできるということもある。ある介護者は、「〇〇通信」を発行して、そこに自分のニーズも入れて、友人たちに送っている。「介護が忙しくて、子どもを遊園地にも連れて行けない」と書くと、それなら私が、とだれかが手をあげてくれる。

- ◆ただ「助けてくれ」だけでは、住民は納得しない。介護中でもやれることはやるという姿勢が大事だ。町内会の班長を引き受けて、その代わり、班の会合はわが家で開いてもらう、という手もあるのだ。ある介護中の主婦は、要介護者の枕元で趣味グループを立ち上げた。そこでできたものを販売して、ちょっとした収入にも。
- ◆ある介護者は、ボランティアへのお返しのため、例えば介護される側の気持ちとかあるべき姿などを、寝たきりの姑に語ってもらったと言う。それもまた活動といえる。
- ◆周りに上手に手伝ってもらっている人は、自分もまた、ご近所の他の介護者の手伝いもしている。

- ①介護をしていることをオープンにする
- ②ご近所にも介護を手伝ってもらう
- ③介護中でもできることはする（町内会役員、PTA役員等）
- ④介護される側もその立場でできる役割を果たす
- ⑤ご近所で介護をしている人の手伝いもする

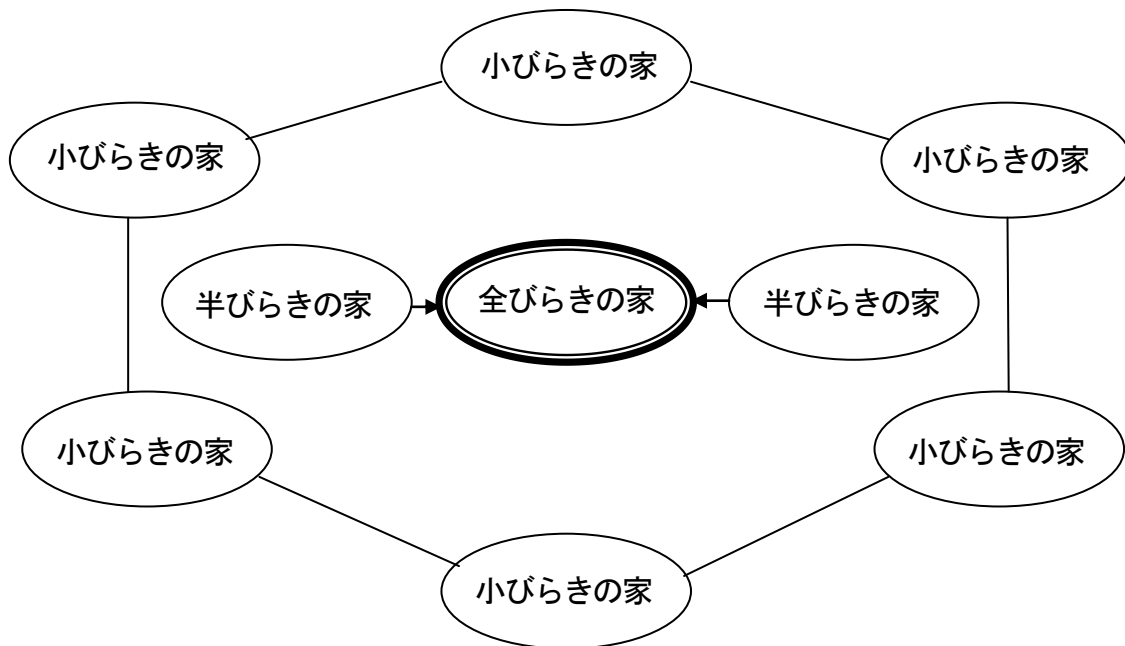
### ③全びらきと半びらき、小びらきで子どもを守れるご近所

「家をひらく」と言えば、東京で一時期、児童館づくりが大流行した。「小さな小さな児童館」と言う。主婦が子どもを集めて、自分の得意技を生かした活動をする。児童図書館とか、おやつ作り児童館など多種多様だった。

その中の1つ、川崎市で影絵児童館を開いたK子さんの活動を10年近く継続観察したことがある。初めはただ娘の誕生祝いにお友達を呼んで上演してあげたのだが、それが終わったら、「おばさん、次はいつやるの?」。子どもたちに導かれながら、結局10年も続いた。

K子さんがある文化事業団体にお化け大会用のテントを申請したら、実際にK子さんがやっているかを見に来て、ご近所の人たちにも話を聞きたいという。その時、ご近所さんがこう証言してくれたということだ。「ここはね、K子さんのおかげで、子どもに何かあると、みんなが飛び出す横町になったのよ」。

これを具体的に説明すると、こうなる。まずK子さん宅が「全びらき」の家になった。数年すると、K子さんのスペアになりうる家、つまり「K子さんが留守の時は、うちにおいで」と子どもに言ってくれる家が、2，3軒できる。「半開きの家」だ。それから数年たつと、「うちはひらけないけど、K子さん達が何かやる時は手伝うよ」という「小びらき」の家が数十軒でてきた。これら3種のひらいた家の連携によって、「子どもに何かあると、みんなが飛び出す」ご近所になるというのだ。



## 6.問題発生防止策①

# さかのぼる

難問が解決できず困っている時に思うのは、「もっとずっと前から対策を立てていたら、楽に解決できたのではないか」ということだ。起きてしまってからでは対処が難しいことを知っているはずなのに、その「さかのぼる」がなかなかできない。

大学の終わりに一斉に就活をして苦労するよりも、小学生の頃から1人ひとりの能力開発に力を入れるべきではないか。介護失業に備えて、大卒で就職と並行して、自身の能力開発に努めよう。



## ■「さかのぼる」の解説

### ①「虐待をする親自身、虐待を受けていた」を対策に生かせないのか？

妻が夫から暴力を振るわれたり、子どもが虐待で殺される。たいていの場合、その親自身が幼少の頃、親に虐待されていたことが判明する。又は父親が母親に暴力をふるっていたとか。その因果関係がはっきりしている以上、子どもの虐待死を防ぐために、何らかの形で対策に生かせないか。

海外では最近、DV加害者に対してなるべく初期のうちに本人のトラウマ治療（幼少期の虐待によるもの）を行ったり、もっと遡って、家庭内暴力が起きた家庭の子どもがトラウマを受けていないか注視し、何らかの問題行動が出ればトラウマの治療を受けられるようにするといった対策が始まっている。

また、そのような経験をした当事者自身が、虐待などをしてしまう前に、自分や家族を守るためにできることはないか。その人の行動について、過去にまで遡って、何らかの責任を意識させられることは普通はないだろうが、そろそろそういう考え方も必要かもしれない。

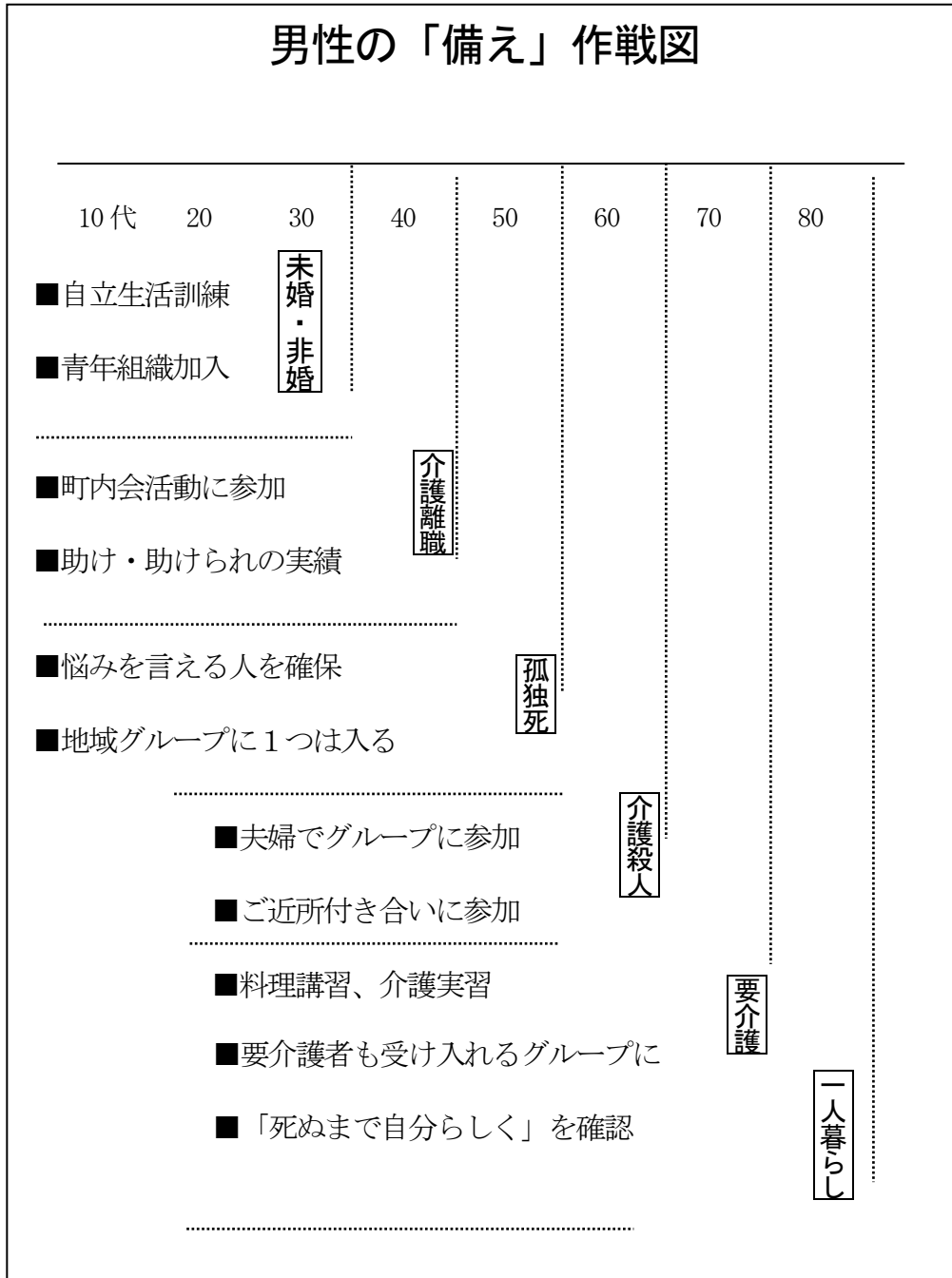
## 1.社会問題の中心にいる「男性」

### ①社会問題の中心人物は男性？

高齢社会でより深刻化する、引きこもりの高齢者や孤独死、介護殺人などの問題は、どちらかと言えば男性の問題と言える。としたら、仕事の問題もさることながら、企業人として活躍している間にも、一方で1人の人間として、人とふれあい、助け合うという行為を、どこかで体得する必要がある。まさにこれが福祉問題なのだから。

高齢にならなくても、親を介護するときに虐待問題が生まれたり、いわゆる8050問題の当事者になるのも男性だ。一人暮らしの高齢の親のことでも、たまに訪問はしても、日常的に見守りなどをしてきているお隣さんに一言挨拶することもできない。その一人暮らしの親が要介護になったら、周りが一生懸命に面倒を見てくれているのに、それに対して何の反応も示さないだけでなく、そのご近所さんたちに一言の相談もなく、突然親を施設に入れてしまう。地域ではこのように、問題の当事者の多くは男性だ。

今の時代、学生までは、ただ成績や偏差値にばかり目を向けて、自分の生き方について深く考える機会もなく大卒まで一挙に到達してしまう。その後は企業で仕事中心の生活になり、定年後になって、とつぜん地域に戻ってくるが、今さら自立したり地域に馴染むのは難しい。その男性の老後の問題を議論する前に、そこに到達するための生き方の問題をもっと議論すべきだろう。これが「さかのぼる」という発想が要求していることなのだ。



## ② 45歳頃から退職後にフリーで生きる計画を立てるとか

定年退職して、その後は何をしたらいいのかわからないというのは、何かおかしい。会社で45くらいになったら、自分の退職後の生き方を考えて、そのための準備をしておく必要はないのか。自分に最も合った技術を定年まで磨き、退職と同時に、フリーで活動するとか。又は45で思い切ってフリーになるか。

## 2. 「備え上手」の女性をキーマンに

### ① 「百年後を見通せるのは女性」

この「さかのぼる」という発想を持っているのは女性のような。「ボランティア労力銀行」という制度を作った水島照子さんに、どうしてこういうことが女性にできるのかと聞いたことがある。この制度は、要援護者の下に駆けつけて、何らかのサービスをしたら、1時間1点が「通帳」に記録される。これが3000点ぐらいになったら、老後に一人暮らしで要介護になっても、生きている間は貯蓄を取り崩すだけで賄えると彼女は言っていた。それだけではなく、自身が貯蓄を取り崩しながら、一方で親族の介護も、その貯蓄で賄える。

水島さんは私の質問にこう答えた。「女はね、百年後のことを考えることができるのよ」。長いスパンで人生を考えられるというのだ。老後のことについて、今から必要な準備をしようというのが女性ができるというのである。

### ② 要介護になった時のために今から準備

一人暮らしのK子さんは、将来に備え、いろいろ手を打ってきた。自宅にご近所さんを集めてサロンを開く。趣味グループでも助け合いを仕掛ける。ボランティア・グループでも。洋裁塾では500人もの教え子を育てた。みんな「先生に何かあったら来るからね」と言ってくれる。親戚との仲も良い。もう大丈夫でしょと言うと「いや、まだまだ」。備えはこれで十分ということはないのだと。

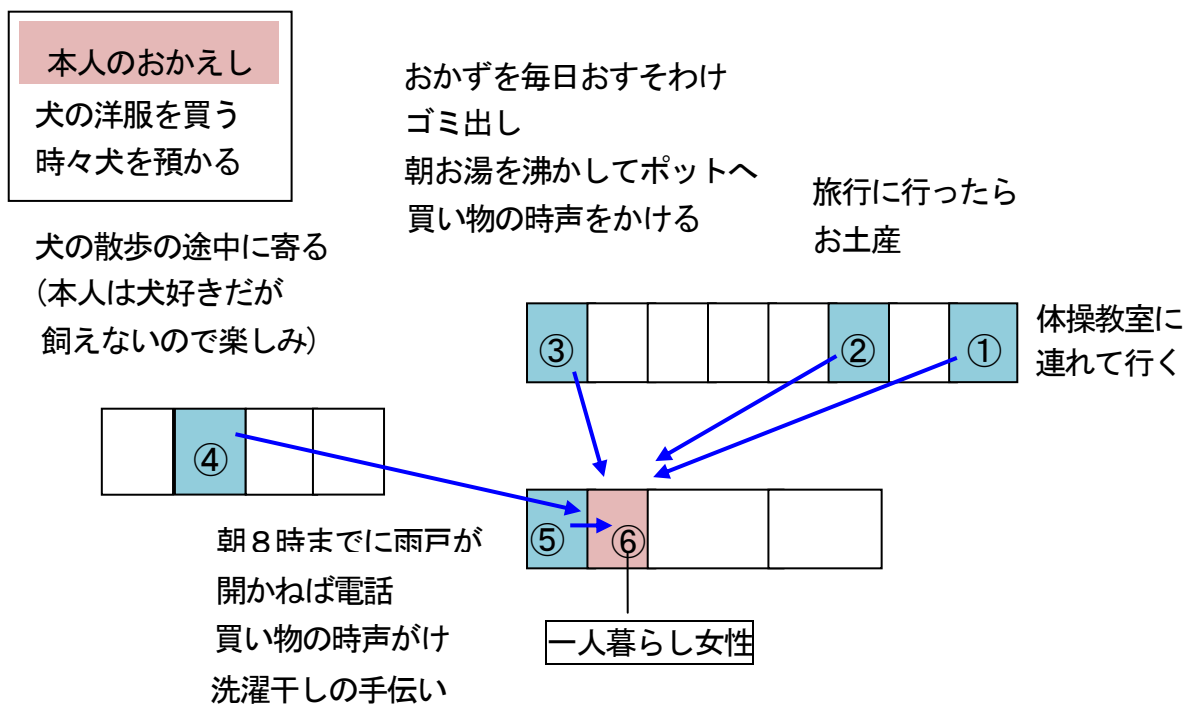
こういうことを実践しているのは、大部分が女性だ。というより、そういう準備

をしている男性を見たことがない。以下のような男性には時々お目にかかるのだが。

一人暮らしのT子さん宅には、ご近所さんが毎日、支援に来る。モーニングコール。お湯を沸かしてポットへ。おかずのおすそ分け。ゴミ出し。買い物の時に声掛け。洗濯物干しの手伝い。体操教室に連れ出しなど。なぜこんなにしてくれるのか。ご主人が生前、彼らに尽くしたことのご恩返しなのだ。

住民懇談会の席で、よくある話だ。リーダー級の女性が私に言う。「あそこに、超高齢の男性がいるでしょ。あの方が要介護になったりしたら、私たちが面倒をみることにしているのよ。あの方はこれまで、民生委員とか町内会長などで地域に尽くしてきたから、今度は私たちがあの方の面倒をみるのよ」。

男性が「さかのぼる」のセンスを持っているのではなく、女性がそういうセンスを持って、地域に貢献してきた男性に関わっていたのだ。あるグループでは、女性メンバーが亡くなると、その人の旦那さんの面倒をみんなでみることにしている、と言っていた。



### 3.子どもの頃から準備しておく

#### ①ご近所に目の細かい網を張っておけば…

「ひらく」で紹介した、影絵児童館のK子さん。

Kさんが自宅で開く影絵児童館に集まる子は20～30名。粗暴な子が1人いて、特に「良く」なっているわけではないが、「でも、ここに来ている間は、これ以上悪くはならないのよ」とK子さん。Kさんがご近所に目の細かい網を張っているから、こういう子がそれ以上悪くならない。これがないと、社会に張られた目の粗い網（警察など）でようやくかかってくる。でもその時はもう遅い。

「ひらく」で述べたように、Kさんは、ご近所の「全びらき」と「半びらき」、そして「小びらき」の家の3者で、「子どもに何かあると、みんなが駆けつけるご近所をつくった。これも「さかのぼる」行為の1つだろう。こういうご近所をあらかじめつくっておけば、そのご近所から問題のある子どもは生まれにくいし、生まれても、その子の問題が一定以上は大きくならないのだから。

考えてみれば、こういうご近所ができていれば、児童虐待とかいじめっ子などの問題が未然に防止されるかもしれない。親の愛情に恵まれなかった子どもでも、親身に接してくれる大人が身近に1人でもいれば、悪くなりにくいという研究結果もある。あらかじめ備えておくというやり方は、活動自体はそれほど大変ではないのに、それによって生まれる成果は、大変に大きいと言うべきで、これこそが「さかのぼる」の利点と言える。

#### ②専門職の人が幼稚園で筋のいい子を見つけて才能を伸ばす教育を

どこかの幼稚園が、大工さんや音楽家などの専門職の人たちを先生に委嘱して、体験を話してもらい試みをしているという。どうせなら、いろいろなことをやらせてみて、この子は筋がいいなと思ったら教育をして才能を育てていくといったこともできれば、大学卒業前になって一斉に就活をして苦労することもないのではないか。

### ③「さかのぼる」を制度上に組み込む

そう考えると、「さかのぼる」を個々の人に依拠している間は、ほんの一握りの人しかできないから、「さかのぼる」を社会制度に組み込んでしまうといいということだ。個人個人で「さかのぼる」ことを考えて行動していくのは大変だが、制度にこの考えが組み込まれていれば、誰でもできることになる。

## 4. 予兆で動くことはできないのか

長崎で起きた女子高生による殺人事件。これが起きることを、本人を診ていた精神科医が察知していたという。小動物を殺して解剖したりしていたこの生徒について、人を殺す危険があると予言していたのだ。また、父親を金属バットで殺そうとした時に、面談した教員に「人を殺したかった。誰でもよかった」と殺人願望を告白していたが、教員も校長も、教育委員会に報告することさえしなかった。そして、生徒は実際に人を殺した。これだけの予兆があった時点で、もっと本気で動くことはできなかったのか。

### ① 3つの餓死事件で危機の兆候に気づいていた人は？

同じような時期に起きた、3つの餓死事件。それらの事件で、接点にいた人、危

機に気づいていたはずの人はだれか？

### ＜札幌市白石区で起きた母子餓死事件＞

シングルマザーと3人の子が餓死。母は①3つの職場（スナックと居酒屋）を掛け持ちで過労。最後はすべて退職。②子どもの不登校で通常勤務は困難。③生活が厳しくサラ金に手を出す。催促に悩まされる。④料金未納でガスを止められる。⑤過労と冷え込みで寝込む。⑥友達数名にも借金。⑦店で掛買い。子どもが隣人に「お金、貸して」。⑧生活保護申請したが却下。

### ＜同じ白石区で起きた姉妹餓死事件＞

40代の姉と知的障害の妹。①収入は妹の障害年金だけ。「生活が苦しい」と生活保護の窓口へ。②姉は脳外科を受診していた。医者は続けて受診するよう言ったが、それ以降来なかった。しかしそのまま。③ハローワークに行ったらしく申請用紙が自宅に。④妹の通所で障害者施設にも行っていた。⑤料金未納でガスは止められた。最終的には姉が脳血腫で死亡。妹は「絶対に外へ出ないように」という姉の言いつけを守って、姉の脇で餓死。

### ＜大阪・豊中市で起きた高齢姉妹の餓死事件＞

裕福な家庭だったが、最後は極貧。①隣人に「食べ物を買うからお金を貸して」と来た。「服装は汚れ、白髪が長く伸びていた」。②銀行は通帳の残高がゼロだと知っていた。③電力会社、ガス会社は料金未納で電気、ガスを止めた。④税金が払えず建物の強制執行。⑤国保の担当者は保険料滞納を知っていた。

## ◇「重要な接点にある人」とは？

3つのケースから、本人と重要な接点にある人を絞り込んでみると…

### ①「当人と接点にいた人」は5～10人はいた

札幌市の母子餓死では10人、姉妹餓死では5人、大阪の姉妹餓死では10人は



いたはず。

## ②隣人は「衝撃的な事実」を見た

「食べ物を買うからお金を貸して」。「服装は汚れ、白髪が長く伸びていた」。本人だけではどうしようもない段階に来ていたことが推測される。

## ③当事者と利害関係のある人は薄々知っていた？

借金を頼まれた知人は本人の窮状が分かっていたはず。ガスを止めた会社は相手が凍死する可能性があることを承知していたであろう。

## ④最終的には役所の窓口に来ていた

生活保護の窓口に来ていた。申請の意向を示していたケースも。

## ◇重要人物を絞り込んでいくと

この3つの事件分析から、重要な「接点にある人・組織」が絞られてくる。

## ①隣人は「衝撃的な事実」を見た

まず当事者の隣人は、危機の前兆の最終段階を、その目で見ている。母子餓死では「おばちゃん、お金貸して」と何度もインタホンを鳴らされた隣人。子どもが「食べ物がないのでお金を貸して」と来るのは、よくよくのことであろうと推測できたはずだ。

豊中市のケースでは、2人が（白石区と同様に）「食べ物を買うからお金を貸して」と来たこと、また服装は汚れ、白髪が長く伸びていたという事実を隣人は把握していた。さいたま市で起きた家族3人の餓死事件でも、最後の段階で妻が隣人にお金を貸してと来ていた。隣人は「役所へ行ったら」と断ったら、「それなら結構です」と言って亡くなった、とその男性は語っていた。

## ②当事者と利害関係のある人は薄々知っていた？

この場合多くは企業だが、個人もある。母子餓死事件では、①職場（スナックや居酒屋）は掛け持ち勤務で過労気味であることは知っていたし、その後、次々と仕

事を辞めた時、無収入になっていくことも推測できた。②彼女に借金を頼まれた貸金業者や知人友人も、返せなくなったことで窮状は推し量ることができた。③掛買いを頼まれた店も、彼女の窮状が理解できた。④学校は三男が不登校になった時点で、母子の置かれた状況がある程度把握する機会があったかもしれない。⑤ガス会社は札幌の冬にガスを止めたら相手はどうなるかは容易に推測できた立場にある。

札幌の姉妹の事件の場合、脳外科や障害者施設、ハローワーク、生活保護担当者は、一度は彼女が顔を出し、心配な家族であることを把握し、次回もやって来るだろうと思っていた。しかし来なかった。その場合にどう行動すべきか、という問題がある。ガス会社もしかりだ。

### ③最終的には役所の窓口に来ていた

追い詰められた家族は最終的には役所の窓口に来て来る。その時窓口担当者がどう対応するかが、この種の事件を防ぐためには最大のポイントになりそうである。母子餓死では生活保護の申請を断った。そのあとに何が生じるかは、担当者は知らねばならない。

札幌の姉妹餓死では、「申請の意向」を漏らしていたという。しかしその後は来なかった。ならばどうするか。豊中市の事件では、申請はしなかったが、国民健康保険料を滞納していた。強制執行官も当然二人が追い詰められたことに気づいた。だから役所の担当者にその話を持っていった。しかしその担当者は動かなかった。

## 6.問題発生防止策②

# 権力の抑止

学校に警察官を導入したら、などと言うと、学校どころか専門家もマスコミも仰天してしまう。学校は聖域らしいのだ。その結果、いじめっ子や虐待をする教師に対抗できずにいる。密室で弱者と強者を対峙させれば、力は必ず乱用される。こんな当たり前のことが、問題の解決の場で持ち出せないというのは、おかしいことではないか。

## ■ 「権力の抑止」の解説

### 1.いじめや職員の暴力。原因は分かっている

教員から生徒への、また施設職員から入所者への暴力や性的虐待はなくなる。そのたびに出される解決策は「研修の徹底」。まさに百年一日の如し。問題解決能力の未熟さを痛感させられる。

いじめや不登校問題の克服をめざしたフリースクールの先駆・「東京シューレ」でさえ、指導員による性暴力が発覚した。もはや「研修の徹底」で解決できる次元を超えているのは明らかだ。

何が問題なのか。このことについては、はるか昔に既に答えが出ている。

数千年も前に、古代ローマの哲学者がこう言っている。「絶対的権力は絶対的に腐敗する」。研修の不足や職員の人格の問題ではなく、権力の抑止策が抜けていたに過ぎないのだ。

### 2.地域に聖域をつくれれば暴力の温床になる

学校も地域だ。当然、警察官の目が届くようにする必要がある。同じように、家庭も地域だ。暴力的な親を抑止するワーカーが派遣されるべきである。自分たちで勝手に聖域を作るべきではない。そこが暴力の温床になるのだから。

しかし、たとえば学校という教育の場に警察権力を入れるなど、とんでもないと言われるだろう。私にはどうして学校をそういう意味の聖域にしたいのかが分からない。結局、聖域にした付けが出ているのだ。いじめっ子と言っても、中には、も

はや教師では太刀打ちできないような生徒もいるし、ある教師からは、こんな話も聞いた。「俺たち教師は、職員室ではおとなしくしているけど、教室に行けば自分の天下だからね。学級王国と言うんだよ」。

## ①力の差が大きすぎる場合、悪質な「遊び」が生まれる

いじめっ子といじめられている子、教師と子どもなど、密室で対峙する二者の力の差が大きい場合、どういうことが行われるだろうか。そこには、ある特徴がある。よく新聞に載るのが老人ホームでの職員による入所者へのいじめや暴力だが、入所者2人を対面させてキスをさせるとか、相手の顔を平手打ちにする所をスマホで撮って公開するとか。要するに、面白がってふざけているのだ。これが、両者の権力関係に異常な差があった時によく起こる現象だ。教師が特定の生徒に嫌がらせをしたり、いじめっ子たちがとる行動にも、これに似た要素が見られる。

この現実を放置するというのは、ちょっと理解に苦しむ。今の学校や老人ホームには、この類の問題を解決する当事者の資格がないというべきだろう。地域や社会が入っていく必要がある。欧米では、そのような取り組みがすでに行われている。

## ②「スクールポリス」一校内に警官が常駐

### ◇学校と地域社会を結ぶ役割も

「スクール・ポリス」と言うと、いかつい警察官が校内で子どもを取り締まる怖いイメージが浮かぶが、アメリカでの一般的な名称は

「School Resource Officer」(スクール・リソース・オフィサー)で、「リソース」という言葉が示す通り、校内の問題を防止・解決するために地域から送り込まれる有益な「資源」という認識だ。また学校という孤立した場と、



ラス・スウィフトさん (ボイシー警察広報映像)

地域内の様々な資源とを結ぶパイプ役という意味合いも含まれている。

イギリスでは「Safer School Partnership」（セイファー・スクール・パートナーシップ）と呼ばれ、学校に常駐する警察官が、学校関係者や保護者、また若者に関わる校外の様々な職業の人と協働して校内の問題を解決していこうという姿勢に重きを置いているのが特徴だ。いじめ問題は重視されている課題の1つで、警察官は加害者、または被害者になる可能性のありそうな生徒を早期に見つけ出して関わっていったり、いじめのターゲットになりやすい新入生のサポートなども行う。イギリス司法省の広報ページによれば、2011年には450ヵ所以上の地域で取り組まれたという。

ここでは、アメリカの「スクール・リソース・オフィサー」の活動を詳しく見てみよう。2010年に出されたアメリカ司法省の報告書によれば、学校に警察官を常駐させる方式はここ20年で全国に広まり、現在では公立学校のほぼ半数が取り入れている。彼らが担う役割は主に①防犯、②法律の執行、③問題解決、④地域資源へのつなぎ役、そして⑤教育であるという。

スクール・リソース・オフィサーは、もともとその地域の警察署に所属する警察官だ。スクール・リソース・オフィサーとして選任された人が、特別なトレーニングを受けた上で各学校に派遣されている。

実施の仕方には地域で差があり、成果を客観的に把握できるような調査はまだこれからということだが、生徒の問題行動をただ警察官が厳しく取り締まるようなやり方では、あまりうまくいかないようだ。

重要なのは、その学校専属の警察官が校内の人間関係に溶け込み、生徒とも教師とも信頼関係をつくっていきながら、問題の芽を早期に発見して解決していくという姿勢である。教師と違い完全に中立的な立場で、事件の防止・解決の役割に徹することができるので、いじめやケンカ、薬物や飲酒問題等への対応だけでなく、生

徒の人生相談や家庭での悩みにまで応じているという。

各学校や警察署が公開しているスクール・リソース・オフィサーの活動風景やインタビューから、彼らの活動をまとめてみよう。

### ①校内を巡回しながら、生徒と個人的な関係を築く

アイダホ州ボイシーの中学校でスクール・リソース・オフィサーを務めるラス・スウィフトさんの一日は、廊下をぶらぶらしながら生徒とハイファイブを交わしたり会話をすることから始まる。そうやって毎日、それぞれの子の今の状況を確認し、必要とあれば立ち止まって話をしたり悩みを聞いたり、宿題を手伝うこともあるという。

### ②校内のオフィスで相談に乗る

校内にはスウィフトさん専用のオフィスがあり、「友だちから嫌がらせの携帯メールを受け取った」という女子生徒が駆け込んで来たり、遠足中に揉め事を起こした生徒に感情のコントロールのし方を教え、クラスに戻したり。どんな悩み事、生徒間の問題にも応じるので、「私はカウンセラーのような存在でもあります」。

### ③いじめの標的になりやすい生徒をガード

ワシントン州キングス・カントリーの高校4年生、ジェネ・リハさんは、活発なスポーツ少女だったが病気で片足を切断。復学した彼女のサポーターになったのが、この高校のスクール・リソース・オフィサーであるエリック・ホワイトさんだ。「本

物の警官が私の味方としてそばにいて、助けが必要な時に話を聞いてくれるなんてクールよね。彼は、私を守る壁になってくれるの。すごくユーモアもあって、悩みも話せるわ」とジェネさん。

フロリダ州パームビーチにある中学校のスクール・リソース・オフィサーは、障害を持つ子ども



ジェネさんとホワイトさん  
(キングス・カントリーTV)

たちの特別支援学級にしょっちゅう足を運び、「こいつらは俺のクラスみたいなもんさ！」と、彼らを特別扱い。彼にすっかり慣れ親しんだ子どもたちが、手助けが必要な時やいじめに遭った時にいつでもSOSを発せられるように努力している。

#### ④身の守り方、仲裁のし方を指導

スクール・リソース・オフィサーは、「いじめから身を守る方法」などについて、授業も行っている。パームビーチの中学では、生徒間の問題を、暴力を使わずに自分たちの力で解決する方法を教える「暴力の加害者と被害者、傍観者のためのプログラム」を教えているが、その結果、生徒の仲裁力がつき、校内での暴力が減ったという。

#### ⑤課外活動にコーチとして参加

課外活動でも積極的に生徒と関わっているスクール・リソース・オフィサーもいる。スウィフトさんは授業時間が終わるとバスケット部のコーチに変身するし、若い女性警察官が問題のある女子児童を集めて読書クラブを結成し、一緒に読書をしながら学んでいるという事例（フロリダ州パームビーチ）もある。荒れた家庭で育つ子は、身近にロールモデル（生き方の手本にできる大人）がいないことが多いため、その役割を引き受けているのだ。

#### ⑥情報を生かして事件の防止や解決

生徒と個人的な関係を築き、信頼を得ることで、様々な情報やSOSが入ってくる。それを問題の早期発見や、解決に生かしているのだ。

ミシガン州ミッドランド市の高校のスクール・リソース・オフィサー、マシュー・バーチャートさんは、「生徒と親密な関係を築くことが一番重要なこと」と強調する。「彼らのことを心から気にかけて、彼らのやること、彼らの人生に大きな関心があるということを示すのです。彼らの生活で今何が起きているのか、お気に入りのスポーツは何なのか—そういったことをつながることができれば、彼らはより気軽



に私たちに話しかけ、自分に起きていることを話してくれます」。

ファーゴ・サウス高校のクリス・ポッターさんのもとには、毎週5件から7件、生徒のグループ内の問題について情報が寄せられるという。「子どもたちは私にそういうことを教えたいと思っていますが、密告者として仲間に知られることを恐れており、その壁を越えるには、その子と関係を築き、それだけの信頼を勝ち得なければなりません」。

### ⑦教師の相談相手にも

生徒の問題についてはスクール・リソース・オフィサーに助言を求めたり、解決を頼ったりできるので、教師たちは学業指導に集中でき、気持ちも楽になるようだ。「何か問題に気付けば彼らに相談する」という教師が多く、校長も頻繁にスクール・リソース・オフィサーと情報交換をしている。

ベテランで高齢のスクール・リソース・オフィサーが小学校に常駐し、年下の教師たちと子どもたち双方にとって「頼れるおじいちゃん」になっているという事例もあった。

### ⑧問題が起きれば、校外の資源と協働して対応

アメリカ司法省の報告書に「地域資源へのつなぎ役」という役割も記されていたが、孤立しがちな学校にとって、これも重要な役割だ。たとえば子どもから家庭の問題を相談されれば、親に接触し、解決の手助けになりそうな関係機関を教えるといったこともするし、司法省の報告書には、いじめ問題での連携事例が取り上げられていた。

オハイオ州のサウス・ユークリッドでの事例だが、いじめが多く起きていることに気付いたスクール・リソース・オフィサーが、校内のいじめスポットを特定し、そこにサブ・ステーションを設けて集中的に監視を行う一方、地域の大学の研究者やカウンセラー、ソーシャルワーカーなど多数の専門家と特別チームを結成。カウ

ンセラーと教師による当事者との話し合い、クラス内での対話のほか、いじめにどう対応していいかわからずに尻込みしていた教師たちにトレーニング・プログラムを実施して対応方法を指導したり、保護者にいじめ情報をメールで発信して対応を求めるなどした結果、停学の件数は40%減り、廊下でのいじめ行為は60%減り、体育館でのいじめ行為は80%減ったという。

その後のアンケート調査では、いじめに対する生徒の意識がポジティブに変化し、「問題が起きた時には教師に相談すればきちんと対応行動を起こしてくれる」という信頼感も生まれていることがわかった。教師たちは、トレーニング・プログラムは効果的で、これまでよりも真剣にいじめの問題を話し合えるようになったと報告している。親たちも肯定的に受け止め、「今後はいじめ問題についてもっと情報提供のメールを送ってほしい」と要望しているという。

### 3. 児童虐待を防ぐための多様な抑止力を

家庭もまた、聖域にされている。児童虐待事件で恐ろしい暴力や子どもの死が繰り返されても、それでも児相の職員は家庭に入れない。社会による恐るべき怠慢だ。

以前、親から虐待を受け続けていた十代の少女が、テレビでこう証言していた。「家という場は、他人が入ってこれない。だから親から暴力を受ける子にとっては、どこにも逃げ場がない、暗黒の場なのだ」と。

「1人ひとり」というキーワードの所でも取り上げたが、子どもは両親の所有物ではなく、1人の人格を持った人間なのである。

家庭が親と子でワンセットになっているというのは、文明の所で述べた「ハードであり、最も基本的なハードなのだ。しかしハードを作ったら、それに見合ったソフトを作らねばならない。そうでないととんでもないことになる。

## ①父親の両親と同居、親戚ネット、お節介さんのネットなど

例えば祖父母と同居する。あるいは、ご近所に親戚ネットが張り巡らされている。あるいは長屋のように、世話焼きさんなどがご近所において、親子のプライベートのことにも関わられるような関係ができているとか。

そういうソフトができて初めて、当たり前の家庭ができるが、今はそれらのソフトがほとんど消えてしまっている。新たにソフトを作り直さねばならない。

## ②生協の人や、元警察官が出動へ

そこで、新しい取り組みをしている児相がある。西日本のある地域では、警察官が児相に常駐する取り組みが始まっているという。また、繰り返しになるが、福岡の児相ではワーカーズコープと連携し、子どもの泣き声などの通報が入ると、2人のワーカーが連れ立ってその家庭を訪問する。いきなり詰問するのではなく、「お子さんのことでお悩みではありませんか？」というように声をかけて、その家に入り込む。名古屋の児相では、元警察官が虐待が疑われる家庭を訪問し、虐待が行われていることが分かれば、強引にでも子どもを保護する。

## ③イギリスの「家庭介入」の育児版

英国では、問題のある家庭にワーカーが入り込み、問題の解決から家事や育児の仕方までを親身に指導する「家庭介入プロジェクト」が行われているが、その育児版とも言えそうなプロジェクトも全国で始まった。「初めて出産する若い母親を対象に、特別な訓練を受けた保育士（家庭保育士）が集中的かつ体系的な家庭訪問を行う」という、「Family Nurse Partnership Programme」（家庭保育士パートナーシップ・プログラム）だ。米国で開発されたプログラムをモデルに、国内での実験的な実施

成果を全国に広げていく。

英国には「健康訪問員」制度があり、子どもが生まれた家庭を保健師が訪問して子育て支援や健康チェックを行うが、それだけでは未熟な親を支えられないため、



より徹底した関わりを行おうというものだ。

主な対象として想定されているのは、問題を抱えやすい10代の母親とその夫である。機能不全家庭に育つなどして、

子どもの育て方や家庭のきずき方を知らないまま親になるケースが多く、生まれた子がまたその影響を受けることになる。こうした悪循環を断ち切るのを目的とした「早期介入型」のプログラムで、関わりは妊娠初期に始まり、子どもが2歳になるまで続く。訪問頻度は、毎週または隔週だ。

### ●児童虐待やネグレクトが半減

注目されるのは「パートナーシップ」という言葉が使われているところだ。プログラムを実施するにあたり最も重要視されているのが、親と保育士の間「強い絆」をつくり、何でも相談できる味方になることなのである。その上で、育児に必要なことを手取り足取り教えながら、両親が抱える経済的自立などの問題にも介入していく。



カーディフ大学のステファン・ロールニック教授は、このプログラムが「対象となる親を評価することよりも、一緒に育児に参加することに重点を置いている」点に注目する（政府広報ビデオより）。

これまでの実施の成果として、母親が前向きな態度で自信を持って子育てができ

るようになり、乱暴なしつけや育児のストレスが減少しているという。ガーディアン紙によれば、米国では30年以上前から実践と研究が続いているが、プログラム参加者の子どもを追跡調査した結果、児童虐待やネグレクトが48%減少し、成長した子どもが非行に走り逮捕される割合が59%減少したという。

同紙はまた、普段は公的な支援を寄せつけない夫婦でも出産期には手助けを受け入れやすくなるという事実が、プログラムの背景にあると指摘する。

## 4.権力を抑止する文化をどうやってつくるか

### ①日本の文化に権力の抑止が組み込まれていないのか

しかし解せないのは、日本の文化にそういう権力への抑止という機能が組み込まれていないのか、ということだ。権力は暴発するから抑止力をもって警戒すべきだという考え方が、日本人は嫌いらしいのである。政治の世界ではチェックアンドバランスを成り立たせているのに、家庭や学校、福祉施設などでは、がらりと変わってしまう。

### ②社会は文明化されても、人間は根本的に変わらない

私たちは、文明社会に生きているのだから、しかもこんなに進歩した社会ができているのだから、もはや「権力は必ず暴発する」などと野蛮なことは言うべきでないと思っている人がいるかもしれない。

しかし、それは間違いだ。社会は文明化されたが、人間そのものが進化したわけではない。日本社会で起こることを見ても、いまだ状況に応じて、恐ろしく未熟な面が表面化する。文明化は進歩と言うが、善悪両方に進化しているのだ。ITをはじめ、どんな凄い技術も、役に立つ一方で、必ず悪用する人たちが出てくる。政治

の世界を見ても、経済の世界を見ても、人間が進化しているという兆候は見えない。相変わらず私たちは野蛮なのだ。だから、暴発させる隙を作ってはならないのだ。

### ③控え目な権力抑止策もあることはある

チェックアンドバランスの仕組みを大っぴらに作るのは気が進まないというのなら、もう少し控え目なやり方をしてもいいとは言える。

老人ホームの超古株のボランティア。施設長も処遇で困ると、彼女に相談を持ち掛ける。入所者も、悩み事は彼女の元へ。彼女が両者の橋渡し役だったのだ。そして権力の抑止力にもなっていた。

いかがだろうか。控え目な権力抑止策とは、例えば施設の場合、このような方法になる。こういう人物が施設内にいると、彼女を中心にして、お互いがけん制し合うことで、力のバランスが成り立つのだろう。

### ④坂本龍馬に張り付いた何某の本当の役割は？

司馬遼太郎の「竜馬がゆく」の中で、薩長連合が成立し、維新政府の顔ぶれの検討が始まった。そこで大蔵大臣は誰がいいかということで、北陸の〇〇藩に捕らわれの身となっている〇〇がいいということになった。竜馬が彼を説得する役に選ばれたが、その竜馬に1人が張り付くことになった。「旅は道連れ」というわけだが、この人物は彼の監視役でもあるのだ。旅の道連れでありながら、彼の監視役。どちらか分からない。こういう味な抑止力もあるのだ。こういうやり方が日本の文化には合うのかもしれない。

## ⑤基本的なハードだけあって、ソフトを開発していない

学校、福祉施設など、文明が作り出したものは、ある意味で機能的だ。まさに機能させるために作られたものなのだ。子どもと教師に分け、両者だけが学校という場で対峙する。研修を受け、資格を取得した教師が、生徒に教える。これは機能そのものであり、こういう仕組み自体は、ハードである。これを真に機能するものにするためにソフトが存在する必要があるのだが、それが皆無に近い。

超強者を抑止する存在がおらず、子どもたちの間でも弱肉強食の世界で、それを抑止する存在もない。それだけでなく、数十名の仲間の中で、うまくやっていける資質がない生徒をどう守るか。やっていけない生徒がやむを得ず不登校になる。この仕組みの問題をソフトで補う必要があるのに、そうではなく、この不登校の生徒を異常と見て済ませているのだから、勝手なものだ。

福祉施設も同様で、超強者の職員と、要介護や障害のある人をストレートに同居させる。最高に危険な状態を作っているのに、その危ない関係を抑止するソフトがない。文明というのはこのように、ただ教育を最低限成り立たせる、あるいは福祉というものを最低限成り立たせることしかできない。その不備を補うソフトを何も持たないで、弱者は無防備な状態にさせられている。せめて意図的にソフトを導入しなければならない。例えば地域住民が学校に入り込んで、教師と生徒という傾斜的な関係に割って入る。あるいは警察官を配置する。ある小学校では、校内にコミュニティセンターができていて、そこで市民と生徒がまじりあっていた。こういうものでも、抑止力にはなるのだ。

---

## 住民流福祉総合研究所

**木原孝久**

〒350-0451  
埼玉県入間郡毛呂山町毛呂本郷 1 4 7 6 - 1  
TEL049-294-8284  
kiharas@msh.biglobe.ne.jp  
<http://juminryu.web.fc2.com/>

---



